



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	出稼ぎ農民研究における社会学的分析視角の展開（その3）：レーニンにおける出稼・移民論の到達点と課題
Author(s)	浅野，慎一
Citation	北海道大學教育學部紀要，56，233-318
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29374
Type	departmental bulletin paper
File Information	56_P233-318.pdf



出稼ぎ農民研究における社会学的分析視角の展開（その3）

——レーニンにおける出稼・移民論の到達点と課題——

浅 野 慎 一

Peasants Working away from Home : The Development of Sociological Perspectives (Part 3)

Shinichi ASANO

目 次

《第1部》マルクス・エンゲルスのアイルランド人出稼・移民研究 北海道大学教育学部『紀要』48号所収	
《第2部》1890～1920年代における出稼・移民研究の諸潮流 北海道大学教育学部『紀要』55号所収	
《第3部》レーニンにおける出稼・移民論の到達点と課題	233
序 章 レーニンにおける出稼・移民論の分析視角と全体構成	234
第1章 1905年革命以前の国内出稼・移民論	245
第1節 ロシア資本主義の発展と出稼労働の号盾	245
第2節 出稼労働の進歩的意義	251
第3節 出稼・移民労働と「労働の社会化」	256
第4節 初期レーニンの出稼・移民論における課題	261
第2章 「2つの道」理論・帝国主義論と出稼・移民論	264
第1節 資本主義発展の「2つの道」とシベリア移民政策	264
第2節 帝国主義論の展開と2月革命の総括	271
第3節 帝国主義論と「現代の民族移動」	277
第3章 10月革命以後の国内人口移動と外国人労働者の流入	284
第1節 戦時共産主義政策と都市・農村間人口移動	284
第2節 新経済政策と外国人労働者・在外ロシア人労働者の流入	291
終 章 レーニンにおける出稼・移民論の展開過程	294
《総 括》移民・出稼労働者研究の現代的発展のために	297
第1節 出稼・移民における資本主義的諸矛盾と封建制の残滓	298
第2節 植民地主義・帝国主義と移民・出稼労働者	300
第3節 理論展開の機軸と現代的意義	303
資料 (1) レーニンの出稼・移民に関する文献目録	304
(2) 引用・参照文献目録	309

序 章 レーニンにおける出稼・移民論の分析視角と全体構成

本稿では、19世紀末～20世紀初頭にかけて、後進資本主義から帝国主義、そして社会主義へと巨大な変貌を遂げたロシア・ソヴェトにおける出稼・移民労働者を素材として、その社会変革を主導したB. И. レーニンの出稼・移民論の研究視角の発展過程を内在的に検討する。

検討に際しては、以下の3点に特に留意する。

第1に、レーニンが、現実に出稼・移民化を余儀なくされたロシア人民の生活と主体的な諸変化をいかに把握し、それを自らの社会変革・革命の展望にいかに位置づけていたのかという点に検討の機軸を据える。従来、日本の出稼研究において、初期レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』¹⁾の記述が、しばしば断片的に引用されてきた²⁾。しかし、出稼や移民に関するレーニンの研究視角それ自体に焦点をあて、その発展の内在論理を明らかにする理論的な試みは、ほとんど皆無に近い。むしろレーニンの出稼・移民論は、農業問題とりわけ農民層分解論や帝国主義論に直接関係する限りで、いわば周辺的・間接的に考察されてきたのである。しかしながら同時に、このことは、ロシアにおける資本主義の発展や帝国主義の形成、さらにそれらの上に成り立つ社会革命の展望・戦略が、出稼・移民論と密接な関連を有していたことを意味している。そこでレーニンの出稼・移民論をひとつの切口として、ロシア資本主義論、帝国主義論、そして社会変動・変革論を逆照射することは可能であろうし、またこのことは、前稿³⁾で述べた本研究の基本的なねらいからして不可欠でもある。

第2に、レーニンの出稼・移民論の展開過程を、現実のロシア社会、特に出稼・移民の客観的状态との相互関係の中で考察する。もとより、ロシア・ソヴェトにおける出稼・移民の実態を体系的に把握することには、様々な困難がつきまとう。日本で本格的にロシア史研究が開始されたのは1950年代後半からであるが、当初は1917年革命の肯定的評価を前提として、そこに至った社会的要因を実証的に解明する研究が主流であった。しかし1960年代末以降になると、研究の深化に伴い、ロシア革命が内包する様々な矛盾、とりわけ農民運動・民族運動とロシア革命の関係・葛藤が照射され始めた⁴⁾。このような研究潮流の変化の中で、取り扱われる出稼や移民の実態やその位置づけも、大きく変わってこざるをえないのである。とはいえ、革命前後のロシア史に関する実証研究の中に、様々な出稼・移民の実態が描き出されていることも、また事実である。そこで本稿では、そうした多様な出稼・移民の事例をふまえ、それに対するレーニンの認識と評価、及び、認識しなかったことの意味を考察しつつ、レーニンの理論形成過程を追っていきたい。このことは、レーニン自身の理論的到達点と課題を相対化し、鮮明にする上で重要であろう。

第3に、各段階毎のレーニンの社会認識を、次の時期の新たな理論的展開を可能にする理論的到達点と限界との統一として把握する。1960年代後半以後、レーニンのロシア社会認識、革命戦略そのものに対する批判的再検討が提起されてきた。その中で、マルクスとレーニンのロシア認識の断絶性を強調する視角⁵⁾や、スターリン主義の源泉をレーニンに求める視角⁶⁾、さらにレーニン自身の前期と後期の断絶性を明確にする視角⁷⁾等々から研究が進められつつある。もとよりこれらはいずれも重要な問題を提起している。しかし、こうした視角それ自体が、レーニン「礼讃」と裏返し的一面化を内包する危険をしばしば孕むことも否めない。レーニンの理論がたとえスターリンと共通する要素を有していたとしても、同時にまたそれをスターリン主義に転化させなかった要素との統一の中で把握しなければ、レーニンの理論を理解したことにはならないであろう。また後期のレーニンが客観情勢の変化に伴って新たな理論的深化を遂げたことの基礎には、

表1 B.N.レーニンの出稼・移民関係文献一覧

	著作・論文・評論・書評	綱領草案手稿	覚書・抜粋・注解	演説・政綱の草稿・記録	手紙	電報
1893	(1)(2)					
1894	(3)					
1895	(4)(5)					
1896		(6)				
1897	(7)(8)(9)(10)(11)					
1899	(12)(15)(17)(14)	(18)			(13)	
	(16)					
1900	(19)					
1901	(20)(21)(27)(28)		(22)(23)(24) (25)(26)(29)			
1902	(35)(36)	(32)(33)(34)				
1903	(37)(38)		(30)(31)			
1905	(39)(40)					
1907	(42)(43)(44)			(41)		
1908	(45)					
1911	(49)					
1912	(50)(51)		(46)			
1913	(52)(53)(54)(55) (56)(58)(59)(60) (61)			(57)		
1914	(62)(63)					
1915	(64)(65)		(47)(48)		(66)	
1916	(85)(86)(87)(88) (89)(91)(90)		(67)(68)(69) (70)(71)(72) (73)(74)(75) (76)(77)(78) (79)(80)(81) (82)(83)(84)			
1917		(94)		(92)(95)(96)	(93)	
1918	(99)			(97)(98) (100)(101)		(102)
1919	(114)(116)			(104)(105) (112)(113) (115)	(106)(109)	(103)(107) (108)(110) (111)(117) (118)
1920				(121)(119) (122)(123) (124)(125)		(120)(126)
1921	(136)(139)			(127)(137) (138)(140)	(128)(129) (130)(131) (133)	(132)(141)
1922					(134)(135) (142)(143) (144)(145) (146)(147)	

資料）稿末の資料(1)より作成。執筆期間が2年以上のものは最終年次に入れた。

表2 レーニンの出稼・移民関係文献一覧(2)

	ロシア国内			ロシア→国外			国外			国外→ロシア	
	出稼	移動(担ぎ屋を含む)	移民	出稼	移動	移民	出稼	移動	移民	移動	移民
1893	(1)(2)		(1)(2)								(1)
1894	(3)		(3)								
1895	(4)	(4)(5)	(4)			(4)					
1896	(6)	(6)	(6)								
1897	(7)(8)	(7)(9)	(7)(9)								
	(9)(11)	(10)(11)	(10)								
1899	(12)(13)	(12)(18)	(12)(13)						(17)		(12)
	(14)(18)		(14)(15)								
			(18)								
			(19)								
1900											
1901	(20)	(20)(28)	(20)(27)	(29)			(25)	(27)	(22)(23)(24)		(21)
1902	(33)(34)	(32)(33)	(33)(34)								
	(36)	(34)(35)									
1903	(37)	(30)(37)	(37)								
		(38)									
1905	(40)								(39)		
1907		(44)	(41)(44)						(42)(43)(44)		
1908	(45)	(45)	(45)								
1911	(49)										
1912			(50)(51)				(46)				
1913	(54)		(52)(53)	(56)	(55)	(60)		(60)	(59)(60)(61)	(61)	(61)
			(55)(57)		(56)	(61)					
			(58)								
1914	(62)								(63)		
1915		(64)						(64)	(47)(48)(64)		
									(65)(66)		
1916								(67)(70)	(68)(69)(70)		
								(73)(77)	(72)(74)(91)		
								(83)(85)	(75)(76)(77)		
								(87)(88)	(78)(79)(80)		
								(71)(89)	(81)(82)(84)		
								(86)	(85)(90)		
1917	(92)		(93)(95)			(94)		(94)	(94)(96)		
1918		(99)(100)	(97)							(98)	
		(101)(102)									
1919		(104)(112)	(107)							(110)(111)	
		(106)(113)	(109)								
		(105)(114)	(117)								
		(115)(116)									
		(118)									
1920		(122)(123)						(119)	(119)	(121)	(126)
		(124)(125)									
1921		(136)(137)								(127)(130)	(128)(133)
		(138)(139)								(131)(135)	(129)(134)
		(140)(141)									
1922										(142)(145)	
										(143)(144)	
										(146)(147)	

資料) 稿末の資料(1)より作成。執筆期間が2年以上のものは最終年次に入れた。

表3 移動経路別文献一覧（ロシア国内での移動を除く）

出身地		移動先	アメリカ	ヨーロッパ		南米・カナダ・オセアニア	先進国	外国	ロシア
				(国内)	(国外)				
第一期	アメリカ	移民	(17)(27)						(12)
	ヨーロッパ	出稼		(25)(29)					
		移民	(22)	(22)(23)(24)					(1)(3)(12)(21)
	ロシア	移民						(4)	
	国外	移民	(17)(27)			(17)			(12)
第二期	アメリカ	移動	(64)						
		移民	(47)(48)(64)(75)						
	ヨーロッパ	出稼		(46)					
		移動	(77)		(60)(71)(73)(85)				(61)
		移民	(60)(59)(76)(77)(61)(79)(83)(65)(63)		(44)(65)(84)	(65)(77)(68)(59)		(70)(44)(65)	(61)
	日本・中国	移動	(83)						
		移民	(66)(72)(74)(77)				(42)(43)		
	ロシア	出稼			(56)				
		移動			(60)				
		移民	(60)(61)						
	後進国	移動					(60)		
		移民					(42)(43)(60)(85)		
	国外	移動			(67)(70)(86)(87)(88)(89)				
		移民	(47)(48)(64)(39)(69)(82)(75)(91)	(81)		(78)			
	第三期	アメリカ	移動						(130)(131)(135)(142)(145)(146)(147)
			移民						(128)(129)(133)(134)
		ヨーロッパ	移動		(94)				
		ロシア	移民		(94)				
		後進国	移民					(94)	
		国外	移動	(119)					(98)(110)(111)(121)(127)(143)(144)
			移民	(119)					(126)

資料）稿末の資料(1)より作成。執筆期間が2年以上のものは最終年次に入れた。

従来の理論的限界が露呈しただけではなく、何よりも、新たな客観情勢を取り込みうるだけの理論的萌芽がより以前に用意されていたことを示している。このような弁証法的な把握においてのみ、各時期のレーニンの理論的特質とその展開過程は理解しうるのである。

さて、レーニンが遺した出稼・移民問題に関する論稿は、著書、及び、雑誌・新聞・小冊子等のための論文や評論が58本、党綱領の草案と評注が6本、様々な読書ノートや論文作成のためのノートが29本、演説や政綱の草案や記録が24本、そして手紙や電報が30本等々、少なくとも合計147本に及んでいる（稿末の文献目録を参照）。

これらが書かれた時期は、1893年春から1922年12月まで約30年間にわたり、大きく3つ、細かくは5つの時期に区分できる（表1～3参照）。

すなわちまず第1期は、1893年から1905年革命に至る時期である。この時期、レーニンは、主に論文や評論等の形で、ロシア国内における出稼や移住・移動の問題を考察した。それらを集約する主要な著作が、1896年1月から1899年1月にかけて執筆された『ロシアにおける資本主義の発展』⁸⁾である。

第2期は、1906年のストルィビン改革以後、1917年10月革命に至る時期である。この時期の主な対象は、移民を中心とする労働力移動であった。ただし、この第2期は、1906年から1913年の前期と1914年から1917年の後期とに、さらに細かく区分しうる。すなわち前期には、シベリアへ

表4 《出稼》における出身・移動先の区分（国内移動）

			出身階層・出身地						
			農民・農村労働者			出身階層記述なし		職人・手工業者	その他
			中央農業諸県・工業諸県・地域記述なし			中央農業諸県・地域記述なし		工業諸県・地域記述なし	
出稼先階層・地域	賃労働	非農業	都市・工業諸県		(8)(12)	(12)	(12)(54)	(12)	
			地域記述なし		(9)		(7)(12)		
		農業	工業諸県		(12)	(12)(45)	(12)		
			辺境地帯	(12)	(12)	(12)	(12)		
			地域記述なし		(11)		(12)		
		一般	都市・工業諸県		(12)(18)(49)				
			辺境地帯	(45)	(12)		(12)		
			地域記述なし		(12)	(1)(2)(3)(4)	(12)(37)	(6)	
	出稼先階層・地域	出記述なし	都市・工業諸県		(20)				
			地域記述なし	(12)	(1)(2)(3)(4)				
				(45)	(11)(33)(34)				
	その他	手工業	都市・工業諸県		(36)(37)(40)				
		小営業	辺境地帯		(62)(92)				
		マニユ	地域記述なし	(12)					
		その他							(4)(40)
			(不浪人)						(12)(13)
			(出稼人)						(14)

資料）稿末の資料(1)より作成。

表5 《移動》における出身・移動先（国内移動）

			出身階層・出身地							
			農民・農村労働者			出身階層記述なし			職人・小生産者	
			中央農業諸県	都市・工業諸県	地域記述なし	中央農業諸県	都市・工業諸県	地域記述なし	都市・工業諸県	地域記述なし
移動 先 階 層 ・ 地 域	非農業 賃労働	都市・工業諸県				(7)(12)	(12)			
		辺境地域				(7)	(12)			
		地域記述なし				(7)				
	農業 賃労働	工業諸県			(12)	(12)				
		地域記述なし			(12)					
		賃労働			(5)(7)	(12)	(12)		(5)	
	一般	工業諸県			(12)	(12)	(12)			
		辺境地域	(12)			(12)	(12)			
		地域記述なし			(11)(12)	(4)(12)				
	職人	辺境地域							(12)	
	小生産	地域記述なし							(12)	
	担ぎ屋	都市			(99)(100)(101)					
					(102)(112)(113)					
					(114)(115)(116)					
					(118)(122)(123)					
					(124)(125)(136)					
					(137)(138)(139)					
					(140)(141)					
	移動先 階層 記述 なし	工業諸県	(44)(64)		(12)(30)					
		辺境地域	(44)(64)		(30)					
		地域移動の自由			(7)(9)(12)(20)			(4)(6)		
		記述移動の制限			(35)(37)(33)			(30)(18)		
		なし			(34)(28)(30)			(32)(37)		
		なし			(10)(38)			(9)		
	その他			(12)	(12)(20)(45)	(105)	(12)	(12)(7)		
				(105)		(106)	(104)	(45)		

資料) 稿末の資料(1)より作成。

の国内移民、及び、ロシアからアメリカ・ドイツなど国外への労働者出稼・移民など、総じてロシア人の移民や出稼が、主に論文や評論等の形で、中心的に論じられている。これに対し、後期には、ロシア以外の諸外国間、とりわけヨーロッパや日本・中国からアメリカへの移民、及び、ヨーロッパ内部での移動・移住等、総じて後進資本主義国から先進資本主義国への労働者の移民や移動の問題が、主にノートや注解等の形で、集中的に取り扱われている。なお、この後期を集約する主要な著作が、1916年1月から6月にかけて執筆された『資本主義の最高の段階としての帝国主義』⁹⁾である。

そして第3期は、1917年の10月社会主義革命以後である。この時期には、出稼・移民に関するまとまった論文や著作は少なく、演説・政綱の草稿や記録、手紙や電報等に断片的な記述がみられるのみである。この第3期も細かく2つの時期に区分しうる。すなわち、1917年から1920年の戦時共産主義政策の下では、主に演説や政綱の草稿および電報の中で、ロシア国内の都市から農村への移民・移動の問題、また農村から都市へのいわゆる「担ぎ屋」の問題が論じられている。他方、1920年以後、新経済政策の下では、アメリカをはじめとする資本主義諸国から社会主義口

表6 《移民》における出身・移動先（国内移動）

			出身階層・出身地							
			農民・農村労働者			出身階層記述なし				職人・小生産者
			中央農 業諸県	工業 諸県	地域記述 なし	中央農 業諸県	工業 諸県	辺境地帯	地域記述 なし	工業 諸県
移動 先 階 層・ 地 域	賃労働者	工業諸県		(12)	(7)(12)				(12)	
		辺境地帯			(9)					
		地域記述なし			(20)					
	職人・小 生産者	工業諸県			(12)					(12)
		辺境地帯								(12)(12)
		地域記述なし								(12)
	農民→ (農業労働者)	辺境地帯	(3)(12) (41)(45) (50)		(21)(44)				(1)(2) (12)(44) (45)	
		地域記述なし			(44)				(44)(45)	
	移民先 階層 記述なし	工業諸県			(4)(10)	(12)				
		辺境地帯			(27)(53) (57)(58)	(12)	(104)		(15) (107)	
		中央農業諸県					(117)	(50)(53) (55)(57)		
		地域 記 述 なし			(9)(12) (33)(34) (20)(37)				(6)(7) (18)	
					(3)(12) (37)(95)				(9)(97) (132)	
					(3)(4) (6)(51) (19)(34) (44)(52) (132)				(13)(14)	(12)

資料) 稿末の資料(1)より作成。

シアに流入する外国人労働者の問題が、主要には手紙の中で論及されている。

ところで、これまで一口に「出稼」「移民」と述べてきたし、また現にそのように翻訳されることが多いのであるが、実際には、レーニンは、極めて多様な「出稼」「移民」概念を微妙に使い分けている(表4～9参照)。

まず第1に、国境を越えた移動と国内移動との区別がある。すでに触れたごとく、第1期にはロシア国内における出稼・移民、第2期前半にはそれに加えてロシアから国外への出稼・移民、第2期後半には諸外国間での移民・移動、第3期前半にはロシア国内での移民・移動、そして第3期後半には国外からロシアへの出稼・移民という形で、各時期の主要なテーマは変遷してきている。とりわけその中でも「移民」については、主として国内での移民に用いられている“расселения”と国境を越える移民を示す“эмиграция”“иммиграция”，そして国内外を問わない“переселение”“выселение”“колонизация”等々が区別されている。また出稼と移民の双方を含む「移動」に関しても、主に国内での移動を念頭においた“передвижение”と国外から

表7 《出稼》に関する原語翻訳対応

	原語	訳語(大月書店版)	文献No.
ロシア 国内出稼	отхожий промыслы	出稼・出稼仕事・出稼営業 出稼業・出稼労働	(4)(7)(9)(11)(12)(13)(14) (33)(34)(49)(92)
	отхожий рабочий	出稼労働者	(12)(37)(45)
	отход	出稼・賃仕事に出かける・離村	(2)(12)(36)(40)(45)(62)
	отходчик	出稼人	(12)
	отхожие заработки	出稼・出稼労働	(12)
	отпускаться	出稼・よそに出て行く	(1)(62)
	отправляться (на заработки)	賃仕事に出かける	(4)
	уходить (на заработки)	出稼にでかける・出稼する よそに仕事に出かける	(2)(3)(4)(12)(37)
	бродить (на заработки)	放浪する・渡り歩く・移動する 渡り鳥的に・さまよい歩く	(3)(12)(36)(37)(49)
	странствовать	放浪する	(45)
	перекочевывать	放浪する	(12)
	ходить (из конец в конец)	あるきまわらせる	(6)
	строе (заработки)	よそでの仕事	(3)(12)
	пришлый (рабочий)	外来の(労働者)・渡り(労働者) よそからきた(労働者)	(12)(45)
	искать заработка на строге	よそで賃仕事をさがす	(1)
	фабричный рабочий имеет семью в деревне	工場労働者が農村に家族をもつ	(8)
	приходящий в города деревенский дюд	都市にやってくる農村人	(20)
	рабочий крестьян	農民的労働者	(18)
	фабричный и заводский рабочий который сохранять с деревней, имеет там родню, семью, ездят туда	農村とのつながりを保ち、農村に親戚や家族をもち、農村に行き来している工場労働者	(18)
	рабочие ... при необходимости содержать семью, ... в другом городе или в деревне	家族を他の都市または農村で扶養しなければならない労働者	(54)
その他の 出稼	отход	(ロシア→国外・外国国内)出稼	(56)(25)
	отхожий промыслы	(一般理論)出稼	(12)(17)(30)
	отхожий рабочий	(一般理論)出稼(労働者)	(17)
	путешествовать	(外国国内)移動する	(29)
	пришлый (рабочий)	(外国国内)渡り(労働者)	(46)
	бродить (на заработки)	(一般理論)出ていく・流浪する	(12)

資料) 表1に同じ。

表 8 《移動》に関する原語翻訳対応

原語	訳語 (大月書店版)	国内移動・移動先				第3期の移動	外国 ↓ロシア	ロシア ↓外国	外国 (移動)
		賃労働	小 営 業	記述なし					
				工業諸 県・辺 境等へ	移動の制 限・移動 の自由				
переход	移動	(12)							
переводиться	移転(する)	(12)							
движение	移動	(12)		(12)					
подвижность	移動・移動性	(7)(11) (12)		(7)(12)					(64)
уходить (в города)	(都市に)去る	(5)	(12)						
выход	移出	(12)							
идти	出ていく	(7)						(60)	
прихода	移入・転入・流入	(12)							
передвижение	移動・移転	(4)(12)			(4)(6)(7) (9)(10)(12) (18)(20)(28) (30)(32)(33) (34)(35)(37) (38)				
поселение	移動				(12)				
перемещаться	移動(する)			(45)					
перевести	移転			(37)					
отвлечение	転出			(12)					
бежать	逃げ出す			(20)(44) (64)					(64)
двигать	送り込む・ 移動させる					(104)(106) (105)			
отправлять	送り込む					(106)			
мешочники (мешочничество) (мешочническая торговля)	担ぎ屋 (担ぎ屋商売) (担ぎ屋商売)					(99)(100) (101)(112) (113)(114) (115)(116) (122)(123) (124)(125) (136)(137) (138)(139) (140)(141) (102)(118)			
перебраться	移動(する)								(60)
чужой (рабочий)	外国人(労働者)							(60)	(60)
иностранный (рабочий)	外国人(労働者)						(98) (110) (111) (127)		(60)(67) (70)(73) (86)(87) (88)(89) (94)(119)
заграничный (рабочий)	外国人(労働者)								(86)(87) (126)

資料) 表1に同じ。

表9 《移民》に関する原語翻訳対応

原語	訳語 (大月書店版)	ロシア国内						外国				
		賃 労働 者	職 人	農 民	移民先階層記述なし			国内	国内 外 不明	国外	ロシア ↓ 外国	外国 ↓ ロシア
переходить	移住・移る		(12)	(12)								
переводворение	移住			(50)								
пришлые	移住してきた			(97)								
новосёл	新移住者			(50)	(57)							
приселять	移住させる			(50)								
заселение	入植・移住			(1)	(15)				(64)			
расселения	移住			(44)		(12)	(34) (51) (44) (52)					
выселение	移出・移民 離村・移住			(12) (50)	(4) (27)			(23)		(22) (63) (96)	(4)	
выходить	移住(する)				(15)							
выводить	移住させる						(93)					
поселение	移住				(57)			(17)				
переселение	移民・移住 移動・移住	(7) (20) (12)	(12)	(3) (44) (95) (50) (12) (45) (41)	(10) (27) (12) (58) (53) (109) (53) (55) (57) (107)	(6) (12) (20) (34) (3) (9) (18) (33) (37)	(3) (13) (19) (32) (6) (14) (44)	(48)	(27)	(43) (60) (91) (63) (68) (85)		(12) (13) (126)
обратный переселение	逆移民				(50) (53) (55) (57)							
колонизация	入植・植民 移住・移民		(12)	(12) (50)	(12)		(7)		(47)			(1) (12) (128) (129)
эмиграция	移住・移入 移民	(12)		(12)	(12)			(22)		(22) (42) (43) (61) (59) (65) (70) (76) (77) (85) (79)	(61)	(134)
иммиграция	移住・移出 移民			(12)					(75) (81)	(39) (42) (43) (60) (47) (64) (76) (69) (70) (74) (72) (77) (78) (80) (82) (66) (85) (90) (119)	(60)	
ввозить	移入させる									(60) (94)		
приезжий	移住してきた										(94)	

資料) 表1に同じ。

の外国人労働者を示す“ностранный рабочий”“заграничный рабочий”等々が区別して用いられている。

第2に、出稼・移民の出身階層、及び、移動先階層の違いに基づく区別もある。まず「出稼」においては、農民・農村プロレタリアによる出稼と職人・手工業者等の出稼があり、出稼先で賃労働に従事する「出稼賃仕事」(отхожий заработка)と手工業や小営業など自営出稼を含めた「出稼営業」(отхожий промыслы)がある。また出稼先で賃労働に従事する「出稼」の中でも、農業に従事する「農業出稼労働者」(отхожий земледельческий рабочий)と工業などの「非農業出稼労働者」(отхожий неземледельческий рабочий)がある。さらに「農業出稼」の内部でも、辺境地方における穀物生産の出稼と工業諸県での小商品作物生産における出稼等々が、それぞれ区別して論じられている。そして「移民」「移動」についてみても、出身階層は農民・賃労働者・手工業小生産者等々多様であり、また移動先階層も農業賃労働者・非農業賃労働者・手工業職人・自営農民・農産物販売者としての「担ぎ屋」(мешочники)等々、それぞれの場合が描き分けられているのである。

そして第3に、レーニンの考察は、こうした「出稼」「移民」諸形態の客観的な区分にとどまらない。彼は、それぞれの「出稼」「移民」諸形態に内包される多様な側面・意味内容を、微妙に区別して表現しているのである。「出稼」にはまず、村や農業から「離れる」「出ていく」「自由になる」という意味の強い“отход”や“отпускаться”“уходить”等があり、他方で、様々な地域や職場を「遍歴・放浪する」側面を強調した“бродить”や“странствовать”, “перекочевывать”等がある。また、地元とは異なる「よその土地で」「よその土地から」という意味の強い“сторонние заработки”や“пришлый рабочий”等があり、そして故郷を離れても「農村との関係を保ち続けている」という意味を強調した様々な表現もみられる。「移民」「移動」に関しても同様で、「故郷を離れる・出ていく」「新たな地域に移る・移動する」「別の土地に定着・入植する」「新たな地域に入ってくる・来住する」、そして政策的に「移住『させる』」等々、様々な側面が微妙に言い分けられている。

以上のような出稼や移民に関する多様な区別と表現は、それ自体、レーニンが、出稼・移民の多様な客観的諸形態を、しかも多様な社会的意義・文脈の中で捉えていたことを示しているといえよう。

そこで以下、こうした諸点に留意しながら、前述の3つの時期区分に沿って、レーニンの出稼・移民問題に関する研究視角の発展過程をあとづけていこう。

《注》

- (1) レーニン (1896～99)。
- (2) 浅野慎一 (1984) p 173, 同 (1985) p 119, 大川健嗣 (1979) p 3, 津川武一 (1974)。
- (3) 浅野慎一 (1986) p 113～117, 同 (1991)。
- (4) こうした研究史の整理については、小島修一 (1987) P 288～289, 太田仁樹 (1989) p 72～73, 和田春樹 (1975), 藤本和貴夫 (1973) p 286～287, 倉持俊一 (1977) p 103～104等。なお1960年代以前の研究史の整理は、和田春樹 (1961-a) p 4～6, 菊地昌典 (1964-b)。
- (5) この断絶性は、主として、一方で1875年～1890年のマルクス・エンゲルス——エンゲルス (1875), マルクス (1877-a), 同 (1877-b), 同 (1881-a・b・c), マルクス・エンゲルス (1882), エンゲルス (1885)

——、他方で1890年代のレーニンという、極めて限定された時期の両者の見解の間で問題にされることが多い。特に「帝国主義論」以後のレーニンの理論的展開を無視、あるいは軽視したままで、マルクスないしレーニンの問題点を裁断し、あるいは整合を図ろうとしている点が特徴的である。この点に関する様々な議論の一端は、田中真晴（1967）、仙波輝之（1982）p 87～89・126～128、平田清明（1971）、ホブズボーム（1964）p 57～58、ルイス（1965）p 383～385、アヴィネリ（1968）p 152～153、林道義（1970）p 220～223、同（1971）、同（1972）、竹内芳郎（1970）下、伊藤昌太（1977）p 135～141、日南田静真（1973）、同（1974-a）、同（1978）、和田春樹（1975）、雀部幸隆（1980）第3章、山之内靖（1969）第8章、淡路憲治（1970）、小島修一（1987）p 289～311、市川泰治郎（1969）p 89～90、本多健吉（1972）、淡路憲治（1972）、西島有厚（1983）等。

(6) 仙波輝之（1982）、平田清明（1969）p 294、林道義（1970）p 209～223。

(7) 太田仁樹（1989）、渡辺寛（1963）。

(8) レーニン（1896～1899）。

(9) レーニン（1916-a）。

第1章 1905年革命以前の国内出稼・移民論

それではまず、1905年革命以前の第1期について検討する。

この時期、農民を中心とする「出稼労働者」（отхожий рабочий）・「渡り歩きの労働者」（бродячий рабочий）は、ロシア全国で600万人を上回り、賃労働者全体の半数以上を占めていた¹⁾。そもそも当時のロシアの労働者階級の最大の特徴は、彼らが農村との絆を根強く有していることであった。機械製造業などの熟練工を除き、多くの労働者はなお農村との緊密な連がりを持っていなかった。彼らの多くは、最近農村を出てきたばかりであり、農閑期だけ工場で働き、収穫時には農村に戻った。また失業・老病廃疾時の帰村も多く、不況になれば直ちに都市から農村へと労働者の集団的移動が起こった。総じて、彼らはまだ「半ば農民」だったのである²⁾。

出稼労働者の中でも、特に農業以外に従事する「非農業出稼労働者」（отхожий неземледельческий рабочий）は300万人を超え、工業諸県をはじめ全国各地から、首都や大工業中心地、西南部の甜菜糖工場、南部やカフカーズの鉱山、オデッサの港湾労働、ヴラジミールの泥炭採掘、海上船舶労働、河川航行労働、木材の伐採及び筏流し、鉄道建設等々、新たな産業中心地および産業部門で就労していた。また農業に従事する「農業出稼労働者」（отхожий земледельческий рабочий）も200万人以上に達し、主に中央農業諸県から、南部や東部の辺境地方、工業諸県、及び、甜菜糖や煙草など商業的農業地域に季節的に移動していた³⁾。

第1節 ロシア資本主義の発展と出稼労働の矛盾

このような大量の「出稼労働」（отхожий промыслы）を、レーニンは、まず、ロシア資本主義の発展によって必然的に創り出され、同時に資本主義の発展を一層促進する「過剰人口」「労働者予備軍」⁴⁾の一環と規定し、総じて「資本主義の発展を要約するもの」⁵⁾と把握した。現に、永住地を捨て、仕事を求めてロシア中を放浪する「出稼労働者」（отхожий рабочий）の数は、1861年の農民解放以後、ロシア資本主義の発展と歩調を合わせて急速に増加した⁶⁾。「出稼」（отход）を中心とする旅券の交付数は、1861～70年に870万、1871～80年に1890万、1881～90年に2460万、1891～1900年に5040万と激増している。旅券収入は、1868年から1894年の27年間に2倍

以上に増加し、とりわけヨーロッパ・ロシアにおいて交付された旅券・証明書数は、1884年から1897年の13年間に約2倍に増えたのである⁷⁾。このような資本主義の発展と出稼労働の増加との内的関連を、レーニンは、農民層分解と工業労働市場形成の2つの側面から考察している。

まず、農民層分解の側面から出稼労働に関するレーニンの論理を総括しよう。

第1に、農民出稼は、農奴解放以後、急速に進展した農民層分解の必然的な結果である。農業の資本主義的発展に伴い、農民の両極分解が進行する。一方で大多数の貧農は、生活の維持・貨幣収入の獲得のために賃仕事を求め、分与地を放棄してよそに出稼に出ざるをえなくなる (отхожий заработка / отпущаться на сторону / уходить на заработки)⁸⁾。特に農業経営における機械の使用は、農業の過剰人口を顕在化させ、「よそで賃仕事をさが」さ (искать заработка на стороне) ざるを得なくさせるという「生活上の本質的変化」をよびおこす⁹⁾。他方、ごく少数の富農は、貧農の出稼労働力に依存して、市場目当ての資本主義的農業生産を営む。特に西南部の甜菜糖、南部辺境の煙草、工業諸県および西北諸県の畜産・酪農、亜麻栽培地区、野菜栽培地区等々には、こうした「農業出稼労働」(земледельческий отход)・「外来の労働者」(пришлый рабочий)を吸収する資本主義的農業経営が顕著に発達している¹⁰⁾。こうして資本主義的農業の形成は、膨大な住民大衆の全国的な「流浪」(перекочёвывать)を必然的に作り出す¹¹⁾。総じて「農業出稼」・「渡り歩きの農村労働者」(бродячий сельский рабочий)の存在は、資本主義の下で「小農耕者が農村プロレタリアに転化していく巨大な過程」であると同時に、「成長しつつある農業資本主義が賃労働にたいしてもつ膨大な需要を、一目瞭然と立証」する「農業資本主義の主要な現れ」¹²⁾にほかならないのである。

第2に、農民出稼は、単に農民層分解の結果であるばかりでなく、農民層分解を一層推進するひとつの契機でもある。大多数の貧農の「出稼」(уходить на заработки)は、彼らの零細な農業経営を一層衰微させ、結局、富農に分与地を貸与する結果をもたらさざるをえない¹³⁾。とりわけウラジミール県ボクロフ郡の大工出稼のような都市における非農業出稼の体験は、「農民生活の性格全体に深い刻印をしるし」、農民を農業になじまなくさせ、離農を促進する¹⁴⁾。他方、農村ブルジョアジーは、その経営を拡大しようとして、「賃仕事にでかけた農民」から分与地を借り入れようと懸命になる¹⁵⁾。また一部の富農の過剰な家族労働力による「出稼仕事」(отхожий промыслы)は、それによる貨幣蓄積を通し、一層のブルジョア的富農形成の契機にもなりうる¹⁶⁾。こうして「出稼」・「営業のための離村」は、「農民層の中からの農村ブルジョアジーの形成」や「『人民の貧困化』、資本主義の成長と市場の拡大」と表裏一体の関係にあり、それらをますます促進させるのである¹⁷⁾。

次に、工業労働市場の形成という側面から、出稼労働に関するレーニンの論理を見ていこう。

第1に、手工業やマニュファクチュアに従事する農民の「出稼」(уход)・「移住」(переселение)は、全国各地域に工業技術と資本主義的生産関係を行き渡らせる¹⁸⁾。たとえば、ニジェゴロドの皮革製造業やトゥーラの鋳物製造業、ヴラジミールの製陶業、モスクワ県のレース製造業等々、手工業やマニュファクチュアの「職人」(＝「営業」を行う農民層)は、辺境地方に「出ていく」(Идти) ことにより、全国に「手工業の知識をまきちらし、純農業的な住民のあいだに工業を『培養』」¹⁹⁾してきた。いわば、「昔からの工業文化をもつ、国の中部地方」の住民の出稼や移住が、「国内の新しい地方における、同じ工業文化の発展を助け」²⁰⁾るのである。レーニンは、「他の地方への工業の移動(переселение)は、新しい小営業を国の辺境地方に創設する個々の小生産者たちの移住 (переселение) によってのみ行われる」²¹⁾と述べ、こうした「出稼」(от

ход)や移住を、手工業・マニファクチュアにおける「唯一の発展的要素」²²⁾と位置づけている。またニジェゴロド県の縫製業や毛皮製造業、キムリイの靴製造業、コストロマ県の食器着色業、ヴラジミール県の金属箔製造業等々では、営業者は自らの農業経営を出稼雇用労働力に任せることによって工業生産に専念している。この点でもまた、出稼労働は、資本主義的工業の成長を背後から支えてきたといえよう²³⁾。

第2に、出稼農民・職人は、従来の技術・知識を出稼・移住先に持ち込むだけでなく、出稼・移住先で新たに習得した一層高度な技術・知識と資本主義的生産関係を、逆に、出身村落に持ち帰ることによって、機械制大工業の発展を準備する。たとえば、ヴラジミール県の羊毛・半絹織物業は、もともと「出稼」(отхожий промыслы)で暮らしていた農民が、出身村落において、「営業の先駆者」・技術知識の伝達者、そして利潤追及の「扇動者」となることによって開始された²⁴⁾。またペテルブルグの靴製造業も、「たとえばもしキムリイ村の地区で、現在出稼(отход)に専念している熟練労働者を数世紀にわたって作り上げていなかったら、これほど急速には発展しえなかった」。そして絹織物業の機械制大工業も、「織物工の後を追って、出稼(отход)によって仕事に精通した働き手の一隊が形成された村落に」建設されていた²⁵⁾。さらにカルーガ県の羊皮鞣業では、技術を隠蔽しようとする手工業小商品生産者により、他地域からの職人の出稼が制限されていたが²⁶⁾、このことも、それ自体、出稼が、技術伝播の契機となっていたことを、裏返しの形で示しているといえよう。

以上のように、レーニンは、農民層分解と工業労働市場形成の両側面で、出稼労働を、ロシアにおける資本主義の発展を「要約する」ものとして把握した。そして、この両側面を統一し、大量の出稼労働者・「流浪する労働者」(бродячий рабочий)を本格的に創り出したものこそ、機械制大工業にはかならないと指摘するのである²⁷⁾。すなわち一方で、機械制大工業、及び、それを支える石炭業や建設業の展開は、かつてないほど大量の労働力需要を、しかも伝統的な人口分布とは全く異なる地域に、資本の都合しだいでも新たに創出する²⁸⁾。他方でそれは、零細なクスターリや小商品生産者など「すべての小経営主を無慈悲に容赦なく圧迫して」零落させ、「農村での彼らの定着生活を破壊」し、「全国のはてからはてまで歩きまわる」(ходить из конца в конец всей страны)ことを余儀なくさせる²⁹⁾。そして同時に機械制大工業は、従来の手工業や技能を陳腐化させ、農業労働と他の労働との「移動」(передвижение)・交流を、広範な規模で容易にする³⁰⁾。しかも鉄道を初めとする交通手段の拡張が、この「移動」(передвижение)に拍車をかける³¹⁾。こうして「農業から工業への、農村から都市への住民の引き寄せの過程」・「農村をすてて都市に去る」(бросать деревни и уходить в города)農民層の移動は、資本主義的発展のもっとも特徴的な標識のひとつとなる³²⁾。機械制大工業の展開は、「必然的に人口の移動性(подвижность)を作り出」³³⁾し、出稼労働を飛躍的に増大させるのである。

このような諸点をふまえ、レーニンは、出稼農民を、たとえ彼らが零細な分与地を持っていたとしても、本質的には「ただ自分の労働力を売ることによってのみ生活する賃金労働者＝プロレタリアの階級」であると規定した³⁴⁾。「出稼労働者」(отхожий рабочий)は、その浮動的性格のため、出稼先で把握することが困難であり、しかも春に人口調査が終わってから出稼に出かけることが多いため、人口統計上は農村人口に数えられていることが多かった。しかしながら、彼らの出稼先での「営業」内容は圧倒的多数が賃労働であり、実質的には彼らは、「分与地をもつ賃金労働者」・農村プロレタリアートの「典型的な代表者」にはかならなかった³⁵⁾。とりわけ「非農業出稼労働者」(отхожий неземледельческий рабочий)は、農村にいない期間が長く、

1年の大部分を工業中心地ですごし、そこでの仕事で生活資料を獲得していた。例えばヤロスラヴリ県では、「出稼営業者」(отхожий промышленник)の7割が1年中不在であった。彼らは、まさに「工業人口に入れられなければならない」「公式名称だけでの農民」であったといえよう³⁶⁾。また農業出稼労働者においても、多くの場合、彼らの分与地は全く「とるに足りず」、彼らは「本質的には農村プロレタリアであり、現在彼らの全生活は出稼(отхожий промыслы)にあ」ったのである³⁷⁾。

それゆえレーニンは、出稼労働者が、現実には様々な矛盾を抱えていること、しかもその矛盾が、すぐれて労働者階級・相対的過剰人口に刻印された資本主義的な苦難・貧困化にほかならないことを、詳細に指摘している。

まず、農民が出稼先に赴く道程は、著しい危険と苦難とに満ちている。例えば、ヘルソン県にやってくる出稼労働者の約7割は、鉄道の切符を買う金がないため、10日～12日間も歩き続けなければならない。冷たい春のぬかるみの道を裸足で歩くので、彼らの足ははれあがり、たこやかすり傷だらけになる。また彼らの約1割は、河船にぎっしり詰め込まれて出稼にいくが、その河船が乗客もろとも沈没する事故を起こさないような年は全くないのである³⁸⁾。

ようやく出稼先にたどりついたとしても、出稼労働者を取り巻く労働・生活諸条件は、極めて劣悪である。甜菜糖農場では、宿舎にあてられる納屋が非常に不潔で、「寝糞はまったくとりかえられないので、仕事が終わるところになると、文字どおり堆肥になってしま」い、チフスや梅毒が毎年のように発生している³⁹⁾。トヴェーリ県キムルィ村の靴製造業やグジェーリ地区の陶器製造業では、「出稼」(отхожий)労働者・「外来の労働者」(пришлый рабочий)は、1日14～15時間の長時間労働や非衛生的な作業条件、商品による支払、そして肺病や視力喪失などの健康破壊を余儀なくされている⁴⁰⁾。ヘルソン県では、労働者のための宿舎は通常なく、たとえあっても「湿気や、狭さや、寒さや、暗さや、息づまるような空気のために」苦しめられる、きわめて不衛生な泥小屋でしかないことが珍しくない。またここでは、労働時間は12時間半～14時間に及び、休息時間は酷暑の時期でさえ「例外」的にしか認められず、その上、機械使用に伴う労働災害や職業病が多発している⁴¹⁾。タヴリーダ県では、農業出稼労働者の賃金があまりに低いために、「多くの経営主が、自分の機械をもっていないが」、「機械による取り入れよりも手による取り入れのほうを選ぶ」ほどである⁴²⁾。さらにどこにおいても出稼労働者は、「家族を他の都市または農村で扶養しなければならない」二重生活を余儀なくされ、しかも季節的に限られた作業に就労することが多いため、身を削って稼ぎまくらなければならない。そしてそれでも仕事にありつける出稼労働者はまだましな方で、「渡り歩く労働者」(бродячий рабочий)の多くは、出稼先でも「失業者の予備軍として残され」ざるをえず、とりわけ産業恐慌時には、失業した大量の労働者が、政府により、飢えた故郷に強制的に送り返されるほどであった⁴³⁾。

しかも、これらの劣悪な労働諸条件に対し、「出稼労働者」(отхожий рабочий)・「外来の労働者」(пришлый рабочий)は、有効な抵抗運動を組織することが難しい。彼らは、地域的流動性が激しい上、欲望水準も純粋の労働者に比べて相対的に低いため、資本に対する組織的抵抗を行うことが困難なのである。そこで彼らは、労働者階級全体の労働諸条件を引き下げる「重り」の役割を果たさざるを得ないことが多い⁴⁴⁾。

〈注〉

- (1) レーニン（1896～99）p 603～604，同（1903－a）p 397，同（1908）p 105～106。なおレーニン（1896～99）p 616は，ロシアの賃金労働者数を約1000万人，うち成年男子を750万人と推定している。
- (2) 雀部幸隆（1980）p 289～290，和田春樹（1965－1）p 145，同（1965－2）p 181～182，リーブマン（1967）p 21，外川継夫（1979）p 351，日南田静真（1969）p 75，辻義昌（1981）p 59～62，ダンコース（1979）p 8，ボクロフスキー（1920－Ⅱ）p 15。1920年代の労働者の農村との関係については，塩川伸明（1986）p 176～178・184。ロシア労働者階級のもうひとつの特徴——高度に発達した大工業への集中——については，西島有厚（1968）p 114，リーブマン（1967）p 21，ソ連邦科学アカデミー歴史研究所（1962）p 16，和田春樹（1972）p 54，ダンコース（1979）p 12，ボクロフスキー（1920－Ⅱ）p 73。
- (3) レーニン（1896～99）p 232～234・620～621・604～608，同（1897－a）p 224。レーニン（1908）p 106によれば，1890年代後半，農業出稼労働者は350万人に達していた。
- (4) レーニン（1897－a）p 166～167，同（1896～99）p 465～466。
- (5) レーニン（1903－b）p 26。
- (6) 農奴解放後の約10年間は，出稼農民の一時的帰村が多かった。外川継夫（1979）p 341。1880年代の出稼農民の村への還流については，保田孝一（1978）p 76。農奴解放以前の出稼については，土肥恒之（1989）p 68～70，鳥山成人・岩間徹（1979）p 250～256，菊地昌典（1964－a）p 148～155・163～171・185～187，鳥山成人（1985）p 31～32，ボクロフスキー（1920－Ⅰ）p 45。
- (7) レーニン（1894）p 253～254，同（1896～99）p 603・608，同（1908）p 105。農民解放後の出稼急増については，ワース（1984）p 122，日南田静真（1968）p 259～260，外川継夫（1979）p 351。グルジアにおけるそれについては，ボクロフスキー（1920－Ⅲ）p 203～204。
- (8) レーニン（1893－a）p 36・44，同（1893－b）p 121，同（1894～95）p 387～388，同（1896～99）p 107・285・350・378，同（1903－b）p 24。中山弘正（1964）p 222～225，日南田静真（1969）p 75。
- (9) レーニン（1893－a）p 7～8。
- (10) レーニン（1896～99）p 268・280・294・303・310・317，同（1908）p 106。中山弘正（1964）p 187～189・192・206～208。中央アジアの綿花栽培における季節労働者の国外からの流入については，木村英亮・山本敏（1979）p 127～128。
- (11) レーニン（1896～99）p 320。特に西部における農業資本主義の発展については，佐藤芳行（1983）。
- (12) レーニン（1896～99）p 234・231。レーニン（1914－a）p 77～78は，ゼムストヴォ統計資料における地域・農家区分の指標のひとつに出稼の有無を入れるべきことを主張し，同（1915－a）p 109も，「農業における資本主義の主要な標識と指標は賃労働である」と述べている。
- (13) レーニン（1893－b）p 121。日南田静真（1968）p 260。18世紀の出稼が農業経営を衰微させたことについては土肥恒之（1989）p 71。出稼と農民層分野の進展の関連については，鳥山成人（1985）p 178～179。
- (14) レーニン（1896～99）p 560。
- (15) レーニン（1896～99）p 298。
- (16) レーニン（1893－b）p 116～117，同（1894～95）p 497。中山弘正（1964）p 224～225。革命後の出稼の春秋2つのタイプについては，ワース（1984）p 123。
- (17) レーニン（1893－b）p 121，同（1896～99）p 287。日南田静真（1968）p 260。
- (18) レーニン（1896～99）p 345～346。
- (19) レーニン（1897－a）p 224。モスクワ周辺の綿工業における出稼については和田春樹（1961－a）p 18，18世紀の出稼労働における職種・技術習得については土肥恒之（1989）p 68～69。

- ②0 レーニン (1896~99) p 346。
- ②1 レーニン (1896~99) p 579。
- ②2 レーニン (1896~99) p 340。
- ②3 レーニン (1896~99) p 380。和田春樹 (1961-a) p 6。
- ②4 レーニン (1896~99) p 349~350。
- ②5 レーニン (1896~99) p 445~446。
- ②6 レーニン (1896~99) p 342。
- ②7 ロシア資本主義の発展過程については、山之内靖 (1969) p 275~277, 日南田静真 (1968) p 259, 同 (1966) p 171~198, 田中真晴 (1967) p 176~180, 和田春樹 (1961-a), 同 (1961-b), 同 (1965), 中山弘正 (1963), 同 (1964), 佐藤芳行 (1981) p 18, 富岡庄一 (1977), フォーカス (1972), 上島武 (1984) 等。
- ②8 レーニン (1896~99) p 559・579。鉱山・製鉄業の出稼労働については和田春樹 (1961-a) p 18, 岡田進 (1989) p 59。バクーの石油工業への国内外からの出稼については、高田和夫 (1974), 岡田進 (1989) p 69。
- ②9 レーニン (1894~95) p 387~389・514, 同 (1895) p 54, 同 (1895~96) p 82, 同 (1897-e) p 534, 同 (1903-a) p 437。
- ③0 レーニン (1896~99) p 238~239。紡績業における技術革新と出稼の増加の関係については和田春樹 (1965-2) p 178。
- ③1 レーニン (1894~95) p 514, 同 (1896~99) p 342・579。
- ③2 レーニン (1897-d) p 485~486。
- ③3 レーニン (1896~99) p 327・448・551・572・579。参考文献としてマルクス (1867-b)。
- ③4 レーニン (1895~96) p 82~83, 同 (1897-e) p 496, 同 (1896~99) p 237, 同 (1902-a) p 395~397。
- ③5 レーニン (1896~99) p 102~103・128。
- ③6 レーニン (1896~99) p 563・600~602・599・607, 同 (1903-a) p 397。革命後の農民生活の出稼への依存についてはワース (1984) p 121~122。
- ③7 レーニン (1896~99) p 237。
- ③8 レーニン (1896~99) p 237。
- ③9 レーニン (1896~99) p 294~295。
- ④0 レーニン (1896~99) p 423・428。
- ④1 レーニン (1896~99) p 242。煙草栽培農場の出稼における労働条件のひどさについてはレーニン (1896~99) p 303。その他, 出稼労働の劣悪な労働条件については, 和田春樹 (1961-a) p 18, 中山弘正 (1963) p 188, 荒又重雄 (1982) p 56~57・67, 有馬達郎 (1989) p 109, ボクロフスキー (1920-II) p 105等。
- ④2 レーニン (1896~99) p 228。
- ④3 レーニン (1896~99) p 218・227~228・618, 同 (1901-h) p 92。1905年以後ではレーニン (1910~12) p 618。辺境農業の機械化が中央部からの出稼農民の出稼減少や労働条件の悪化を招いたことについてはドゥブロフスキー (1963) p 27。
- ④4 レーニン (1899-a) p 148。参考文献としてカウツキー (1899)。雀部幸隆 (1980) p 289~290, ボクロフスキー (1932) p 13, 和田春樹 (1961-a) p 18, 同 (1972) p 55, 日南田静真 (1966) p 250~251・347, ドゥブロフスキー (1963) p 21。1905年以後ではレーニン (1908) p 108。革命後の出稼労働者と労働組合の対立についてはワース (1984) p 123。

第2節 出稼労働の進歩的意義

ところで、以上のように出稼農民をめぐる資本主義的な諸矛盾を詳細に把握した上で、それにもかかわらず、ここで注意すべきことは、レーニンが、農民の「離村・出稼」(отход / отхожий промыслы)・「放浪」(бродяжничество / пелекочевыванье)に進歩的意義を見出し、出稼を「新しい生活体制の革命的な諸側面」の一環と位置づけていたという事実である¹⁾。そして彼は、「旅券の廃止、完全な移動(передвижение)と移住(переселение)の自由」、「土地処分の自由」、「営業の自由」等々、出稼に対する様々な障害を取り除き、「出稼」(отхожий промыслы)を全面的に容易にすることを主張したのである²⁾。

このようなレーニンの主張を理解する際、ロシアにおける農奴制の残存と出稼との関連に関するレーニン自身の認識把握が、重要な問題として立ち現れる。

1861年の農民解放により、ロシアの旧農奴は、従来から保有してきた土地の2割近くを切り取られた上、零細な分与地を時価を8割も上回る価格で買い取ることを余儀なくされた。しかも分与地を買い戻すまでの間、彼らは、「一時的義務負担農民」として、従来とほとんど同額の地代を貢租や賦役の形で義務づけられた³⁾。そして分与地は、一部西南諸県を除き、個別農家ではなく、共同体に一括して引き渡され、買い戻し金や人頭税の支払いも共同体の連帯責任とされ、共同体による分与地の割替も維持された。その結果、個々の農民は、農奴解放以前と同様、分与地と共同体に緊縛され、「移動・移転」(передвижение)と「移住」(переселение / выселение)の自由を持たず、一時的な出稼・離村にも共同体から様々な制約(旅券制度と離村成員の強制送還等)を受けていた⁴⁾。彼らは、従来同様、地主に人格的に隷属し、債務奴隷的低賃金で雇役に狩り出されざるをえなかった。そしてこのような雇役制度が、安価で柔順な労働力確保の基盤として、地主階級の経営を根底から支えていたことはいうまでもない⁵⁾。

こうした実態をふまえ、レーニンは、総じて当時のロシア農村では、資本主義は着実に成長しつつあるとはいえ、非常に未発達な段階にあり、経済的にも、社会的ならびに政治的＝法律的にも、農奴制的諸関係の残存物・「賦役経営の直接的残存物」が未だ広範に広がっていると指摘した⁶⁾。そこには、「農奴制的諸関係とブルジョアの諸関係の極度に複雑な絡みあい」⁷⁾が存し、したがって農民層の抱える主要な矛盾も、資本との関係のみならず、むしろ地主の圧制・農奴制の残存物との対抗関係に集中していると理解したのである⁸⁾。

しかも同時に、現実には農民層分解が進行する中で、農民層の零細な分与地は、もはや前述のごとく、彼らの生活を支えきれものではなくなっていた⁹⁾。レーニンによれば、雇農や「ロシア中を手間賃稼ぎにさまよい歩く労働者」(бродячий по всей российской за заработком)が、農民の間に大量に生まれていた状況下では、ミール共同体は、もはや農民にとって生活を保障するひとつの力にはなりえていなかった¹⁰⁾。むしろ、資本主義が経済の基礎になりつつある段階には、「中世的制度の残存物は、資本主義の災厄になおいつそう苦しい災厄、すなわち中世的な災厄をつけくわえるだけ」であった¹¹⁾。現に、こうした段階での分与地への緊縛や地主の雇役の強制、「移住」(переселение)・「移転」(передвижение)の自由がないこと等々は、農民層分解を防ぐどころか、逆に彼らの全般的な零落・「過剰人口」・失業、そして餓死をもたらす原因でしかなくなっていたのである¹²⁾。

それゆえ農民層の「出稼」(отхожий промыслы)は、確かに前述のごとく、ロシア資本主義の発展を「要約」する現象ではあったが、しかし同時に「農奴制の残存物」と密接に絡み合ってもいた。農民層は、地主に対する様々な農奴的義務を果たした上で、自らの生活を維持するために、

不可避免的に「よそでの賃仕事」(строение заработки)を求めざるを得ず、しかも同時に、土地に緊縛されて移動の自由をもたないため、純粹の賃労働者に転化する道も閉ざされていた。彼らに残された道は、「旅券制度」(паспортной системы)や連帯保証制の下、多くの経済的負担を支払い、土地を有償で貸し出すどころか、租税を自ら支払い、場合によっては分与地を借りてくれる人に金を支払ってまで、出稼に「逃げ出す」(бежать)ことしかなかったのである¹³⁾。レーニンの認識によれば、ロシアにおける資本主義の発展は、明らかに、大量の低賃金労働力の流出を必然化し、農民層の「移動」(передвижение)の自由を求めている。これに対し、ロシアの農奴主的地主制は、一方で、農民生活を圧迫して出稼流出に拍車をかけながら、他方で、半農奴的雇農の流出を防止するために農民層の「移動」(передвижение)・「移住」(переселение)・「出稼」(отхожий промыслы)を制限するといった相矛盾した役割を果たしていたのである¹⁴⁾。その意味で農民出稼は、成長しつつある資本主義と伝統的な「農奴制」の「せめぎあい」の接点で行なわれる資本主義的賃労働の一形態であり、ロシアにおける資本主義の発展と農奴制残存を同時併存させる最大の契機であったといえよう。出稼・移動が、農奴制や雇役が最も強く残存した中央農業諸県から、資本主義が最も強く発展した辺境地域および工業諸県に向けてなされていたという事実も、このような社会的文脈の中で理解されなければならないのである¹⁵⁾。

このような認識に立ち、レーニンは、まず、「出稼」(отхожий промыслы)の経済的意義として、それが、出稼農民自身の経済的利益と直結し、それゆえまた地主の利益を根底から覆すものであることを指摘している。そもそも出稼農民は、地元の地主の下での雇役における債務奴隷的な低賃金を避け、賃金がより高い地方を自ら選んで「出稼」(отхожий промыслы)・「放浪」(пелекочевыванье)に出るのである¹⁶⁾。現に、工業地帯や辺境など出稼吸収地域における賃金水準は、ロシア中央農業諸県など出稼供給地域のそれに比べ、はるかに高かった¹⁷⁾。だからこそ農民層は、財産や家財道具を売り払い、分与地を抵当に入れ、地主から借金をしてまで、旅費を確保し、出稼に赴くのである¹⁸⁾。また、「出稼労働者」(отхожий рабочий)を輩出している工業諸県では、地主にとって「必要な」労働者も含め、あまりに大量の出稼労働者が「出て行く」(идти)ため、逆に農業労働力の不足が起こり、地主は中央農業諸県など、他の地域から出稼労働者を吸収しなければならないといった独特の「移動」(передвижение)形態がしばしば見られた¹⁹⁾。しかも、後述するごとく、出稼先での生活体験は、農民層の生活要求水準を著しく高める。これらの結果として、「出稼」(отход)は、債務奴隷的な「雇役」制度の経済的基礎を破壊し、出稼農民のみならず、地元の賃金水準全体をも高めざるをえない。「農民の都市への出稼」(уход крестьян в города)や「よそでの賃仕事」に対する地主の不満は、何よりもまず、こうした経済的諸問題に根ざしていたのである²⁰⁾。

その上でレーニンは、こうした経済的意義にとどまらず、「おそらく、よりいっそう重要な」意義として、出稼の「道徳的および教育的意義」にも言及している²¹⁾。すなわち、出稼による「放浪」(пелекочевывать)・「移動性」(подвижность)が、農民に「苔をはやす」ことを妨げ、「住民の発展」・「自覚と自主的活動の発展」を作り出すことである。レーニンは、「南部や北部、農業や工業、首都や僻地における種々異なる関係や制度にかんする体験が人間にあたえるものを、農村の学校などがあたえうると考えるとすれば、それはおめでたいこと」だと述べている²²⁾。ここでいう「道徳的・教育的意義」には、以下の如く、いくつかの位相が重層している。

まず第1に、「出稼」(отхожий промыслы)の体験、特に大都市や工業中心地への出稼就労の体験は、「エネルギーと文化の偉大な中心地」への移動体験であり、農奴的な環境の下で決定的

に立ち後れた農民層の文化水準・「農村生活の愚昧」に大きな刺激を与える²³⁾。農民層は、単に経済的な動機だけでなく、出稼先の都市で、洗練され、教養ある文化を習得してこようという「より高い風習の動機」に基づいて、「出稼」(отход)に出る。彼らは、自らのことを「粗野な人」「牧人」と卑下しており、農村労働者としての生活を「恥」と感じ、そこで都市に出稼に赴く。「出稼」(отход)に行けなかった農民は、都市で「勉強」させてくれなかった両親を恨んでおり、また農村の女性たちも、「出稼」(отход)経験がない青年と結婚するのを嫌うほどである。農民層は、「出稼」(отход)を通して、都市住民の文化的慣習と文化的欲望を学びとり、一般的な欲望水準を高め、「進歩の先駆者」として、それを自らの出身農村に持ち帰る²⁴⁾。たとえば、モスクワ県ボドリエ郡クレノヴォ村やトヴェーリ県コルチェヴァ郡キムリィ村などの「出稼」(отход)地帯では、住民は、昔からのしきたりを捨て、サラサやラシャ、キャラコを着、長靴をはき、サモワールや時計を備え、茶を飲み、「はるかにきれいな」「おしゃれな」都市的生活をしている²⁵⁾。またコストロマ県やヴラジミール県ボクロフ郡でも、「出稼労働」(отхожий заработка)の経験は、住民に「教養のたしなみ」を与え、彼らの「知性」ないし「知的発達」、就学率や読み書き能力などを著しく高めているのである²⁶⁾。

第2に、このような文化変容の、ひとつの、しかも決定的に重要な内容として、「出稼」(отход)の体験は、農奴制の残存物に対する農民層の態度を変容させる。そもそも出稼を支えている第一の動機は、農奴的な人格の隷属関係から抜け出し、「自我」をもった市民的人格を形成しようとする農民層自身の自覚にある²⁷⁾。現に農民層は、単に賃金の多寡だけでなく、地元の雇役よりも、自由に、人格の隷属関係なしに、労働力商品の売買契約として割り切って働ける「出稼」を、自ら主体的に選択しているのである²⁸⁾。また彼ら「出稼人」(отходчик)は、出稼就労先で、純粋な資本主義的環境に身を置き、様々な地域や職場を「放浪」する中で、従来、絶対の存在と信じていた農奴制的な農村環境を相対化し、それを重荷に感じるに至る²⁹⁾。いわば永住地を捨て、仕事を求めてロシア国中を「放浪する」(бродить)「出稼」(отхожий промыслы)・「移動」(передвижение)は、農民を半封建的環境から引き出し、「氏族、家族、地域共同体の古来からのきずなを断ち切り」、「発展の多様性、才能の多様性、社会関係の豊富さ」を作り出し、「遅れた農民層の間に、人間の価値に対する自覚と感情とを目覚めさせ、自分の力にたいする信念を目覚めさせる」のである³⁰⁾。しかも「出稼」(отход)は、地元に残った住民の中にも、市民的「自我」の形成を促進する。たとえば、コストロマ県の出稼地方の女性たちは、男性が出稼で不在の間、男性の権力や助けなしに生活することを通して家父長制的な家族制度を崩し、より自立的な、男性と同等の地位を獲得するに至っている³¹⁾。総じて農民層の出稼は、単に経済的側面のみならず、農民の知的・道徳的なレベルから、農奴制的・家父長制的な農村社会構造を空洞化させていくのである。後にレーニンは、1905年革命の基盤のひとつとして、農奴解放以後、農奴の農民にかわり、「都市へ出稼(отхожий промыслы)に行き、渡り鳥生活(бродячий жизни)や賃仕事の辛い体験からなにかを学びとった農民の新しい世代が成長してきた」ことを挙げている³²⁾。

その上で第3に、出稼体験は、勤労者を全国土にわたり、ある地方から他の地方へ「移動させる」(бросать)搾取形態にとりかえることによって、資本主義的な階級的搾取・階級的諸矛盾を農民層の前に露呈させ、彼らに一定の主体的対応を不可避免的に迫る。農民層は、出稼先を「放浪」・「移動」(передвижение)する過程で、どこにいても、自分と同じ貧民が、特定の「旦那」でなく、資本一般に搾取されている事実を身をもって知る。いわば出稼先では、搾取があらゆるま

ぎらわしさから裸にされ、階級的搾取一般の根拠が明瞭になるのである³³⁾。また農民層は、出稼先で、農奴制の下にある出身村落での不平等をはるかに上回る貧富の差・不平等が顕在化していること、収奪が強化されて「失業がひとつの常則」になっていること、そしてロシアの国家権力が、労働者の権利を制限し、運動を弾圧することによって、資本家に奉仕していること等々を目の当たりにする³⁴⁾。その上で農民層は、こうした諸事実を単に知識として知るだけでなく、出稼先で、賃金水準の向上を目指し、資本家と様々な駆引きを実践せざるを得ない。彼らは、需要に応じて賃金水準を正確に調節するため、1日毎・1週間毎の雇用を選び、賃金の引き下げに対しては、自分のパンを食い尽くすまで寝てすごすか、あるいはもっと旅を続けて賃金の高い地方に移ってしまうという方法で抵抗する。また彼らは、より高い賃金を要求するよう相互に申し合せ、同じく安い賃金を申し合せている資本家集団に対抗する³⁵⁾。こうした実践経験の中で、出稼農民は、労資の階級関係を否応無く自覚し、矛盾に対する社会的・法的規制の必要性を知るに至るのである³⁶⁾。

〈注〉

- (1) レーニン (1894) p 254, 同 (1896~99) p 7~8・580・608, 同 (1902-e) p 202。参考文献としてカウツキー (1899)。
- (2) レーニン (1895~96) p 79, 同 (1897-d) p 485~486・488, 同 (1896~99) p 244・614, 同 (1899-d) p 104, 同 (1899-f) p 254, 同 (1901-a) p 465, 同 (1901-h) p 91, 同 (1903-b) p 17, 同 (1903-c) p 31・202, 同 (1902-a) p 16, 同 (1903-a) p 410, 同 (1903-d) p 99。参考文献としてカウツキー (1899), マルクス (1852)。
- (3) 農奴解放の概要については菊池昌則 (1964-a), 増田富寿 (1958) p 100~110, 和田春樹 (1968-a) p 279~282, 雀部幸隆 (1980) p 287, ヒル (1947) p 85, 外川継夫 (1979) p 313~316・349, ドゥブロフスキー (1963) p 9~15, 松田道雄 (1970) p 50~52, 倉持俊一 (1980-a) p 47~52, 同 (1980-b) p 62~63, 林道義 (1971) p 90~98, 中山弘正 (1963) p 159, 保田孝一 (1971) p 132~134, 同 (1978) p 62~63等。
- (4) 共同体的規制の「強化」・残存についてはドゥブロフスキー (1963) p 18~19・173, 増田富寿 (1958), 外川継夫 (1979) p 314~316, 倉持俊一 (1980-a) p 53~56, 小島修一 (1987) p 77, 松田道雄 (1970) p 51, ヒル (1947) p 85・90, 雀部幸隆 (1980) p 289, 和田春樹 (1968-a) p 288~290。ロシア農民の移転に制約が加えられ始めたのは15世紀末からであり、国家による旅券制度が確立したのは1724年である。石戸部重郎・伊藤幸男 (1979) p 142~143・172~173, 鳥山成人・岩間徹 (1979) p 236, 土肥恒之 (1989) p 46~47。この点をめぐる論点整理として、鳥山成人 (1985) p 101~138, 166~167。
- (5) 雇役制度については、日南田静真 (1968) p 259, 同 (1966) p 247~253, 倉持俊一 (1980-a) p 52, 同 (1980-b) p 62~63, 雀部幸隆 (1980) p 287~288等。
- (6) 農民解放以後のロシア社会を農奴制の残存とみる立場に、雀部幸隆 (1980) p 84~93・287~289, 佐藤芳行 (1981) p 19・33, 倉持俊一 (1980-a) p 52, 同 (1980-b) p 62~63, 小島定 (1977) p 59~60。経済外的強制からの解放、私的所有関係など近代的諸関係が生まれていたことを重視する立場に、日南田静真 (1968) p 259, 同 (1966) p 173, 同 (1972), 渡辺寛 (1963) p 182~184, 和田春樹 (1961-a) p 8~9。当時のロシア共同体を「アジア的」共同体とする立場に、林道義 (1970) p 245~247, 同 (1971) p 5~6・36~42・74, 同 (1972), 同 (1973), 肥前栄一 (1973) p 346~352, 保田孝一 (1978) p 64・70~71, 桂木健次 (1974)。こうした論点の整理として小島修一 (1987) p 304~306・310~313, 雀部幸

- 隆（1980）p 73～93。
- (7) レーニン（1902－b）p 106・112。
- (8) レーニン（1894～95）p 497・503・504，同（1895～96）p 102，同（1896～99）p 178・331，同（1900）p 661，同（1901－a）p 460～461・463，同（1901－h）p 89，同（1901－i）p 274，同（1903－b）p 26，同（1902－a）p 15，同（1902－b）p 105・123～125，同（1903－a）p 373～374・411・426～427。
1905年以後では，レーニン（1907－d）p 219～220，同（1908）p 55～56，同（1912－b）p 257。
- (9) レーニン（1894）p 212。
- (10) レーニン（1903－a）p 389。
- (11) レーニン（1894）p 260。
- (12) レーニン（1894）p 228，同（1894～95）p 504，同（1897－c）p 444，同（1897－e）p 497，同（1896～99）p 331・464，同（1899－b）p 68，同（1913－a）p 579。レーニン（1896～99）p 510～511ではウラル鉾山地方の同様の農奴制的桎梏が指摘されている。
- (13) レーニン（1894）p 250，同（1897－e）p 495～497，同（1896～99）p 602，同（1901－a）p 462。
島田孝夫（1986）p 72。1905年以後ではレーニン（1908）p 94。
- (14) レーニン（1897－d）p 488，同（1897－e）p 495～497，同（1899－a）p 16，同（1902－b）p 125，同（1903－a）p 411・427，同（1903－d）p 99～100。日南田静真（1968）p 260，同（1966）p 252，和田春樹（1961－a）p 6～7。農奴解放後の租税額が，分与地のみならず出稼収入を前提として定められていたことについては，菊地昌典（1964－a）p 420～421，桂木健次（1974）p 26。1905年以後では，レーニン（1908）p 107，同（1912－a）p 87。
- (15) レーニン（1896～99）p 232・623。日南田静真（1961）p 24。
- (16) レーニン（1896～99）p 199・233・244。1927年頃の農民層の出稼による経済的利益については，ワース（1984）p 123。
- (17) レーニン（1896～99）p 219～220・233・268・623。1905年以後ではレーニン（1908）p 106～107。
- (18) レーニン（1896～99）p 237～238。
- (19) レーニン（1897－a）p 224，同（1897－d）p 488，同（1896～99）p 232～233・245・268・580・611～612・623～624。中山弘正（1964）p 208～210。
- (20) レーニン（1896～99）p 199。18世紀における地主が農民の出稼に批判的であったことについては土肥恒之（1989）p 70～71。
- (21) レーニン（1897－a）p 223。
- (22) レーニン（1896～99）p 320・246。
- (23) レーニン（1897－d）p 485，同（1896～99）p 562・608～609，同（1901－b）p 150～151。引用文献としてマルクス（1848）。レーニン（1896～99）p 555・609では，森林地方や純農業地方の住民が，出稼地方の住民よりはるかに粗野で非文明的な生活をしていることが指摘されている。
- (24) レーニン（1896～99）p 608・609・612～613，同（1899－e）p 148。参考文献としてカウツキー（1899）。
- (25) レーニン（1896～99）p 405・423～424。
- (26) レーニン（1897－c）p 394～395，同（1896～99）p 560・603・609・612。1880～1890年代のロシア，特に農村部での就学率の低さ，文盲率の高さについては，リープマン（1967）p 30，外川継夫（1979）p 373，松田道雄（1970）p 131，倉持俊一（1980－b）p 60，米川哲夫（1968）p 829・833，辻義昌（1981）p 56～57。革命後も引き継がれたロシア農村の住宅環境の劣悪さ，伝染病の蔓延等々についてはワース（1984）p 37～41。

- (27) レーニン (1896～99) p 609。
- (28) レーニン (1896～99) p 199・232～233・239。
- (29) レーニン (1896～99) p 199・602, 同 (1902～e) p 207。18世紀の出稼が、閉鎖的・孤立的な村に風穴をあけ、農奴制の基礎を揺るがす側面を有したことについては、土肥恒之 (1989) p 70～71, 菊地昌典 (1964-a) p 170～171。
- (30) レーニン (1894) p 253～254・336, 同 (1894～95) p 434・446, 同 (1897～e) p 520・534, 同 (1899～e) p 148。引用文献として、マルクス (1852), カウツキー (1899)。
- (31) レーニン (1896～99) p 610～611。
- (32) レーニン (1911) p 79。1905年革命の農民運動における出稼者の役割については、日南田静真 (1969) p 86・88, 同 (1974-b) p 54, 西山克典 (1979) p 6, ポクロフスキー (1920-Ⅲ) p 123～127。
- (33) レーニン (1894) p 254・336, 同 (1894～95) p 411～412・434・446。
- (34) レーニン (1894) p 336, 同 (1894～95) p 482, 同 (1897～e) p 500。
- (35) レーニン (1896～99) p 239。同 (1896～99) p 271では、多くの「外来の労働者」を吸収する辺境地方の農業労働における賃金が高いために、辺境内部でも最高賃金と最低賃金、時期による大きな格差があることが指摘されている。いわばそれだけ「駆引き」の余地が大きいためである。中山弘正 (1964) p 192～193。労働者の退去や帰郷については荒又重雄 (1974-b) p 156～157。
- (36) レーニン (1896～99) p 241～243では、「社会的な調整と統制」の萌芽として、出稼労働者に対するヘルソン・ゼムストヴォの衛生調査の実施、及び、それに基づき、ヘルソン県医師大会に、診療＝食糧補給所の設置、衛生監督等々が提案されたことが指摘されている。ロシアにおける労働運動の中核が出稼農民であったこと、及び、その典型的事例としての1896年ベテルブルグの綿工業労働者のストライキについては、和田春樹 (1972), 同 (1965-1) p 145～146, 同 (1965-2), 同 (1974-a)。

第3節 出稼・移民労働と「労働の社会化」

さて以上、主に農民出稼について要約してきたこの時期のレーニンの論理は、ロシア国内での移民・移住についても、ほぼ一貫している。

すなわちこの時期、レーニンは、辺境地方への農業移民をはじめ、賃労働者や富裕な工業営業者の都市への「移住」(переселение / выселение)¹⁾、外国人労働者の南部鉱山地帯への「移住」(переселение)²⁾、そしてドイツ人やポーランド人のロシア国内への農業「入植者」(колони́ст)等々³⁾、きわめて多様な「移民」・「移住」(переселение / поселение)諸形態に言及し、それらをいずれも、ロシアにおける農民層分解と資本主義発展を一層促進させる契機、「資本主義のほかならぬ法則」として位置づけている⁴⁾。

こうした多様な移民諸形態の中でも、ロシア資本主義の発展に伴ってとりわけ急速に増加し、大きな位置を占めたのは、ヨーロッパ・ロシアの南部および東南部、カフカース、中央アジア、シベリアなどの辺境地方に赴く農業移民であった。19～20世紀初、南部への移住者は1200万～1300万人、南シベリアと中央アジアへの移住者は450万～500万人にも達した。1891年、政府は、中央アジア遊牧地を国有地とし、その最良部分をロシアからの移住民に分配した。また特にシベリア移民は、1880年代初頭から非合法状態のままに急増し、1861年から1891年に45万人にも達していた。さらに1860年代以後、極東地方へのロシア人の移住も増大した⁵⁾。

そしてこのような辺境地方への移民の多くは、元来、雇役が最も発展した中央農業諸県の「中位の資産をもつ農民」であり、それゆえ彼らが移住した後、郷里には農民層の両極の群が残り、

農民層分解は巨大な刺激を受けることになった。また彼らは、「移住」・「移民」(переселение / иммиграция) 当初、辺境地方で雇農として働いて貨幣を貯え、後には自由な土地を取得して資本主義的農業生産を営んだ。いずれにせよ彼らは、郷里のみならず、移住先＝辺境地方にも農民層分解の諸要素を持ち込み、中央部以上に分解を急速に推し進めたのである⁶⁾。しかもこうした辺境地方の「移民」・「移住」(переселение) による資本主義的農業の発展は、ロシア中央部の工業生産と不可分に結びつき、相互のための市場を拡大した。総じて辺境地方への「移民」(переселение)・「入植」(колонизация)・「移住」(заселение / переход / эмиграция) は、あたかもロシア資本主義の「植民地開拓」として、資本主義を内包的のみならず外延的に発展させることを保障していたのである⁷⁾。

また同時にレーニンによれば、辺境地方への国内移民は、経済的にも、また道徳的・教育的にも、農民層にとって進歩的意義をもち、この点でも、出稼と共通している。移住先の辺境地方では、剰余価値の半農奴制的な取得が、純資本主義的なそれに置き換えられており、一般に「入植した」(заселить) 移民農業者は、他の農民層より相対的に裕福になっていた。多くの場合、「移住」(переселение) は農民層の経済的利益と直結しており、逆に地主にとっては安価で柔順な雇農の流出を意味していた⁸⁾。もちろん辺境地方の移民の間でも、農業生産・生活に不可欠の共同体は維持されている。しかし、そこではもはや知的暗愚を生んだ従来の家父長制的・農奴制的諸関係は弱められている。レーニンは、通常の「移住」(расселение) によって成立した共同体の存在を例にして、「協同組合としての共同体」の存在を認め、共同体一般を軽率に否定する見解を批判しているのである⁹⁾。さらにたとえば、ニジェゴロド県ゴルバードフ郡やヴラジミール県ムーロム郡のような移民を集めている工業地域においては、住民は、全く都市的な生活様式をもち、教育水準や読み書き能力も高く、より進んだ欲望と文化環境をもっている¹⁰⁾。また外国人移民労働者を多く「移住」(переселение) させている南部鉱山地帯では、農奴制の強いウラル鉱山地帯とは対称的に、伝統も身分制も封鎖性も完全に打ち砕かれているのである¹¹⁾。

レーニンは、以上のように移民と出稼の共通性を指摘しつつも、しかし同時に、両者の間に明瞭な違いをも見いだしていた。まず移民に出るのは、前述のごとく、主に土地を売って自由になることができる「中位の資産をもつ農民」である。また彼ら「移住者」(переселенец) は、移住先の辺境地方において、資本主義的農業経営に従事する場合が多い。いわば彼らは、「植民地」としての辺境地方に定着し、基本的には資本主義的農業経営主を目指すことにより、ロシア資本主義の外延的発展を担うのである¹²⁾。これに対し、出稼に出るのは、「『中農』ほどには土地に土地に縛り付けられていない」、しかも分与地のみでは生活できない貧農・農村プロレタリアである¹³⁾。彼らは、労働者階級として、大都市や辺境地方など様々な地域を遍歴・放浪する中で、出身村落における農奴制的農村世界をより強く相対化し、それに対する価値観を極めてドラスティックに変貌させる。しかも彼ら出稼農民は、労働者階級でありながら、その生活諸条件そのものによって、農奴制が強く残存した出身村落と、依然として根強い結びつきを保ち続けている。彼らは、農村に家族や親戚を持ち、出稼期間が終われば出身村落、すなわち、当時のロシアの国家権力を握る「農奴主的」地主階級の下に再び戻る。こうして彼らは、ロシア資本主義の内包的発展、すなわち農奴制的地主との階級闘争の焦点に座らざるを得ないのである¹⁴⁾。

レーニンが、移民よりもむしろ出稼の社会的意義を特に強調した所以も、こうした認識に基づいていた。そしてこのことは、いうまでもなく彼の革命路線と深くかかわっている。レーニンは、当時、ロシアが当面する革命を、「農奴制のいっさいの残存物を完全に清掃する」ブルジョア民

主義革命と規定していた。ただしこの革命の中核的な担い手は、プロレタリアとの対抗上、封建制の残存勢力と妥協せざるをえない弱体なロシア・ブルジョアジーではなく、「労働者階級と農民の革命的民主主義的独裁」である¹⁵⁾。レーニンによれば、「完全に勝利した革命だけが、土地改革の面で、すべてのものを農民にあたえることができる」ので、農民は、「民主主義の完全な、きわめて急進的な味方」になりうる¹⁶⁾。現に、1901年には、シベリア官有地が地主に払下げられ、ロシア中央部の巨大土地所有が辺境にも持ち込まれるに至り、シベリア「移住」(переселение)は農民の窮乏を解決しないこと、矛盾の本質はロシア中央部における農奴制の残存とその打倒にあることが明らかにされた¹⁷⁾。他方、労働者階級にとっても、農民と共同して農奴制的諸制度を打倒することは決定的に重要である。なぜなら、労働者階級がブルジョアジーとの闘争に勝利するためには、「ロシアの農村プロレタリアートの支持が不可欠の条件」であるが、この農村プロレタリアートは、農奴制の残存物が一掃されない間は、決して理性的な抗議や闘争に立ち上がることができないからである¹⁸⁾。レーニンは、かかる「特殊の歴史的事情」の中で、労働者階級が、「農奴制の残存物の完全な除去」と「農村における階級闘争の自由な発展」を実現するため、例外的に小所有の擁護者となり、農民・農村プロレタリアートのもつブルジョア革命に向けたエネルギーを励まさなければならぬと主張した¹⁹⁾。彼が、この時期の主著『ロシアにおける資本主義の発展』において、辺境地方の植民ではなく、「資本主義の内包的発展」の側面にとりわけ焦点を当てた理由も、ここにあったといえよう²⁰⁾。

そこでレーニンは、「農村における階級闘争の自由な発展を保証」し、「農奴制の残存物」を除去する観点から、様々な土地改革構想を検討する。まず、多くの農民が要求している土地の総割替は、確かに、全地主地の没収により、農村の農奴制的諸関係を根絶し、その意味で、革命的＝民主主義的ではある。しかし同時にそれは、ロシアの地主所有地に発展している資本主義的大農場経営をも解体させ、小農生産を普遍化・永久化し、農民層分解の発展を抑制させる。他方、農民の分与地を含む総ての土地の「国有化」は、資本主義の全面的発展という見地からは全く革命的で、「ある時期にはまったく適当なものではある」。しかしそれは、当時のロシア国家の特質・政治状況の下では、農奴制の残存物に対する農民の革命的関心をあいまいにさせる。そこでレーニンが到達した結論は、「切取地」の農民への返還、より厳密に言えば、農奴解放時に農民から切り取られ、地主の手中で現在も引き続き農民層を債務奴隷化する道具になっている「切取地」の「村落共同体への返還」であった。いわゆる「切取地綱領」である²¹⁾。

このようなレーニンの革命路線は、改良主義的ナロードニキとの論争の中で提起された²²⁾。周知のごとく、1860～1870年代の革命的ナロードニキは、土地私有制を欠く特殊ロシア的農民共同体の残存という事実認識を基礎として、ロシア社会が、資本主義段階を飛び越え、一挙に農民を主体とする社会主義の段階に到達する可能性を追求した。もとより正確には、彼らのいう「社会主義」革命とは、全人民的土地所有の上での資本主義的小経営の実現にほかならない。またレーニンの直接の論争相手である1890年代の改良主義的ナロードニキ、及び、その流れを汲んで1901年に結成されたエスエル党は、ロシア政府が資本主義工業を移植しようと努力しているにもかかわらず、主要には国際・国内両面での市場不足のため、ロシアでは資本主義は発展しえないと主張した。彼らによれば、農民層の出稼の原因は、政府が資本主義工業を上から育成するために農民層から収奪していること、いいかえれば資本主義そのものではなく、政府の政策の特殊性の中にこそある²³⁾。そこで彼らは、出稼に伴って様々な矛盾を抱える農民層の利益を守り、また出稼に伴う共同体の弱体化を阻止するために、「出稼」(отхожий промыслы)や「放浪」(переко

чёвывание), 「移動」 (передвижение / поселение), 「移住」 (переселение) 等々の自由を制限し、地元での就労機会を拡大することを主張したのである²⁴⁾。かかるナロードニキの見解と、ロシアの共同体や出稼労働の特殊性よりむしろ、その一般性、すなわち「出稼」 (отхожий промыслы) が資本主義発展の「要約」であり、そこに当面するブルジョア民主主義革命の担い手の形成を見いだそうとするレーニンの視角との間の論点は、極めて鮮明である²⁵⁾。

同時にレーニンのこうした視角は、封建制の残存物に対する農民の革命的役割を積極的に評価する点で、プレハーノフの見解とも異なっている²⁶⁾。この路線の違いの基礎には、ロシア資本主義の発展の基盤をどこに求めるか、という違いが横たわっている。プレハーノフは、ロシア資本主義の起動力を都市の大工業、さらには西欧資本主義に求め、農民内部から育ってくる資本主義発展のエネルギーを積極的に評価しなかった。これに対し、レーニンは、資本主義発展の起動力・萌芽を農民層を中心とする人民的生産そのものの自生的発展の内部に認め、ロシア資本主義の内在的な起動力をクローズアップしたのである。いわばレーニンは、外からのインパクトの問題をいったん捨象し、ロシア国内の農民的生産の内部からの自生的な資本主義発展を検出し、それを起動力としたロシア資本主義発展の論理に視点を収斂させたからこそ、農民層を労働者階級の積極的同盟者と位置づけたのである²⁷⁾。

このようなレーニンの、いわば「内発的資本主義発展論」ともいべき視角は、同時に、プレハーノフやナロードニキが共に見逃していたロシア国内における機械制大工業と人民的生産との内在的関連をも照射し、労農同盟の主体的基礎を示した点で重要な意味をもった。機械制大工業に従事する工場労働者は、幾重にも序列をなす賃金労働者諸形態を通じて、最底辺の農村住民層と結合している。貧農は、プロレタリアート形成の内生的基盤にほかならない²⁸⁾。このような観点から見ると、出稼は、前述のごとく、農民・農村プロレタリアを労働者階級と結び付け、彼らに農奴制的な農村環境の矛盾を自覚させる大きな契機にほかならないという位置づけが可能になる。そこでレーニンは、都市と農村を往復する出稼農民・「都市にやってくる農村人」 (приходить в города деревенский люди) が、好奇心と関心をもって都市労働者階級の闘争を観察し、それを農村に伝えること、またそれによって労働者組織や階級闘争の種を都市的中心地だけに局限せず、広大なロシア全土に広げることの意義を、繰り返し強調している²⁹⁾。出稼農民は、貧農・農村プロレタリアと労働者階級の結節点として、それゆえ国家権力を掌握する農奴主的な地主階級を打倒するブルジョア民主主義革命の重要な担い手の一環として、位置づけられたのである。

そして、以上のような労働者の移動、とりわけ農民出稼の社会的意義を、レーニンは、資本主義による「労働の社会化」という概念で総括している。商品生産の成長に伴う国民的・国際的な巨大市場の成立、それに対応した生産技術の発展と生産の巨大な集積、その中での出稼を初めとする労働者の地域的「移動性」 (подвижность) と農業からの離脱、その移動を通じた人格的隷属の駆逐と家父長制的生活様式の破壊、さらに文化的欲望水準や知的水準の向上、そして階級関係の鮮明化と住民の階級的結合・結社への要求の増大、総じて住民の精神的風格の改変。これらすべてをレーニンは、生産と生産者自身を「社会化」していく、一連の資本主義的過程の要素として扱ったのである³⁰⁾。農民の経済的矛盾の総体としての「農民層分解」も、こうした労働の「社会化」の文脈に位置づけ、「古い家父長制的農民の根本的な破壊」、「新しい型の農村住民」の創出過程として捉える必要があろう³¹⁾。農民出稼を、単に経済的な意味での資本主義的「過剰人口」

と把握するにとどまり、出稼を通じた精神的風格の改変や、それに基づく社会的結合・結社の改変に至る一連の過程と切り離しては、出稼が、資本主義社会の形成・発展・崩壊に果たす意義を、十分に理解できないのである。

《注》

- (1) レーニン (1896~99) p 386~387・426・579~580・592。小営業者の都市から農村への移住についてはレーニン (1896~99) p 439, 辺境における鉱工業人口の増加については同 (1894~95) p 514, 同 (1897-a) p 221, 同 (1896~99) p 596。18世紀の都市への逃亡農民の増大については、土肥恒之 (1989) p 176。
- (2) レーニン (1896~99) p 513。バクー石油工業への労働者の移住については岡田進 (1989) p 69。
- (3) レーニン (1893-a) p 8~9・61, 同 (1894) p 224, 同 (1896~99) p 65・240~241, 同 (1901-b) p 173~174。レーニン (1899-e) p 171では、農業恐慌と植民地 (アメリカ・アルゼンチン等) の移民農業との関連が述べられている。
- (4) レーニン (1894) p 245, 同 (1894~95) p 400, 同 (1899-e) p 163。参考文献としてカウツキー (1899)。
- (5) 岩間徹 (1979) p 8~9, 木村英良・山本敏 (1979) p 25~26・194・274, 小島修一 (1987) p 72・74・76~77, ドゥブロフスキー (1963) p 366~368, 木村英亮 (1989) p 239。農民解放以前の辺境移民については、ドゥブロフスキー (1963) p 361, 菊地昌典 (1964-a) p 116~118・146~147・179~181, 岩間徹 (1979) p 8~9, 石戸部重郎・伊藤幸男 (1979) p 175~176, 土肥恒之 (1989) p 9~13・48~51・56~57・175, リーブマン (1967) p 17~18, ボクロフスキー (1920-I) p 65~76, 鳥山成人 (1985) p 279~287。
- (6) シベリア・中央アジアの農民層の階層分解・移民の雇用労働については木村英良・山本敏 (1979) p 194・25~26, 木村英亮 (1989) p 238。
- (7) レーニン (1893-b) p 108, 同 (1896~99) p 73・174~175・220・253~254・592~593・595・627, 同 (1899-c) p 96, 同 (1900) p 661。1907年以後では、同 (1907-d) p 236~237。
- (8) レーニン (1893-a) p 9, 同 (1894) p 231~232・306。地主・ツァーリ政府が、出稼同様、移民流出にも厳しい制限を加えていたことについては、ドゥブロフスキー (1963) p 362~363。
- (9) レーニン (1902-c) p 43~44, 同 (1903-a) p 18, 同 (1903-d) p 102・140~141, 同 (1905-a) p 44。辺境移民における共同体の維持については、同 (1893-a) p 9。ただし同 (1897-c) p 446~447では、ウラルで地主と鉱山主を兼ねた層が、鉱山業で働くために「植民」させられた農民層を、土地に緊縛された労働者として確保していることが指摘されている。
- (10) レーニン (1896~99) p 415・429。
- (11) レーニン (1896~99) p 513。
- (12) レーニン (1894) p 231。
- (13) レーニン (1896~99) p 199, 同 (1903-a) p 398, 出稼が下層農に多いことは、日南田静真 (1966) p 250~251。
- (14) レーニン (1897-b) p 325, 同 (1899-f) p 269。農村とのつながりについては、辻義昌 (1981) p 80。
- (15) レーニン (1902-b) p 109, 同 (1894), 同 (1905-c)。
- (16) レーニン (1905-c) p 93。
- (17) レーニン (1901-h) p 87~89, 同 (1907-a) p 272。
- (18) レーニン (1894) p 260~261・307, 同 (1907-a) p 297, 同 (1907-d) p 232。
- (19) レーニン (1902-a) p 18, 同 (1902-b) p 102・111~112・125・144, 同 (1903-a) p 389・420・

- 428～429, 同 (1902-e) p 209。
- ②① レーニン (1896～99) p 629, 同 (1899-c) p 96～97。
- ②② レーニン (1895～96) p 80, 同 (1901-a), 同 (1902-b) p 132～134, 同 (1903-c) p 208, 同 (1905-b) p 241～242。
- ②③ レーニン (1894) p 275・290～292・336, 同 (1894～95) p 387。ナロードニキについては, 雀部幸隆 (1980) p 255～256・260～271, 小島修一 (1987), 松岡保 (1964-a), 同 (1964-b), 同 (1968), 田中真晴 (1967) p 1～8・18～38・51～54・253～269・410～413, ヴァリツキ (1969), 菊地昌典 (1964-a) p 5～8, 和田春樹 (1974-b), 同 (1960), 中野徹三・高岡健次郎 (1970) p 49～50, 上島武 (1984), 西島有厚 (1983) 等。
- ②④ レーニン (1894～95) p 389, 同 (1897-a) p 166～167, 同 (1896～99) p 56。
- ②⑤ レーニン (1894) p 250・289, 同 (1897-a) p 223, 同 (1897-c) p 450～451, 同 (1897-d) p 488, 同 (1896～99) p 243～245・612～614, 同 (1902-b) p 141, 同 (1902-d) p 173～174。
- ②⑥ レーニン (1894) p 212・253～254, 同 (1894～95) p 400・404, 同 (1897-a) p 204, 同 (1897-c) p 382。先進資本主義諸国とロシアの共通性を基礎づけた資料としては, レーニン (1901-c・d・e・f), 同 (1901-j) p 10。
- ②⑦ プレハーノフとレーニンの関連については, 田中真晴 (1967), 同 (1968) p 93～100, 小島定 (1977), 中野徹三・高岡健次郎 (1970) p 103～105, 保田孝一 (1971) 第1章, 長尾久 (1965) p 38～39, 西島有厚 (1983)。
- ②⑧ 雀部幸隆 (1980) p 275～281, 田中真晴 (1967) p 64。
- ②⑨ 雀部幸隆 (1980) p 275～281, 小島定 (1977) p 96～97。
- ②⑩ レーニン (1894) p 331, 同 (1897-b) p 325～326, 同 (1901-a) p 468。参考文献としてエンゲルス (1872～73)。レーニン (1901-a) p 464では, 農業労働者の階級的自覚を発達させるために利用すべき機会のひとつとして, 蒸気脱穀機で働く機械工など, 都市労働者の農村への移住にも着目している。出稼労働者が都市の労働運動の意識と闘争形態を農村に持ち込む実態については, 日南田静真 (1968) p 261, 同 (1966) p 252～253・364・371。
- ②⑪ レーニン (1894～95) p 434, 同 (1897-a) p 207, 同 (1896～99) p 322・580～581・633～634。参考文献としてマルクス (1847)。
- ②⑫ レーニン (1896～99) p 165。

第4節 初期レーニンの出稼・移民論における課題

とはいえ, 以上みてきたこの時期のレーニンの内発的資本主義発展論に基づく出稼・移民論には, ひとつの大きな課題が残されていたことも事実である。それは, ロシアにおける農民出稼・国内移民という社会現象の中に, 資本主義の発展と「農奴制」の残存というロシア社会の2つの構造的特質が, いかなる関連をもって結合されているのかという問題が, 必ずしも明らかにされていないことである。レーニンのいう「農奴制的諸関係とブルジョア的諸関係の極度に複雑な絡みあい」¹⁾の具体的内実の問題といってもよい。

このことは, 出稼農民研究に引き寄せたとき, 次の具体的諸課題をもたらす。

第1に, この時期のレーニンのように, ロシアにおける伝統的諸関係, 特にツァーリズムと地主制度を, 単に「封建制の残存物」と規定し, 資本主義の発展に伴って早晚駆逐される存在とするならば, 農民層の出稼は, 脱農化・賃労働者化に至る一つの段階にしかすぎなくなる²⁾。とこ

ろが現実のロシア資本主義は、かかる伝統的諸関係を極めて長期間にわたって駆逐しなかったし、それゆえにこそ、農村と深く結びついた農民出稼という賃労働形態が維持・再生産されざるを得なかった³⁾。もちろん、イギリスを初めとする先進資本主義諸国においても、農民層の賃労働者化は一瀉千里に進んだわけではない。外国人出稼の流入や農民層の出稼化を含め、多様な構成の労働力が現実の原始的蓄積を支えたことはまちがいない。しかしながら、レーニンが、一方でロシアにおける資本主義の発展と労働者階級の成熟を西欧との共通性として強調し⁴⁾、他方でその桎梏としての「農奴制」の残存物の打倒を特殊ロシア的課題として、しかもブルジョアジーではなく労働者階級と農民の課題として提起すればするほど⁵⁾、ロシアにおいて「農奴制」が強固に残存し、労働者階級のうちに出稼労働者が大きな位置を占めることの根拠と意義が問われざるを得ないのである⁶⁾。

このことは第2に、出稼労働者の都市資本家階級に対する闘争の評価の問題にも連なる。レーニンは、確かに前述のごとく、出稼農民を本質的にはプロレタリアートと規定し、彼らが出稼先で資本家階級と様々な駆引きを行い、労働者階級としての自覚を強化せざるをえないことを指摘した。しかしながら、レーニンのように、当面する革命の課題を「封建制の残存物の払拭」に限定するならば、資本家階級との闘争は、それ自体、出稼農民の主体的変容の契機としては大きな意味をもつとしても、ロシア社会の客観的変革にはそれほど重要な意味をもたないことになる。レーニンが重視したのは、あくまで、出稼農民層が培った階級的自覚を農村にもち帰り、「農奴主的」地主との闘争に生かすことにほかならず、現実の労働運動において出稼労働者が発揮するエネルギーを十分には評価しえないのである⁷⁾。レーニンによれば、出稼農民＝出稼労働者は、確かにロシア国内においては農奴制的規制から相対的に自由な農村住民ではあるが、やはり農奴制的な農村に片足をおいた存在であり、純粹の都市工業プロレタリアからみれば、「未発達で、欲望水準もより低い」労働者でしかない⁸⁾。レーニンは、出稼農民＝「どこかへ賃仕事に出かける百姓」(мужичок отправляться куда — нибудь на заработки)が、「商業の話がさっぱりわからないし、わらじをはいているので一目で『無教養』とわかる」⁹⁾、「農村のしきたりを保存しており、工場労働者に固有の特別なみがきがかかっている」¹⁰⁾、「(工業諸県の労働者の間に)『牧夫』『コサック』『土工』とよばれている『賤しい』農村労働者を見下す態度さえみうけられる」¹¹⁾等々、未発達な側面を有していることを指摘している。全体として、「農村労働者は、まだあまりにもしっかりと農民に結びついており、まだあまりにも全農民的な不幸が彼らのうえにのしかかっている」。こうした認識に立つならば、ロシアにおける農村労働者の運動・社会主義革命は、「現在も近い将来にも」、「全国的な意義を帯びることはけっしてありえ」ず、かなり長期的な見通しで展望せざるを得ないことになるのである¹²⁾。

そして第3に、出稼農民が、農村に戻って地主階級と闘争する場合も、レーニンが評価しえたのは、あくまで「農奴主的」地主階級との闘争であり、農業資本家としての地主との闘争ではなかった。むしろ、出稼経験を通して培った階級意識に基づく闘争ではあっても、地主に対する徹底した闘争は、地主の資本主義的経営に打撃を与えないための配慮から抑制される。地主から収奪すべき土地を農奴制的経営が行われていると目される切取地に限定する「切取地綱領」は、その路線を象徴するものであったといえよう¹³⁾。1905年革命に向け、現実の農民層が、すべての地主所有地の没収・全人民的土地所有を求めている情勢の中で、「切取地綱領」は、やはり農民層の革命的エネルギーを組み尽くせず、それを抑制するものであったといわざるを得ない。

以上のように、レーニンの内発的資本主義発展論に基づく出稼農民理論では、農民が出稼にと

どまって純粋の賃労働者に移行しないことの根拠と意義、出稼農民の資本家階級に対する闘争がロシア社会構造変動・変革に与える影響、そして出稼農民層がすべての地主所有地の没収を要求せざるをえないことの理由等々が、合理的に説明できないのである。

この段階のレーニンの出稼論における以上のような課題は、主要には、次のような理論的基礎に基づいている。すなわちまず、当時のレーニンは、本源的蓄積過程における農業と工業の関連を一定考慮に入れ、それゆえにこそ農民層の非農業出稼の問題も考察できたのではあるが、しかし農業と工業の位置の相違、工業の発展の型の違いが農業・農民層分解に与える規定的影響を十分に考慮に入れず、農業内部における自生的な資本主義化・農民層両極分解を想定していた。そしてこのことは、当時のレーニンの視野が、ロシア中央部と辺境地方の関連には開かれていたが、世界資本主義の全体枠組の中で、周辺地域・後進資本主義国としてのロシアの特殊性を把握する方向には向かっていなかったことに基づいている。レーニンは、どの社会も、いわば「純粋の資本主義」に早晚到達するものと想定し、各国の特殊性は資本主義の発展程度の差（伝統的諸関係の残存の程度）としてのみとらえていた¹⁴⁾。この時期のレーニンが、ロシアにおける資本主義の発展を「もっぱら国内市場の見地からとりあげ、外国市場の問題や外国貿易の資料はのけて」¹⁵⁾おいたことは、決して偶然ではない。むしろ彼は、価値実現の問題を考察する場合、外国市場・外国貿易の問題を積極的に捨象し、ロシアにおける社会経済の発展の速度を、他国ではなく、ロシアの前資本主義段階との比較で見える見地の重要性をこそ強調している¹⁶⁾。このような視野の「限定＝限界」に基づく内発的資本主義発展論は、確かに、前項で見たごとく、ロシア国内・農村で着実に進む資本主義の発展に伴う労働の「社会化」・労働者階級の成長の実態を浮き彫りにし、封建制の残存物と闘う民主主義的労農同盟の体现者としての出稼農民という認識を、レーニンにもたらした。しかしそれと表裏一体の問題として、この内発的資本主義発展論は、出稼農民層が、農村共同体との関係を維持しながら、しかも資本主義発展そのもののの中で矛盾・葛藤を抱えざるをえないことの意義と根拠を不明確にし、そこで蓄積され、発揮される出稼農民層のエネルギーを十全に評価しきれなくさせるという限界をも刻印したのである。

《注》

- (1) レーニン (1902-b) p 106・112。
- (2) 太田仁樹 (1989) p 63・98・190・210, 渡辺寛 (1965) p 33, 大川健嗣 (1979) p 5, 真木実彦 (1966), 上島武 (1984) p 224。
- (3) 和田春樹 (1977-a) p 166, 岡田進 (1986-b) p 21。
- (4) レーニン (1896-99) p 7～8・169～170。参考文献としてカウツキー (1899)。
- (5) レーニン (1905-a) p 329～330, 同 (1901-h) p 15。
- (6) レーニン (1896-99) p 630は、辺境の植民地化が中心地の資本主義的成熟を遅らせたこと、またそれ自体、一層大きな成熟の準備でもあることに触れている。
- (7) 労働運動で出稼労働者が中心的な役割を果たしていたことについては、和田春樹 (1965), 同 (1974-a) 等。これと関わり、帝政期の資本家が、旅券制度により労働者を束縛することより、自由な労働市場を利用して好きなときに労働者を排出する傾向に移行していったことについては、荒又重雄 (1974-a・b)。
- (8) かかる出稼農民の後進的側面については、外川継夫 (1979) P 339～340, 岡田正 (1963) P 93, 原暉之 (1977) p 27, 和田春樹 (1965-2) p 184～185。1908年時点でも、都市労働者が出稼労働者よりも教育

や観劇等に金をかけていたことについては、辻義昌(1981) p 79。

- (9) レーニン(1894~95) p 401。
- (10) レーニン(1896~99) p 292。
- (11) レーニン(1896~99) p 268~269。
- (12) レーニン(1901-a) p 464。
- (13) 太田仁樹(1989) p 61~62・64・76~79・98・190。
- (14) 渡辺寛(1963) p 101~111・115~116, 同(1965) p 32~33, 太田仁樹(1989) p 36~38・52~56・97~98, 雀部幸隆(1980) p 278, 伊藤昌太(1980) p 122~123, 和田春樹(1961-a) p 5, 山内靖子(1974) p 27, 保田孝一(1971) p 27・38, 日南田静真(1966) 76~83・142~169, 竹内芳郎(1970-3) p 60, 真木実彦(1965-1) p 107~108, 西口章雄(1977) p 496~499・504~506, 矢吹満男(1976) p 4~5。
- (15) レーニン(1896~99) p 5・629。なお同(1893-b) p 92~99の再生産表式・市場理論でも国外市場と国内市場の質的な差異は言及されていない。
- (16) レーニン(1896~99) p 22・42・46・635, 同(1899-c) p 89~90・96・97。

第2章 「2つの道」理論・帝国主義論と出稼・移民論

それでは、第2期の検討に入ろう。1905年革命を経て、1906年11月、いわゆるストルィピン改革が開始された。農民に共同体からの離脱と私的土地所有とが認められたのである¹⁾。この改革により、多数の農民が、関を切ったように、シベリアなどの辺境地方、あるいはアメリカ・ドイツなど国外に、出稼や移住を開始した。シベリアへの国内「移民」(переселение)は、政府の移民奨励策や1904年のシベリア横断鉄道の開通に支えられ、1906年~1910年の5年間に251万6075人、すなわち年間約50万人、特に1908年には約66万5000人にも達した²⁾。アジア・ロシアへの移民も、1906年には21万9000人であったが、1907年には57万3000人、1908年には75万9000人と急増した³⁾。またドイツなどヨーロッパ諸国への「出稼労働者」(отхожий рабочий)・「外国人労働者」(иностранный рабочий)も急増し、1911~1912年にドイツ国内で就労するロシア人労働者は30万8000人にも及んだ⁴⁾。さらにロシアは、アメリカ合衆国に対しても、1906年~1910年の5年間に約93万8000人、1912年には約25万人の「移民」(иммиграция / переселение)・「外国人労働者」(чуждый рабочий)を送り出したのである⁵⁾。

第1節 資本主義発展の「2つの道」とシベリア移民政策

こうした現実の諸変化を背景として、1905年革命の総括とストルィピン改革の評価を通し、レーニンの出稼・移民論は急速に深化していった。1905年革命の中でレーニンは、予想以上のブルジョアの反動性と農民の革命性を痛感した⁶⁾。特に現実の農民運動は、「切取地綱領」の枠を超え、地主的土地所有総体の廃絶と全人民的所有(総割替)を要求して展開した⁷⁾。また革命後のストルィピン改革は、ツァーリズムが単なる農奴制の残存物ではなく、ロシア資本主義の推進者に脱皮しようとしていることを端的に物語っていた。こうした現実をふまえ、レーニンは、資本主義の発展における「2つの道」を定式化したのである。

すなわちまずレーニンは、ロシアでは農業問題こそが当面するブルジョア革命の基礎であり、この革命の民族的特殊性を条件づけていると規定した。この問題の本質は、「農奴制の残存物の支柱」としての農奴制的巨大土地所有と、それを廃絶するための農民層の闘争にある⁸⁾。彼によ

れば、資本主義の発展と農民の闘争は、ロシアにおける農奴制の維持をほぼ不可能にしていた。

その上でレーニンは、かかる「農奴制の排除」が、2つの道によって可能であることを指摘する。すなわち第1は、農奴主的地主経営が徐々にブルジョア的経営に変質し、地主的巨大土地所有を維持するプロシア的な道である。この場合、共同体を廃止し、貧農を農業から追い出す過程が促進される。第2は、すべての土地を国有化し、自由な農業企業群による急速な生産力発展を図るアメリカ的な道である。この場合、農奴制的巨大土地所有を廃止し、雇役を駆逐する過程が促進される⁹⁾。そしてレーニンは、ロシアでは、1861年の農民解放以来、「下からの資本主義の急成長」と「上からの資本主義の移植」が進展してきたと見る。地主経営もまた、資本主義の進路を「上から」切り拓いてきた存在として位置づけられるのである¹⁰⁾。いわばこの段階では、農奴制か資本主義かの選択から、異なる型の資本主義の2つの道の選択へと、レーニンの認識自体が明らかに一段階進んだのである。

そしてレーニンは、ストリピン改革の本質が、第1のプロシア的な道での「上から」の資本主義化の一層の推進にあり、したがってそのシベリア「移民」(переселение)・「移住」(расселение)・「離村」(выселение)政策のねらいも、ツァーリズムの新たな支柱としての「新地主」層を創り出すため、圧倒的多数の貧農を土地から追放する「土地清掃」にあると指摘した¹¹⁾。現に、政府の土地整理委員会は、巨大土地所有者が、賃労働の提供者として必要とする程度にしか貧農を残さないようにすることに「切実な関心」を抱き、「移民局から苦情が出るほど精力的に、貧農を『移住』(выселение)させ」ていた¹²⁾。いわば移民政策は、農奴主的地主が、その土地と権力を完全に保持したままで遂行しうるブルジョア的政策、彼らが開きうる「最後の弁」にほかならなかった¹³⁾。

そこで政府のシベリア移民政策では、移住者の権利や生活は全く顧みられず、「移住」(переселение)に全く適さない、技術的にも最も遅れた農民層が、定住に必要な措置がほとんど取られないままの辺境部に、大量に送り込まれていた¹⁴⁾。レーニンは、これに伴う様々な矛盾を詳細に指摘している。すなわちまず、「移民」(переселенец)たちは、老人・子供・妊婦、そして伝染病患者と一緒に家畜運搬用貨車にぎっしり詰め込まれ、シベリアに流し込まれていく。また彼らは、「シベリアでも幸福を見出さない」。シベリア「移住」(колонизация)のための土地フォンドは、多くの場合、作付地も放牧地もない鬱蒼とした針葉樹林地帯に散在していた。たとえばエムナ河沿いのいくつかの入植地では、入植者たちは「おそろしい穀物不足」に見舞われた。チェルノモリーエの移住先には、「単に個々の部落の間だけでなく、入植地それ自体の内部でさえ車両交通に適した道路がな」かった。またクリン地区では、「移住者」(переселенец)は、「飲用に適しない、塩からい水のでる土地を割り当てられ」、「7～8 ヴェルスタも先のエニセイ河まで水を取りに通って」いた。しかもそうした入植地の多くは、異民族の土着民から略奪されたものであり、土着民と「新移住者」(новосёл)の間には、直接的な敵対関係が作り出されていた。その上、シベリアの気候条件は厳しく、マラリア・チフス・壊血病、そして鳥目¹⁵⁾が、移民をさいなみ、「全村、一人の例外もなく、すべての移住者が鳥目になった村落」もあった。1907年には、多くの移民村落では、25%ないし30%という「全く信じられないほどの死亡率」が記録され、まさに「全村そっくり新しい土地に移住(переводворение)するか、それとも墓場に移住(переводворение)するかしなければならない」状態にあった¹⁵⁾。

以上のように、ストリピン改革の下でのシベリア「移民」(переселенец)は、資本主義発展のプロシア的な道のために切り捨てられた「棄民」にほかならず、彼ら自身、資本主義発展の

積極的な担い手と位置づけられた存在とは到底いえなかった。そしてかかる移民政策は、移民自身の生命と生活を守ろうとする行為、すなわち「逃亡」によって、破綻せざるをえなかった¹⁶⁾。1909年以降、新たに「移民」(переселение)に赴く者の数は「恐ろしく低下」し、1911年には18万9000人にまで減少した。他方、シベリアから戻ってくる「逆移民」(обратный переселенец)が「信じられないほど増加」し、1911年には「逆移民」は全体の60%に達した¹⁷⁾。このような逆移民の巨大な流れは、それ自体、政府の移民政策が完全に失敗したことを物語っている¹⁸⁾。

しかもこうした「逆移民」(обратный переселенец)は、故郷にただ戻ってくるだけではない。そもそも彼らは、「自分の全生涯を雇農であったような人々」ではなく、「つい最近まで経営主」であり、「彼と土地が別々にひきはなされて存在するなどということは夢にも考えることのできなかった人々」であった。その彼らが、シベリアで健全経営を確立しようという希望に満ちて、「家も屋敷も売りどばし」で移住し、ところが「今ではすっかり落ちぶれ、貧乏となって」、「絶望的な不幸、零落、貧窮」だけを抱えて、シベリアから舞い戻ってくるのである¹⁹⁾。彼らは、彼らを定着させることができず、すべてを失わせた国家制度に対し、憤りに燃え、「正当にもはげしい怒りにつつまれ」ていた。そこで彼らは、「幾十万という放浪するルーシの軍隊を形成し」、「革命的気分をかきたてる上でかなり目だった役割を演じ」、「あらゆる国家制度の脅威」とならざるを得なかった²⁰⁾。総じて、逆移民の存在は、「ロシアでも、シベリアでも、危機が激化していること」の証であり、ストルイピン改革が「ロシア資本主義発展の他のより高い段階で、古くからの危機を成長させている」ことの証拠にはかならなかった²¹⁾。

ただしレーニンは、シベリア「移民」(переселение)・「植民」(колонизация)そのものの意義を否定していたわけでは決してない。むしろ彼は、ロシアにおける広大な植民予備地の存在や「移民」(переселенец)による開拓の可能性が、アメリカ的な下からの資本主義発展にとってこそ、重要な経済的基礎になると考えていたのである²²⁾。こうしたレーニンの認識を支えたのは、アメリカとロシアの農業制度に関する「とくに教訓的」²³⁾な比較研究であった。すなわちアメリカ西部は、土地用益の調整が、農奴主的国家ではなく、民主的になされているとはいえ、非占取地の無償分譲・「植民」(колонизация)の地方である点で、ロシアの辺境地方と似ている。他方、アメリカ南部では、ロシア中央部で典型的に見られる雇役制度、つまり半封建的な現物小作制度が数かれ、黒人を中心とする半奴隷的な現物小作農が大きな位置を占めている²⁴⁾。そしてこうした南部から、多くのアメリカ人が、より資本主義的な西部や都市に「移住」(заселение / переселение)しており、それはまさに、ロシアの農民層が、農奴制の最も強く残っている中央農業諸県から、辺境や工業諸県、大都市に「逃げ出している」(бежать)のと同じである。その意味で、アメリカにおける黒人の地位とロシア中央部における農民の経済的な地位はきわめて類似している²⁵⁾。このような両国の比較は、一方で、資本主義が、国毎に、また一国内でも、きわめて多様な土地所有・労働形態を取りながら、自らを成長させ、貫徹していくことを物語っている。そして同時に、ロシアにおけるアメリカ的な資本主義発展の道の客観的可能性をも示しているとレーニンは考えた²⁶⁾。そこでレーニンは、ロシアにおいては、中央部の農奴制的巨大土地所有・専制政府の存在こそが、辺境地方の合理的な「移住」(переселение)を妨げ、したがってロシア資本主義のアメリカ的な発展の道を妨げていると主張したのである²⁷⁾。

以上のように、レーニンは、この時期、資本主義発展の2つの道に基づく2種類のシベリア移民を想定していた。すなわち、シベリア「移民」・「移住」(расселение / переселение)は、

基本的には、ロシアの資本主義的發展を促進する重要な契機である。しかし、それが第1のプロシア的な發展の契機となるか、それとも第2のアメリカ的な發展の契機になるかは、ロシア中央部の農奴制的土地所有を打倒して、「土地国有化」を実現するか否かにかかっているとしたのである²⁸⁾。このことは、具体的には「切取地綱領」の撤回、「土地国有化綱領」の提起として結実した²⁹⁾。ここでは、1905年以前の第1期に比べ、ブルジョア革命における農民層の役割が一層大きく位置づけられている。もはや農民層は、出稼などを通して労働者階級の影響を受けるか否かにひとまずかわりなく、何よりもアメリカの資本主義發展の担い手たる「農民＝小ブルジョア」として土地国有化という要求を掲げ、プロシア的な資本主義發展の担い手たる農奴主的地主の打倒を目指さざるをえない存在として把握されている³⁰⁾。それゆえにこそ、この第2期には、プロレタリア化としての出稼よりも、むしろ資本主義的な農業経営の実現を目指す移民農業者の動向こそが、レーニンの視野の中心に据えられてきたのである。

ところで、以上のようなレーニンの認識、とりわけ「2つの道」と「土地国有化綱領」は、ロシア資本主義に対して相矛盾する2つの認識を内包している。

すなわち第1に、「上から」の資本主義發展の担い手たるロシアの地主階級は、切取地に限らず、総ての所有地で、農奴主的に雇役制度を駆使している³¹⁾。その意味で、ロシア資本主義の發展、特にその中心をなす農業資本主義の發展過程それ自体に「農奴制の残存物」が大きな影響を刻印しているのである。この側面から総括すると、第1期の「切取地綱領」は、農奴制の残存物の意義を「過小評価」し、逆にロシア資本主義の發展を「過大評価」し、総じて「發展の方向を正しく規定しながらも、發展の時期を正しく規定しなかった」ところに誤りがあったことになる³²⁾。また現実の農民運動のエネルギーは「下から」の資本主義化要求であり、「土地国有化」の意義はあくまで「いっさいの農奴制の廃絶」と「下から」の資本主義發展の促進にあると想定される。そして「土地国有化」は、「資本主義の末期ではなく、その初期にだけ」、すなわち資本主義が「2つの道」のいずれを選択するか未だ定まっていない段階に限って可能な施策として提起されるのである³³⁾。

しかし第2に、ロシアの地主階級の農業経営は、切取地でのそれをも含め、資本主義的經營はほかならない。いわば、伝統的な農奴制の残存物は、もはやそのままとどまることは不可能になり、「上から」ではあれ、資本主義を推進する担い手に転化せざるをえない段階に達しているのである。その意味では、第1期の「切取地綱領」の限界は、単に「資本主義發展の過大評価」等という測量的な問題ではなく、むしろ「農奴制の残存物」を変質させるまでに資本主義が発達していること、あるいは、その中で「農奴制の残存物」が資本主義發達の担い手に転化し、生命力を保ち続けうることを看過するといった質的な誤りであった。この認識に立てば、現実の農民運動は、単に「農奴制の廃絶」ではなく、実は、地主的土地所有を有機的な一環として包摂するロシア資本主義そのものに反対する闘争であることになる³⁴⁾。そして「土地国有化」も、「ブルジョア革命の最後の言葉」であるだけでなく、後にレーニン自身が述べたごとく、「社会主義への第1歩」と位置づけられるのである³⁵⁾。

以上の2つの側面の内的連環は、当時のレーニンにおいては、十分に整理されないまま並列的に示され、資本主義發展に伴う「農奴制」の解体を引き続き主張するメンシェビキとの論争の中で、結局、第1の側面、すなわち「農奴制」の強固な残存を強調し、資本主義發展の「過大評価」を戒める方向に収斂されていく。そこで、従来、第1の側面にに基づく「2つの道」理論の限界がしばしば指摘されてきた。すなわち、「2つの道」理論は、決して世界資本主義の全体枠組の中

で後進資本主義国としてのロシアの特殊性を類型として把握したものではなく、依然として、農業内部での自生的な資本主義化・農民層両極分解を前提としている。むしろ、順調な農民層分解の帰結を「アメリカ的」道として提起し、しかも「農業問題こそが当面するブルジョア革命の基礎」と位置づけることにより、この問題点を一層助長させた側面を有している。したがって、「2つの道」の選択は、もっぱら農民と地主の階級闘争によって決定されるものと把握され、階級闘争そのものの形態や性格を制約するロシアの特殊性は看過される。また、こうした理論的限界から導かれる実践的な問題点としては、農民や労働者の要求がもっぱら全面的資本主義実現の枠内に限定され、資本家に対する闘争力を汲み尽くせない。そして革命後の政治権力を労働者階級と農民の同盟として想定しながら、革命の性格はあくまで純粋な資本主義革命とする点で不整合がある³⁶⁾。

しかしながら、レーニンの理論的深化を把握する際、以上のような様々な問題点と表裏一体の形で、第2の側面、すなわち農民運動を、地主的土地所有を不可欠の構成要素とするロシア資本主義そのものに対する批判と見、土地国有化を「社会主義への第1歩」と位置づける認識枠組が生起しつつある側面を見逃すことはできない。もとよりこうした認識は、この段階のレーニンにおいては、断片的な示唆にとどまっている。とはいえレーニンは、すでにこの段階に、ロシアの地主経営がブルジョアジーと結びついていること、それゆえ、地主所有地の没収は大ブルジョアジーの利益をも覆すことを指摘している³⁷⁾。このことは、「上から」の資本主義化との対抗関係における「下から」の資本主義化の現実性いかによっては、こうした小ブルジョアの農民のエネルギーが、社会主義実現の過程でこそ一層強く発揮される可能性をも示唆している。またレーニンが、当面する革命の主たる担い手を労農同盟に見いだしていた事実も、こうした革命の「社会主義的」性格と通底するものであったといえよう。

以上、述べてきたこの段階のレーニンの理論的到達点と限界は、いうまでもなく、彼の出稼・移民論にも大きな特徴を刻印している。

すなわちレーニンは、まず、シベリア移民を、「下から」の農業資本主義発展を志向し、しかもその志向を「上から」の資本主義育成の試みによって打ち砕かれる存在として、その意味で当時のロシア社会の矛盾の焦点として把握した。それゆえに彼は、「逆移民」の革命的エネルギーを最大限に評価したのである。また彼は、ロシアで「2つの道」の選択が可能である経済的基盤を、広大な辺境＝国内植民地に、従ってシベリア移民の豊かな可能性に見いだした。

しかしながらここで注意すべきことは、現実のシベリア移民が、決して「土地国有化」を要求せず、むしろストリピン改革に沿って、私的土地所有を求めた農民層にほかならないという事実である。しかもシベリア移民政策の破綻は、確かに、「逆移民」にならざるをえなかった農民層に、「上から」の資本主義が彼らの利益に対立するものであることを思い知らせた。しかし同時にその体験は、彼らに、「アメリカ的」発展の道が、当時のロシアでは、事実上、閉ざされていたことをも教えたのである。こうした事態の中で、彼らは、地主的土地所有を不可欠の構成要素とするロシア資本主義そのものの粉碎に立ち上がることはあっても、「土地国有化」に基づく「アメリカ的」の可能性を再び追求しようとはしないであろう。現にレーニン自身、逆移民の「革命的気分」を重視しながらも、それがいかに「アメリカ的」道や「土地国有化」の要求に結晶化していくのかは、必ずしも明確に示していないのである。

なおストリピン改革の結果、この時期には、出稼労働を含む農民層の賃労働者化も進行した³⁸⁾。レーニンは、この農民層の出稼労働について、それほど明示的には言及していない。し

かしながら、すでに見てきたこの段階のレーニンの認識に立てば、出稼労働は、単なる脱農化・賃労働者化に至る一段階、農奴制からの脱却の一指標ではなく、ロシアにおいて「上から」の資本主義化を図る伝統的諸勢力が目的意識的に維持・再生産してきた賃労働形態と位置づけられよう。とりわけ大地主経営で就労する農業出稼は、それ自体、「上から」の資本主義における賃労働者化のひとつの典型である。こうした認識により、第1期における出稼農民の階級闘争の相手における矛盾——出稼先では資本家と、農村では農奴主的地主と——が解消され、出稼農民は、出稼先でも地元でも資本主義を「上から」育成しようとする諸勢力に対して闘争する存在として、すなわち「下から」の資本主義化の担い手として、論理的には矛盾なく、統一的に把握されるのである。

しかしながら、こうした出稼農民認識は、前節で見た第1期の基本的認識、すなわち、資本主義発達・農民層分解の進展に伴う労働者階級としての成熟という問題意識との十分な接面を有していない。さらに、当面するブルジョア革命の基礎が農業問題に設定されることも相俟って、結果的には、第1期にレーニン自身が描き出した、労働者階級との接触による農民の文化変容の場としての出稼の意義や、あるいは出稼先で資本家階級に対して行う階級闘争の意義³⁹⁾等に対する問題意識も、遥かに希薄になっている。いわば、出稼農民層の「プロレタリア」的側面が軽視され、もっぱら「下から」の資本主義化を担う「小ブルジョア」的＝農民的側面が前面に押し出されているのである。労働者と農民の結合に関する視点は明らかに後退しているといわざるをえない。

《注》

- (1) ドゥブロフスキー（1963）、倉持俊一（1979）p 413、同（1980-a）p 143、松田道雄（1970）p 204～205、ヒル（1947）p 97、保田孝一（1971）p 69・153～170等。ストルイビン改革を先取りしたヴィッテの政策、とりわけその移住促進政策については、ドゥブロフスキー（1963）p 50～85、和田春樹（1965-1）p 190、同（1972）p 56～57、保田孝一（1971）p 140～151、日南田静真（1966）p 359～362。
- (2) レーニン（1913-b）p 49、同（1913-f）p 184。1896～1905年のシベリア移民は107万人、1886～95年のそれは16万人であった。また1908年のシベリア移民数については75万9000人、1896～1914年の辺境への移民総数は400万人等の資料もある。外川継男（1979）p 344、木村英亮・山本敏（1979）p 271・199、大崎平八郎（1989）p 126。シベリア移民の動向については、ドゥブロフスキー（1963）p 363～365・368・372～375、ダンコース（1979）p 6。
- (3) アジア・ロシアへの移民は、1898～1900年には毎年20万人ほどであった。外川継男（1979）p 351。なおシベリア鉄道開通以前、極東への移民の一部は、スエズ運河をへて海路で移住していた。木村英亮・山本敏（1979）p 274。
- (4) レーニン（1913-e）p 354～356、同（1913-i）p 487。1911～1912年にドイツで就労していた外国人労働者は72万8000人で、ロシア人はその4割以上を占めていた。またポーランドのロシア国境地帯の農業出稼労働者は、1901年から1911年の10年間に3倍以上に増加し、1911年には約74万人、1912年には約80万人に達した。ドゥブロフスキー（1963）p 452。1913年当時、毎年80万人の出稼農民がドイツやデンマークに赴いたことについては辻義昌（1981）p 51。
- (5) レーニン（1913-i）p 486～487。1900～1909年にはロシアからアメリカへの移民は141万人に達し、特に1905年革命以後、激増した。グールヴィチ（1912）、森廣正（1986）。1912年、ロシアからブラジルには

- 17万人、カナダには20万人が移住し、アメリカ大陸全体には62万人が移住した。また外川継男（1979）p 351によれば、ヨーロッパ・ロシアからアメリカ合衆国への移民は、1906年以後、20万人を突破し、1907年には25万8000人に達した。その後、やや減少するが、それでも1910年には18万7000人が移住した。また同書p 340、木村英亮（1989）p 238によれば、ユダヤ人に対するボグロムが1903年～06年に激化し、ユダヤ人の国外移住も激増した。1897年～1914年に約150万人のユダヤ人がロシアを去り、うち70%がアメリカ合衆国に移住したのである。ボグロムに伴うユダヤ人の国外移住については、スチュワート（1976）p 78、富岡次郎（1988）p 14～15、丸山直起（1990）p 29～37。
- (6) 渡辺寛（1965）p 34、長尾久（1965）p 39～40、浅田喬二（1969）p 27、リープマン（1967）p 50、倉持俊一（1980-a）p 101、同（1980-b）p 36、太田仁樹（1989）p 75、マクレラン（1979）p 11、佐藤芳行（1989）p 206。
- (7) レーニン（1907-d）p 253～255・289～290、太田仁樹（1989）p 76・74、倉持俊一（1979）p 407～408、同（1980-a）p 137～138、雀部幸隆（1980）p 17・40・299、日南田静真（1969）p 99～106。
- (8) レーニン（1907-d）p 231・234・237・251・433。
- (9) レーニン（1907-d）p 234～235・237～240・251・433～435、同（1908）p 91・118～119・122～123、同（1896～99）p 10～11。
- (10) レーニン（1907-d）p 349、同（1908）p 74。ラヴョールイチェフ（1985）p 200。
- (11) レーニン（1907-d）p 239・274～275、同（1912-a）p 85・87、同（1912-b）p 257～259、同（1913-f）p 184。ドゥブロフスキー（1963）p 91～92・206～207、倉持俊一（1980-a）p 143～145、雀部幸隆（1980）p 307～313。
- (12) レーニン（1912-a）p 92。
- (13) レーニン（1912-b）p 257・260。
- (14) レーニン（1907-d）p 245～246、同（1912-a）p 87。ポッフア（1976）p 21。
- (15) レーニン（1896～99）p 254、同（1912-a）p 90～95、同（1913-b）p 53、同（1913-f）p 187～188。ドゥブロフスキー（1963）p 361～362・374～376。
- (16) レーニン（1912-a）p 92。
- (17) レーニン（1913-b）p 49～50、同（1913-d）p 77、同（1913-f）p 184～185。ドゥブロフスキー（1963）p 368・374・376～377。真木実彦（1989）p 302によれば、1914年までにアジア・ロシアに移住した農民約420万人中、定着者は147万余人にすぎなかった。外川継男（1979）p 351によれば、1908年以後アジア・ロシアへの移民も減少し、1909年に70万7000人、1910年には35万3000人となっている。
- (18) レーニン（1913-f）p 185、雀部幸隆（1980）p 315。ストルイビン改革の破綻を示すもうひとつの現象として、実際に共同体を脱退した農民が、1907年から1915年までにヨーロッパ・ロシア40県の全共同体農家の2～3割前後にとどまったことがある。倉持俊一（1979）p 414、同（1980-a）p 144～145、日南田静真（1968）p 266～267、松田道雄（1970）p 205、雀部幸隆（1980）p 314、ヒル（1947）p 100、保田孝一（1971）p 83、佐藤芳行（1989）p 25。
- (19) レーニン（1913-f）p 185。ドゥブロフスキー（1963）p 208～210・377。木村英亮・山本敏（1979）p 195。
- (20) レーニン（1912-a）p 92、同（1913-b）p 50～51・54、同（1913-f）p 188。
- (21) レーニン（1912-b）p 260。雀部幸隆（1980）p 315。
- (22) レーニン（1907-d）p 250・251・435。保坂哲郎（1972）p 97。雀部幸隆（1980）p 310～312によれば、農奴解放以後の辺境への植民をはじめ、中央黒土地帯においても、プロシア型の道に歪曲されながらも、

アメリカ型の道が、農民経営の中に育ちつつあった。また木村英亮・山本敏（1979）p 274によれば、南東部シベリアに比べ、極東地方に移住した農民は、かなり大きな分与地を政府から付与されて定着した。

- ②3 レーニン（1915-a）p 109。なお1905年以前におけるアメリカとロシアの比較については、同（1905-a）。レーニンのアメリカ農業統計分析の方法については、喜多克己（1975）、大川健嗣（1967）。
- ②4 レーニン（1915-a）p 8-15。
- ②5 レーニン（1912-15）p 377, 同（1914-15）p 451, 同（1913-d）p 77, 同（1915-a）p 9・16-17。ヒューバーマン（1947）p 36, 中西弘次（1972）p 402。
- ②6 レーニン（1915-a）p 47・59。
- ②7 レーニン（1907-d）p 247・249-251・435, 同（1908）p 64-65, 同（1912-a）p 85-86。
- ②8 レーニン（1907-d）p 276・278・291・340-341・436-437, 同（1908）p 63-64。
- ②9 レーニン（1907-d）p 253-255・289-290。和田春樹（1986-b）p 360。
- ③0 農民の要求は、客観的には社会主義ではなく、徹底的な資本主義的・民主主義的変革である。その意味でナロードニキは、社会主義的ユートピアとしては誤っていたが、小ブルジョアの急進民主主義的志向の表現としては、正確であった。雀部幸隆（1980）p 260-261・271・312-313。阪本秀昭（1989）p 255によれば、1906年の南西地方の農民運動には、出稼労働者の追放、地元労働者の雇用という要求が含まれていた。なおこの要求を代表するエスエルの農業綱領については、山内靖子（1974）、高岡健次郎（1963）、和田春樹（1977-b）。
- ③1 雀部幸隆（1980）p 305-306でも、純ロシアの諸県では雇役制的な地主経営が圧倒的に優勢であったことが指摘されている。
- ③2 この点を強調した理解として、太田仁樹（1989）、渡辺寛（1965）p 34, 西口章雄（1977）p 517-518, 保田孝一（1971）p 78-89。
- ③3 レーニン（1907-d）p 253-255・289-290・300。太田仁樹（1989）p 100。
- ③4 保田孝一（1971）p 81-82, 林道義（1970）p 180, 牧原憲夫（1977）p 40-41, 日南田静真（1966）p 397, 同（1969）p 112, 浅田喬二（1969）、真木実彦（1965）p 121。
- ③5 レーニン（1907-d）p 349-350・442。
- ③6 太田仁樹（1989）p 81-84・86-87・99-102・190-191・211-212, 渡辺寛（1963）p 142-150・156-158・182-184, 保田孝一（1978）p 78, マクレラン（1979）p 120, 浅田喬二（1969）、牧原憲夫（1977）p 39・42, 真木実彦（1965）p 229-230, 日南田静真（1974-b）、矢吹満男（1976）、西口章雄（1977）、林道義（1971）p 108-111等。なおレーニン（1915-a）におけるアメリカ農業の分析にも、同様の問題が指摘されている。大川健嗣（1979）p 6-7, 同（1967）。高田和夫（1989-a）p 273は、1912年のレナ金鉱労働者ストライキを担った労働者が、ストルイビン改革で創出された移住農民であったことを指摘している。その他、階級闘争の重要性を認めた点に、むしろ積極面を見いだす見解として、尾崎芳治（1990）p 393。
- ③7 レーニン（1907-d）p 349-350・442。
- ③8 この時期の出稼増加については、ドゥブロフスキー（1963）p 428・438-439。
- ③9 出稼労働者を中心とする1914年のバクー石油工業におけるゼネストについては、高田和夫（1974）参照。

第2節 帝国主義論の展開と2月革命の総括

さて、以上のような理論的限界の克服にとって重要な足掛かりとなったのが、帝国主義論をめぐる諸考察とそれをふまえた2月革命の総括であった。

1914年の第1次世界大戦＝帝国主義戦争の勃発と、その後の第2インターナショナル指導部による自国政府の戦争支持・「祖国防衛」という態度は、レーニンをして帝国主義世界体制の研究に赴かせた。レーニンにとって、かかる諸矛盾をもたらした帝国主義に関する理論的認識を確立すること、すなわち世界資本主義発展の発展段階としての帝国主義の特質、及び、その運動の帰結としての世界的規模での帝国主義戦争の論理を解明し、世界の危機からの活路として世界社会主義革命を展望することが、不可避の課題になったのである¹⁾。

そこでレーニンは、まず、20世紀初頭が「古い資本主義から新しい資本主義への、資本一般の支配から金融資本の支配への転換点」²⁾であることを明らかにした。新たな段階の資本主義は、「資本の輸出と世界の最後の分割＝世界的植民地政策を不可避に」³⁾し、しかもこの段階の独占は、「ひとたび成立し、幾十億の資本を自由自在にするようになれば、絶対的な不可避性をもって、……社会生活のあらゆる側面に浸透していく」⁴⁾のである。

こうした帝国主義の特質把握は、従来のレーニンの資本主義認識に対し、以下の諸問題を浮き彫りにした⁵⁾。第1に、資本主義は、必ずしも常に「前資本主義的」諸制度を駆逐して民主主義や進歩性を体現するとは限らず、少なくとも帝国主義段階においては、独占の形成や世界植民地体制の確立等を通して反動性と結びつき、自己の再生産・発展にとって必要な限りで「前資本主義的」諸制度を包摂する。その意味で「前資本主義的」諸制度の残存をもって、一概に資本主義が未成熟であるとはいえないのである。第2に、資本主義は、農業の枠内で必ずしも確立せず、広範に農民層を存続させたままであっても、特に工業部門における独占体の確立や金融資本の支配の確立、資本輸出と国際トラストによる世界の分割等々に基づき、帝国主義段階に到達しうる。そして第3に、帝国主義段階においては、資本主義は、国民経済の枠を超え、一個の世界システムとなり、したがってもはや、「先進国は後進国の未来像」という図式も通用しなくなる。

しかも、以上のような帝国主義に関する認識は、「あれこれの国における革命的諸任務の個別の解決」が不可能であることをも提起した。帝国主義戦争が、世界的な金融資本主義を最終的な段階にひきこみ、政治機構や農業部門に残存する各国のいかなる特殊性にもかかわらず、社会主義革命のための客体的・主体的な前提条件を世界的な広がりで提供するのである⁶⁾。レーニンは、かかる意味で、帝国主義を「死滅しつつある資本主義」⁷⁾と把握した。

そしてレーニンは、このような帝国主義世界体制の認知枠の中で、新たにロシア資本主義の問題を考察した⁸⁾。彼によれば、ロシアもまた、前資本主義的關係の細かな網の目におおわれているとはいえ、こうした「資本主義的帝国主義」諸国のひとつにはかならなかった⁹⁾。確かにロシアでは、「軍事的・封建的帝国主義」(ツァーリズム・地主)と「最新型の資本主義的帝国主義」(ブルジョア)が共存しており、前者が相対的に強力ではある。ここでは農業に基礎をおいた封建的な社会が専制権力によって統治されており、ブルジョア国家は確立していない。しかしながらこのロシアにおいても、「資本主義的帝国主義」は、「帝国主義」とよぶうだけの、またたとえ「軍事的・封建的帝国主義」が打倒されても十分に生き残っていけるだけの発達をすでに遂げているのである¹⁰⁾。かかる「軍事的・封建的帝国主義」と「資本主義的帝国主義」の二重構造としてロシア帝国主義を把握する基礎には、すでに見た「2つの道」理論における資本主義の類型把握が存していたことはいうまでもない。

こうして、帝国主義論の認知枠は、一方で農村をはじめとする前近代的諸關係の残存と、他方で先進工業地域におけるアメリカをものぐ生産の集中の進行という、20世紀初頭ロシアの社会的特質を統一的に把握することを可能にした。同時に、こうしたロシア帝国主義の特質にこそ、

ロシアにおける労働者と農民の革命的エネルギーの結合の根拠も見いだされた。すなわち、ロシアの農民運動は、「軍事的・封建的帝国主義」から「ブルジョア的ロシア」の解放をめざす¹¹⁾。とはいえ、独占と金融寡頭制の支配を前提とすると、農業のアメリカ型の革新によって国民経済全体のアメリカ的發展をもたらすという「二つの道」構想は、もはや実現困難な展望といわざるをえない。また、アメリカ型資本主義そのものが、帝国主義として人民大衆に対する抑圧機構に転化しているとき、それを目指すことの積極的意義ももはや喪失している¹²⁾。そこでロシアの労働者階級は、ブルジョア革命を遂行し、ツァーリを打倒することのできる唯一の階級ではあるが、しかし彼らにとって、このブルジョア革命は、もはや自らの要求をブルジョア革命の枠内に限定し、「富農が農村労働者と闘うのを助けるため」のものではない。むしろ、世界体制としての帝国主義の下、ヨーロッパのプロレタリアート革命と連動して社会主義革命に強行転化させるための民主主義革命にはかならないのである。そしてロシア革命の勝利は、西欧諸国における社会主義革命の展望を蘇らせ、その意味でロシアの労働者階級には、国際的規模でさし迫った社会主義革命の先兵としての位置が与えられる¹³⁾。すでに1915年、レーニンは、ロシアのプロレタリアートの任務が、「ロシアのブルジョア民主主義革命を最後まで遂行し、こうして、ヨーロッパにおける社会主義革命に火をつけること」にあると述べた¹⁴⁾。

このような帝国主義論の認知枠と革命の展望をもって、レーニンは、現実の2月革命を迎えた。2月革命により、「軍事的・封建的帝国主義」の政治的担い手たるツァーリズムは打倒され、そこでレーニンは、この革命を「ブルジョア民主主義革命の終了」と位置づけた¹⁵⁾。

しかしながら、ここでは3つの点に留意しなければならない。

第1に、2月革命で成立した権力は、1905年にレーニンが主張していた労農民主独裁権力ではなく、ソヴェトと臨時政府の二重権力であった。ソヴェトは、事実上権力を掌握しながら、「自覚と組織性が不十分なために」権力をブルジョアジー（臨時政府）に引き渡したのである¹⁶⁾。したがって、徹底した民主主義的変革を実施するためには、「帝国主義論」以前のレーニンの立場にたったとしても、権力の階級的基盤という観点からすれば、臨時政府の打倒が当面の課題になる。

第2に、「帝国主義論」研究を通して培われたレーニンの知見をふまえるならば、たとえ「軍事的・封建的帝国主義」（ツァーリズム・地主）が完全に一掃されたとしても、「資本主義的帝国主義」勢力（臨時政府）の遂行する帝国主義戦争の性格は少しも変化しない。帝国主義戦争に反対し、自国の政府を打倒することこそ大戦勃発以来のレーニンの基本的立場であった。そこでこの視点から見ても、臨時政府は、当然、打倒の対象となる。

しかし第3に、2月革命により、1905年革命で提起されたブルジョア民主主義の課題のすべてが解決されたわけではない。現に、かつてレーニンが「2つの道」理論において「ブルジョア革命の中心的課題」と位置づけた農業問題・土地問題を含み民主主義的諸課題は依然として未解決であった¹⁷⁾。この事実を重視するなら、ブルジョア革命は未だ途上にあり、その完遂こそが労働者階級の当面の任務であるかのように思われる。古参ボリシェビキの多くは、その立場から臨時政府の支持を主張したのである。

そこでレーニンは、「二つの道」理論にしがみついた古参ボリシェビキに対し、「ねえ君、理論は灰色で、緑なのは黄金なす生命の樹だ」という言葉をゲーテのファウストから引用して批判しつつ、帝国主義論以後の新たな認知枠に基づく革命路線、すなわち、「軍事的・封建的帝国主義」の打倒に引き続く「資本主義的帝国主義」の打倒、総じて帝国主義の打倒を、労働者階級に提起

した¹⁸⁾。1917年3月の電報¹⁹⁾や「遠方からの手紙」²⁰⁾で、レーニンは、ツァーリズムの崩壊にもかかわらず、戦争は依然として帝国主義的であること、2月革命が国家間の戦争を世界的な階級間の内乱に転化するに際しての最高峰にならないと断言しなければならないこと、その意味で、臨時政府の支持は労働者階級に対する裏切りであり、現段階が社会主義革命の途上での一休止にすぎないことを主張した。また同年、亡命先のスイスを離れる前に、彼は、帝国主義戦争が、革命を「ロシア革命の最初の段階に局限させず」、「ロシアだけに局限」しない保証になっていると強調した²¹⁾。こうしてレーニンは、2月革命以前に比べ、「軍事的・封建的帝国主義」と「資本主義的帝国主義」の、帝国主義としての同質性・連続性を一層鮮明に打ち出していくのである。

ところで、古参ボリシェビキが「二つの道」理論に固執した理由のひとつに、帝国主義論研究があくまで世界資本主義の総括的構造を国際的相互関係において把握したものであり、2月革命以前には、その視角からロシア国内の社会経済状態を内在的に分析する側面が希薄であったことが挙げられる。国内的には、土地問題の解決を最大の焦点とした「二つの道」理論に基づく革命路線が存続し、国際的には、各国の特殊性を遥かに越えた帝国主義世界体制の中での革命路線が新たに創出されていた点に、混乱の一因があったのである²²⁾。そこでレーニンは、2月革命以後、ロシア国内の土地問題・農業問題を、新たな視点から積極的に分析した。

そこで明らかにされた最も重要なことは、ロシアでは、地主的土地所有の大部分がすでに銀行資本の抵当に入っており、それゆえ、「地主ばかりでなく資本家も、すべての地主所有地を無償で農民に引き渡すことに反対」していたという事実である²³⁾。このことは、ブルジョア革命の枠を超え、農民と労働者が全国家権力を掌握し、ブルジョアに対する「断固たる革命的方策」、すなわち「銀行とシンジケートを国有化してはじめて実行できる方策」をとらない限り、地主所有地の農民への無償交付自体、もはや実現できないことを意味していた。もとよりレーニンは、「切取地綱領」の段階にすでに、農奴解放以来、農奴主的土地所有からブルジョアの私的土地所有への移行が進んでいることを指摘し²⁴⁾、また「2つの道」理論の時期にも、地主所有地の没収が大ブルジョアの利益を覆すことに言及していた²⁵⁾。しかし、2月革命以後、初めて、この事実が、当面する革命路線そのものに明確に位置づけて考察されたのである。

こうした事実認識に立てば、土地国有化は、農業の民主主義的革新にとってのみならず、労働者階級の社会主義的前進にとっても重要な意義をもつことになる。また農民の土地要求も、もはや単純なブルジョア的要求ではなく、それ自体社会主義に至らざるを得ない要素を含むことになる。農民は、自らの要求実現のために労働者階級との同盟を必要とし、自ら社会主義に向かって進まざるを得ないのである。現に農民は、2月革命以後、村落共同体に結集して地主に圧力を加えていた。彼らは、「土地はだれのものでもない」と考え、決して私的土地所有を望んでいなかった。しかも帝国主義戦争のもたらす惨禍は、農民大衆を目覚めさせた。ロシア軍の夏期攻勢の失敗と加速化する国民経済の崩壊は、農民の「革命的祖国防衛主義」への熱意を急速に冷却させたのである。こうしてレーニンは、農民の共同体的要求を根底的に理解し、さらにその運動を、帝国主義段階における社会主義革命の重要な構成要素として位置づけ、社会主義的労農同盟を提起したのである²⁶⁾。

こうした分析を進めることにより、レーニンは、ロシアにおいて当面する革命が社会主義に至る革命とする立場を、帝国主義論で得た国際的見地のみならず、国内的見地からも、統一的に定式化した。レーニンは、臨時政府に対する幻想を打破することを主張し、当面する時機を「第二の革命」への移行時期としてとらえ、そのための「プロレタリアの組織」を強化することを強調

した²⁷⁾。また、「すべての地主所有地の没収と土地国有化」、「雇農—農民代表ソヴェトによる土地管理」、「単一の全国的銀行とそれに対する労働者ソヴェトの統制」、「社会的生産と生産物の分配に対する労働者代表ソヴェトの統制」等々、社会主義への一步、より厳密に言えば、社会主義への「過渡的方策」となる民主主義的方策をとることを主張したのである²⁸⁾。

農業綱領に限っていえば、「2つの道」理論の段階での土地国有化は、「労働者」ではなく、「経営主」への土地の移行にとどまっていた。そこには依然として、「資本の権力、貨幣の権力」が存在しており、ロシアで100万戸をくだらない富農は、「自由な」土地の上で、賃労働者や「出稼」(отхожий промыслы)に出ざるをえない何百万、何千万の貧農を搾取・抑圧しつづけることになる。レーニンは、この限界を乗り越え、資本主義的搾取そのものを打ち破ることが可能であることを示し、富農から農業賃金労働者や貧農を区別して独自に組織すること、及び、農業労働者による共同耕作の大農場模範経営を組織することを重視するに至ったのである²⁹⁾。

このような新たな革命戦略においては、「2つの道」理論で重視されていた資本主義的経営をめざす移民農業者は、もはやそれほど大きな意義をもたなくなる。むしろ重要なのは、共同体に抛りつつ、「土地の社会化」を要求している農民層、とりわけ出稼賃労働に出ざるを得ない貧農・農業労働者の動向であった。またより決定的には、農民層の要求実現に社会主義革命の一環としての性格を付与するよう指導する労働者階級の成長こそが重要になる。そこでレーニンは、再び、ロシアのプロレタリアの問題、とりわけ西欧のプロレタリアとの連帯の中で階級的成長を遂げる存在として、ストルィピン改革以後に増大した諸外国への国境を越えた出稼・移民労働者の問題に注目するに至った。いいかえれば、かかる外国人出稼・移民労働者問題への注目が、レーニンの認識を世界的視野に押し広げ、帝国主義論を構築する際の基盤の一環をなしたのであり、その意味で、この問題究明は、レーニンの革命戦略の転換を根底から支えたともいえよう。

《注》

- (1) 雀部幸隆 (1980) p 316~317, 和田春樹 (1964) p 40~42, 矢吹満男 (1976) p 12~13, 太田仁樹 (1989) p 126・172。
- (2) レーニン (1916-a) p 259。
- (3) レーニン (1916-a) p 294。
- (4) レーニン (1916-a) p 273。
- (5) レーニン (1916-a) p 306~308。渡辺寛 (1965) p 36, 太田仁樹 (1989) p 157・165~167・216。資本主義の進歩性を重視し、レーニン「帝国主義論」に批判的な立場として、ワレン (1980) p 50。その他、レーニン「帝国主義論」の方法上の批判としては、高須賀義博 (1988) p 56~61, 太田仁樹 (1989) p 230・232~233, 牧原憲夫 (1977) p 42, 降旗節雄 (1972) 第6章, 西口章雄 (1977) p 535~547, 渡辺寛 (1971), 入江節次郎 (1968) 等。植民地拡張と独占資本主義確立の時期的齟齬についてはフィルドハウス (1967) p 187, ストークス (1969) p 289, マクレラン (1979) p 123。「帝国主義論ノート」から「帝国主義論」への変遷については、レーニン批判も含めて馬場宏二 (1970) p 115~116。
- (6) レーニン (1915-d) p 392~393。太田仁樹 (1989) p 195・166。この点の現代的考察としてブリュワー (1980) p 263。
- (7) レーニン (1916-a) p 349。
- (8) ロシア資本主義の帝国主義への移行の時期や特質については、岡田進 (1968-a) p 289, 中山弘正 (1966

- ー a・b), 同 (1988), 日南田静真 (1966) p 186, 有馬達郎 (1989) p 110~111, 真木実彦 (1989)。雀部幸隆 (1980) p 257~258。
- (9) レーニン (1916-a) p 298~299, 同 (1916-b) p 89, 同 (1917-d) p 164。ボッフア (1976) p 19。
- (10) 太田仁樹 (1989) p 194。両帝国主義の関連については矢吹満男 (1976), 雀部幸隆 (1980) p 320~321, ファーヴル&ファーヴル (1970) p 64~65, 太田仁樹 (1989) p 207~208・212~213, 大崎平八郎 (1973)。ロシア帝国主義のイランにおける利権争奪については高田和夫 (1989-a)。ロシアの植民地政策とそれに対する現住諸民族の抵抗運動については, 木村英亮 (1989), 長尾久 (1973) p 488, 辻義昌 (1981) p 188。1910年代前半の軍勢力増強が首都への出稼労働者を激増させたことについては, 高田和夫 (1989-a) p 274。
- (11) ファーヴル&ファーヴル (1970) p 65, 太田仁樹 (1989) p 196~197。
- (12) 雀部幸隆 (1980) p 320。
- (13) レーニン (1915-e) p 433。先進諸国の社会主義革命とロシア等の民主主義革命の関連については, レーニン (1916-f) p 58~59。ファーヴル&ファーヴル (1970) p 65~66, 雀部幸隆 (1980) p 320。帝国主義論の成立が「2段階革命論」を克服し, 直接にロシア社会主義革命の提起させたと見る立場に, 渡辺寛 (1963) p 174~177・194~195, 太田仁樹 (1989) p 195~197・212。
- (14) レーニン (1915-f) p 417
- (15) レーニン (1917-d) p 166~167。
- (16) レーニン (1917-g) p 4。西島有厚 (1968) p 117, 雀部幸隆 (1980) p 321。
- (17) 西島有厚 (1968) p 117, 渡辺寛 (1963) p 171~172, 太田仁樹 (1989) p 202~204, 和田春樹 (1979) p 444~445, ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 50, 倉持俊一 (1968) p 11~12。
- (18) レーニン (1917-h) p 29。これを「2段階革命論」の放棄とみるか, 「2段階革命論」の実践とみるかは, 議論が別れる。前者の立場に立てば, 「2月革命=ブルジョア革命終了」説は, 古参ボリシェビキに対する説明の単なる便法になる。この立場の論者に, 渡辺寛 (1963) p 177~178・185, 同 (1965) p 41, 太田仁樹 (1989) p 208。
- (19) レーニン (1917-i) p 324。
- (20) レーニン (1917-j) p 327。
- (21) レーニン (1917-k) p 407。
- (22) 吉岡昭彦 (1983) p 12, 森岡孝二 (1979), 渡辺寛 (1971-3) p 35~36。古参ボリシェビキの認識変化については, 菊地昌典 (1961)。
- (23) レーニン (1917-b) p 508~509・519, 同 (1917-l) p 301, 同 (1917-m) p 186~187, 同 (1917-n) p 212~213, 同 (1917-o) p 389, 同 (1917-p) p 329, 同 (1917-q) p 351等。1915年初までに, ロシアの全私有地の60.2%が不動産抵当信用機関の抵当に入っていたという。ドゥプロフスキー (1963) p 291~299, 渡辺寛 (1963) p 180~183, 同 (1965) p 39, 太田仁樹 (1989) p 200~201, 雀部幸隆 (1980) p 328。
- (24) レーニン (1903-a) p 387, 同 (1908) p 55, 同 (1914-a) p 74。
- (25) レーニン (1907-d) p 349~350。
- (26) レーニン (1917-l) p 300~301・305~307。和田春樹 (1979) p 444~445, ワース (1984) p 10~11, 保田孝一 (1971) 第3章, 渡辺寛 (1963) p 186~195, 雀部幸隆 (1980) p 324~329, メドヴェージェフ (1979) p 130。
- (27) レーニン (1917-r) p 324, 同 (1917-j) p 327, 同 (1917-g) p 3。渡辺寛 (1965) p 30。

- ⑳ レーニン（1917－g）p 3，同（1907－d）p 442。長尾久（1968）p 518，同（1965），同（1973）p 112～127，田中真晴（1967）p 65，中野徹三・高岡健次郎（1970）p 176～181，雀部幸隆（1980）p 322。和田春樹（1964），メドヴェージェフ（1979）p 128，富岡裕（1963－a）p 9～10。
- ㉑ レーニン（1917－b）p 524～530。1917年春以後，農村からの出稼労働者の経済闘争が進展したことにについては，辻義昌（1981）p 369～375。

第3節 帝国主義論と「現代の民族移動」

レーニンは，かかる諸外国への出稼・「移住労働者」（рабочий – переселенец）を，世界資本主義の不均等発展と帝国主義の確立が必然的に作り出した「現代の民族移動（переселения）」と位置づけた¹⁾。すなわち，資本主義的工業が急速に発展しつつある帝国主義諸国は，世界市場から他国を駆逐しながら，賃金を平均以上にひきあげ，諸外国から賃金労働者を引き寄せる²⁾。たとえば，農奴制的な低賃金を余儀なくされているロシアに比べ，ドイツの賃金は2倍弱，イギリスは3倍，アメリカに至っては5倍である。そこで，ロシアから大量の「出稼」（отхожий рабочий）・移民労働者が，より賃金の高いドイツやアメリカに流出するのは全く当然である³⁾。帝国主義国からの「移出国」（эмиграция）の減少と帝国主義国への「移入民」（иммиграция）の増大，すなわち，帝国主義諸国が「後進国から移入（ввозить）される未熟練の外国人労働者（инозёмный рабочий）の労働」を使用することは，まさに「帝国主義の特質の一つ」「帝国主義に固有の寄生性」の一環にはかならないのである⁴⁾。

とりわけ，「労働者を移入（ввозить）している国々の先頭に立って」いるのはアメリカであった。アメリカへの移民流入は，1820年代末に本格化し，1840年代，1880年代，そしてアメリカで帝国主義が確立した1900年代に特に急増した。1900年代初の10年間の移民流入総数はそれ以前の20年分にも相当し⁵⁾，「1905～1909年の5年間，年平均100万人以上が移住（переселения）した」。しかも「1880年代までは，イギリス・ドイツ等，古い文化国からの旧移民が優勢」だったが，「1880年から，東南ヨーロッパ・オーストリア・イタリア・ロシアからの新移民が驚くほど急速に」増加した⁶⁾。そして旧移民の場合，ヨーロッパにおける資本主義的蓄積に伴う「極度の貧困」⁷⁾とアメリカにおける広大な西部未開拓地の存在が，彼らに「祖国を棄てさせ」た。すなわち彼らは，アメリカで，賃労働者階級を形成すると同時に，独立自営農民・手工業者に転化する可能性をも残し，まさに資本主義発展の「アメリカ的な道」の担い手として移住したのである⁸⁾。しかし，新移民になると，何よりも資本主義の不均等発展に基づく，先進資本主義国による後進資本主義国からの賃労働者，特に不熟練労働者の「引き寄せ」でしかなく，もはや土地を手に入れて耕作するための移民は存在しえなかった⁹⁾。そこで彼ら新移民は，アメリカの中でも，「半封建的色彩の強い南部を避け，資本主義が発達した都市に集中」して就労した¹⁰⁾。その意味で新移民は，まさにアメリカの帝国主義的発展を，その底辺で支える存在として移入させられてきたのである¹¹⁾。

アメリカへの旧移民が減少したいまひとつの理由は，従来，旧移民を供給してきた北西ヨーロッパ諸国が，移民の流入国に転化したことである¹²⁾。たとえば，ドイツもまた，「多かれ少なかれアメリカと同じ水準ですすんでおり，労働者移出国から外国人労働者（чужой рабочий）の移入国にかわりつつ」あった。「ドイツ国内の外国人労働者（иностранный рабочий）の数は，1911～1912年には72万9000人」に達していた¹³⁾。またフランスでも，スペイン人労働者は30万人，イタリア人は40万人に及び，とりわけフランスの鉱山労働者は，大部分が「外国人」（пересе

ления) —— ポーランド人・イタリア人・スペイン人 —— によって占められていた¹⁴⁾。

このような「現代の民族移動」の問題に対し、レーニンは、まず、ロシアをはじめとする後進資本主義国出身の外国人労働者・「移住労働者」(иностранец) が、出稼・移民先で、差別的な低賃金・無権利状態を余儀なくされることを繰り返し指摘した¹⁵⁾。たとえばアメリカでは、アメリカ人の労働者に監督など相対的に高賃金の仕事が多いのに対し、ロシアをはじめとする東南ヨーロッパからの「移入民」(иммиграция) は、多くの場合、最も低賃金の職種・産業部門に従事していた¹⁶⁾。ドイツでも、ロシア人労働者に与えられているのは、「つまらない稼ぎ仕事」であり、ロシア人はいたるところで「損をしている」¹⁷⁾。そしてこうした仕事や賃金における民族差別は、ドイツに「移住」(приезжий) したロシア人労働者のみならず、スイスにおけるイタリア人労働者、フランスにおけるスペイン人・イタリア人労働者等々、「外国人労働者」(иностраннй рабочий) に普遍的に見られる現象であった¹⁸⁾。こうした中でロシアは、自国の優秀な労働者の一部を国外に引き渡すことによってますます遅れ、アメリカは、最も精力で労働能力ある「移民労働者」(рабочий иммигрантов) を世界中から受け取ることでますます急速に発展していくのである¹⁹⁾。

しかも同時にレーニンは、このような外国人出稼・移民労働者の差別的な搾取が、帝国主義諸国の資本により、しばしば労働者階級の分裂の手段として活用されているという現実にも遭遇せざるをえなかった。レーニンは、「帝国主義国にとりわけ特徴的なこと」として、後進国からきた「外国人労働者」(иностраннй рабочий) ・「移入民」(иммиграция) を低賃金かつ無権利状態において搾取しつつ、より高い賃金で自国の一部の労働者を買収し、労働者階級を分裂させ、労働運動に日和見主義を醸成することをあげている²⁰⁾。いわば「富裕な帝国主義諸国の寄生生活は、ある程度まで、まさにこの(外国人労働者の) 搾取に基礎」をおいている²¹⁾。そこで、「帝国主義的イデオロギーは、労働者階級のなかへもしみこみつつあり²²⁾、帝国主義諸国における「深刻な革命運動の発生をある程度まで困難」にしているのである²³⁾。

現に国際労働運動、さらには国際社会主義運動の内部でも、こうした状況は顕在化していた。一方で、年間50万~100万人、総計550万~600万人もの大量の「移民」(эмигрант) を送り出し、しかもそうした移民労働者が極端に窮乏しているために「貧民帝国主義」というあだ名をつけられているイタリアにおいて、アルトゥーロ・ラブリオーラ等が、自国の帝国主義戦争を民族解放闘争とみなす主張を展開していた²⁴⁾。他方、「移民」(иммиграция) の受け入れ国である先進諸国の労働者の間でも、労働者の競争激化を理由に、日本や中国など後進諸国からの労働者の移入を禁止しようとする企てが試みられ、これが第2インタナショナルのシュトゥガルト大会における主要な論点のひとつとなっていた²⁵⁾。とりわけアメリカでは、アメリカ社会党指導部・労働運動が、シュトゥガルト大会以後もその決定に背き、日本や中国の労働者の「移民」(иммиграция) の受け入れ制限を支持していたのである²⁶⁾。レーニンは、かかる事態のうちに、「祖国防衛」の名の下、自国の帝国主義戦争を容認する日和見主義的潮流の基盤を見いだした。

そして、こうした事態の理論的究明に向かったレーニンは、「労働者を分裂させ、彼らのあいだで日和見主義を生み出すという帝国主義の傾向」が、イギリスにおいては、実は遥か以前から現れていたことに注目した。イギリスでは、「帝国主義の二大特徴 —— 膨大な植民地領土と世界市場における独占的地位 ——」が19世紀の中頃からすでに存在し、イギリス人労働者階級のブルジョア化やアイルランド人労働者との間の民族的分裂が顕在化していたのである²⁷⁾。そこで彼は、この段階のイギリス労働者階級、とりわけアイルランド支配に対するイギリス労働者階級

の態度に対して、マルクスとエンゲルスがいかなる見解をとっていたかを検討した²⁸⁾。この時期、レーニンが集中的に考察したのは、1867年11月以後のマルクスのアイルランド問題に関する諸研究である²⁹⁾。レーニンの検討によれば、1867年11月以前には、マルクスは、非抑圧民族の民族運動ではなく、抑圧民族の間の労働運動こそがアイルランドを解放するという見通しをもっていた。しかしその後、マルクスは「より深い研究」により自らの見解を訂正し、逆にアイルランドの独立こそがイギリスの労働者階級を解放するのであり、アイルランドがイギリスの抑圧から解放されない限り、イギリス労働者階級の解放もありえないとの結論に達した³⁰⁾。こうしてマルクスは、「イギリス労働者が他民族を奴隷状態にひきとめておく限り（あるいは、たんに許しておくだけでも）、彼らは自由を獲得できない」³¹⁾と考え、イギリスの労働者階級が「他民族の自由を抑圧する民族は自由でありえない」³²⁾ことを知り、アイルランド独立のために闘うことを提起した。レーニンは、かかる「アイルランド問題におけるマルクスとエンゲルスの政策」が、「抑圧民族のプロレタリアートが民族運動にどんな政策をとるべきかについて、いまにいたるまで巨大な実践的意義をたもつ偉大な模範をしめして」³³⁾いると指摘している。

この検討をふまえ、レーニンは、民族自決権、及び、あらゆる民族と言語の平等を主張した。帝国主義が「ひとにぎりの『大国』による世界中の諸民族にたいする抑圧がますます強められていく時代」である以上、帝国主義に対抗する国際社会主義革命の闘争は、「諸民族の自決権をみとめることなしには不可能」である³⁴⁾。ここでいう「民族自決権」とは、いうまでもなく、政治的自決権、すなわち独立国家を創設する権利である³⁵⁾。そしてこうした民族自決権を承認し、主張することは、それ自体、各民族の同権を主張することであり、「様々な民族の労働者の中に完全な階級的連帯をそだてあげること」でもある³⁶⁾。レーニンは、民族自決権を政治的民主主義の課題としつつも、しかしそれをもはや反封建制の課題ではなく、明らかに、反帝国主義的課題として、帝国主義を打倒する労働者階級の民主的な国際連帯に関わる課題として位置づけ、提起しているのである。

そして以上の見地に立つからこそ、レーニンは、前述の「外国人労働者の差別的搾取」やそれに基づく「労働者階級内部の民族的対立」といった否定的現象にもかかわらず、この「現代の民族移動（переселения）」の過程に進歩的意義を見出だした³⁷⁾。

すなわちまず、先進資本主義諸国での出稼・「移民」（иммиграция）労働は、いかに外国人ゆえの差別的搾取に特色づけられていたとしても、それでもなお前述のごとく、後進諸国内での労働に比べれば相対的に高賃金であり、出稼・移民労働者自身の「経済的利益」に直結している。

またそれ以上に重要なことは、前章＝第1期のロシア国内出稼農民において指摘したと同様、出稼・移民労働に刻印されている「道徳的および教育的意義」である。特にロシアのような生活の「全機構に農奴制の残存物を多く残している」遅れた国々の労働者にとって、先進資本主義国での就労は、いわば「強制的な文明教育」である³⁸⁾。先進資本主義国で働くロシア人「出稼労働者」（отхожий рабочий）は、出稼先で、一層高度な文化、格段に優れた耕作方法、そして何より労働者出版物や労働者組織の自由など政治的市民的自由を学び、それをロシアに持ち帰る³⁹⁾。特に資本主義が典型的に発展しつつあるアメリカで働くロシア人労働者は、最もよく祖国の「後進性と野蛮性」から抜け出し、「祖国の『愛すべき』特徴に反撃を加える」⁴⁰⁾。いわば、この時期の外国人出稼・移民労働者に関するレーニンの把握には、第1期で示した資本主義の発展に伴う「労働の社会化」の視角が、国境を越え、しかも反農奴制ではなく、帝国主義世界体制に位置づけられたロシア資本主義に対抗する射程の中で、貫かれているといえよう。

そしてこの時期のレーニンが重視した、いまひとつの「道徳的・教育的意義」は、国境を越えた出稼・「移民」(иммиграция)労働が、労働者階級内部の民族的な障壁と偏見を打ち壊して国際連帯を作り出し、全世界の労働者階級を「1つの全世界的解放勢力」としてひとくくりにし、日和見主義に陥りやすい先進資本主義国の労働者階級を含め、世界史的な階級闘争に引き入れざるをえないことである⁴¹⁾。レーニンによれば、発展しつつある資本主義は、民族問題に対して2つの傾向を世界的法則としてもつ。すなわち第1は、民族運動の目覚め・民族抑圧に対する闘い、そして民族国家の創出である。これは資本主義の初期に優勢な傾向である。第2は、諸民族間の関係の頻繁化に伴う民族的隔壁の破壊、経済生活一般・政治経済等々の国際的統一の形成である。これは成熟した資本主義の特徴である⁴²⁾。諸外国への出稼・移民労働は、まさにこの第2の傾向を体現するものにほかならない。現にロシアでは、1905年革命の後、アメリカへの「移民」(иммиграция)が急速に増加しているが、このことは、「ロシアであらゆるストライキを経験してきた労働者が、いっそう勇敢な、攻撃的な、大衆的なストライキの精神をアメリカに持ち込んだ」でいることを意味しているのである⁴³⁾。

このような認識にたち、レーニンは、前述した国際労働運動・社会主義運動内部の様々な社会排外主義的傾向を批判し、外国人労働者の進歩的意義や彼らに対する啓蒙・組織の重要性を、総じて労働者階級の国際的連帯を一層強めることの重要性を強調した⁴⁴⁾。すなわち労働者階級にとって、問題は、「自国」のブルジョアジーの大国的・民族的な特権や野望を擁護するか、それとも、国際的に連帯したプロレタリアートの革命的行動によってあらゆる政府、何よりもまず、自国の政府を打倒するために、大国的な特権をめざすあらゆる闘争を利用するか⁴⁵⁾のいずれかであり、そこに中間の道はありえない⁴⁵⁾。レーニンは、「移民」(иммиграция)労働者の制限を主張する先進諸国の労働運動に対し、「自分の特権的な地位からある程度の利益を引き出しているの、国際的階級連帯の要求を忘れがちな」、「一部の『文明』諸国のプロレタリアの間の貴族主義の精神」⁴⁶⁾、「狭いギルド的な閉鎖性と組合主義的排他性の精神」と批判し、「まだ労働運動に引き入れられていないプロレタリア層(移民労働者)を啓蒙し組織する活動」⁴⁷⁾を社会主義的任務として強調したのである⁴⁸⁾。

こうしてレーニンは、外国人と本国の労働者が連帯して闘うことを主張した。彼は、外国人労働者が特に大きな位置を占めるスイスについて考察し⁴⁹⁾、「外国人労働者」(иностраннй рабочий)とスイス人労働者が、双方の社会愛国主義を克服し、労働運動の実践全体にわたって実際に単一の国際主義を貫き、同一組合・同一組織を結成して、完全な市民的・政治的同権を目指して闘うことを主張した⁵⁰⁾。また「外国人労働者」(иностраннй рабочий)の市民的・政治的同権というレーニンの立場は、単に労働問題の内部にとどまらず、国籍や軍隊の問題にも貫かれている。彼は、スイスにおいて「外国人労働者」(иностраннй рабочий)の政治上の無権利と疎外が、政治的反動を強め、プロレタリアートの国際連帯を弱めつつあるという認識に立ち、外国人労働者に無料で強制的に国籍を与えて政治的権利を持たせること⁵¹⁾、軍隊の中でも「外国人労働者」(заграничный рабочий)と土着労働者に平等の地位を保証すること⁵²⁾等々を主張している。後に10月革命後、ソヴェト憲法を起草する際、レーニンが、「外国人労働者」(иностранец трудящийся)にロシア市民との完全な市民的・政治的同権を認めた⁵³⁾ことの基底には、かかる外国人労働者問題に関する認識が存したことは明らかであろう⁵⁴⁾。

またレーニンは、外国人出稼・移民に伴う民族文化の変容の問題にも踏み込んだ。彼は、前述のごとく、あらゆる民族と言語の平等、及び、民族自決権を確認した上で、資本主義が必然的に

作り出す民族的隔壁の破壊、民族的差異の除去、諸民族の「同化」を、「資本主義を社会主義へ転化させる最大の原動力の一つ」として重視した⁵⁵⁾。とりわけ彼は、アメリカにおけるラテン系およびスラブ系の「移民」(эмиграция)の中で、民族的相違が急速にならされ、単一の「アメリカ」民族が形成されつつある⁵⁶⁾とし、そこに最大の歴史的進歩を、特にロシアのような後進諸国の假地にある民族的頑迷の破壊を認めた⁵⁷⁾。

もとよりこのことは、レーニンが、各民族文化の存在そのものを否定したことを意味しない。彼は、各々の「民族文化」の中に、全体として支配的なブルジョア的要素と、未発達な民主主義的・社会主義的要素とがあるとし、各々の民族文化の中の民主主義的・社会主義的要素を、もっぱらそれに対応する各々のブルジョア民族主義文化に対抗して抽出することを強調したのである⁵⁸⁾。そこでのスローガンは、もはや「民族文化」ではなく、「民主主義と世界労働運動との国際的文化」であった⁵⁹⁾。レーニンは、「あらゆる労働者組織内のあらゆる民族の労働者を無条件に統一し、完全に融合させること」だけが、すでに国際化している資本に対抗して、労働者の利益と人類社会発展の利益を守りぬくことができると述べている⁶⁰⁾。いわばレーニンは、外国人労働者と彼らを受け入れる先進資本主義国の労働者双方の文化変容を、自国のブルジョア民族主義・民族的偏見を克服し、反帝国主義的立場での労働者階級の国際連帯を強化する過程として把握していたといえよう。

〈注〉

- (1) レーニン (1913-i) p 485。ここで「民族」とは нацияではなく、народである。この点については游仲勲 (1973) p 80。
- (2) レーニン (1913-i) p 485。
- (3) レーニン (1913-e) p 355。
- (4) レーニン (1916-a) p 318・326~327, 同 (1915~16-j) p 377, 同 (1917-d) p 164。レーニン (1913-h) p 470は、イギリス労働者が、自由な土地・資本主義的農業経営の豊かな可能性を求め、アメリカやオーストラリアへの移民に魅惑されていることを指摘している。
- (5) 森廣正 (1986) p 46~48, 楠井敏朗 (1972) p 148。
- (6) レーニン (1913-i) p 485~486。森廣正 (1986) p 47~48・53, ヒューバーマン (1947) 上 p 10, グールヴィチ (1912) p 177, 藤田弘夫 (1990) p 254, 駒井洋 (1989) P 157~162。この点への批判も含め、森田桐郎 (1987) p 30~37, 尾上修悟 (1987) p 57~58・82。
- (7) レーニン (1913-i) p 485。
- (8) 森廣正 (1986) p 50~51, マルクス (1867-b) p 1316・1323, 宮野啓二 (1972) p 244, 石崎昭彦 (1962) p 29~30, ヒューバーマン (1947) 上 p 7~9・59, 下 p 36。
- (9) 森廣正 (1986) p 55・57, ヒューバーマン (1947) 上 p 10・下 p 58, グールヴィチ (1912) p 10, 藤田弘夫 (1990) p 261, 石崎昭彦 (1962) p 222。
- (10) レーニン (1912~15) p 377, 同 (1915-a) p 17。
- (11) 森廣正 (1986) p 56, シナニイ (1967) p 170~171。
- (12) 森廣正 (1986) p 53~54, グールヴィチ (1912) p 18。
- (13) レーニン (1913-i) p 487。同 (1916-a) p 326~327によれば、ドイツ国内の外国人数は1907年で134万2294人であった。

- (14) レーニン (1915-16-e) p 208, 同 (1915-b) p 371, 同 (1915-16-g) p 233, 同 (1916-a) p 327. 参考文献は、ヘンガー (1913)。渡辺寛 (1971-3) p 31は、同じくヘンガー (1913) により、フランス鉱山業では、労働者のみならず資本家も「外国人」であったことを指摘し、レーニンを批判している。ただしここでは、資本家がベルギー・ドイツ・イギリス人であったのに対し、労働者はポーランド・イタリア・スペイン人で、従って出身国の世界資本主義に占める位置が明らかに異なっていることに着目すべきであろう。
- (15) レーニン (1913-i) p 485. 辻義昌 (1981) p 188によれば、第1次大戦下、ロシアでも、ペルシア人・中国人・朝鮮人労働者が13万6000人以上調達された。彼らは、一般ロシア人との接触禁止や契約変更禁止など、奴隷的な条件で採用された。また革命前後のペトログラードにおける中国人労働者の状態については、長谷川毅 (1989)。
- (16) レーニン (1916-a) p 327, 同 (1913-j) p 15, 同 (1916-f) p 54. 参考文献として、グールヴィチ (1912) p 19。
- (17) レーニン (1913-i) p 488. 渡辺寛 (1971-3) p 31は、ポーランド人を初めとする外国人労働者のドイツへの流入が、ドイツ人の非生産者化ではなく、工業労働者化と相即していたことを指摘し、レーニンの帝国主義論を批判する。しかし、レーニンは、渡辺氏の指摘する挙例をもって、「本国人労働者の非生産者化」ではなく、労働者階級内部での分裂—生産的労働者か否かにさえもとどまらない—について述べているのである。また辻義昌 (1981) p 46によれば、1900年代のロシアでは職長層の45%が外国人出稼労働者であった。
- (18) レーニン (1917-d) p 164, 同 (1916-e) p 174, 同 (1915-16-b) p 146では、ブラジル・カナダ等への移民をめぐる諸矛盾に関するノートがある。またレーニン (1915-b) p 371には、アメリカやヨーロッパの都市におけるイタリア人移民の貧困な生活に関する記述がある。東欧系ユダヤ人に対する排斥については、佐藤唯行 (1989)。
- (19) レーニン (1913-i) p 487. 1917年10月革命以後ではレーニン (1920-a) p 218。
- (20) レーニン (1913-i) p 488, 同 (1916-a) p 327, 同 (1917-d) p 164. アメリカにおける旧移民の労働貴族化についてはグールヴィチ (1912) p 12. 労働貴族の問題については、レーニンとの関連では、松村高夫 (1987) p 44, 安川悦子 (1982) p 318-321, 中山章 (1988) p 1-8, 戸木田嘉久 (1974), 富沢賢治 (1971), 同 (1972)。
- (21) レーニン (1917-d) p 164. 同 (1916-a) p 319-320にも、「海外の諸国や植民地の労働の搾取によって生活している国全体に、寄生性という刻印をおす」との記述がある。この論点については、エマニュエル&ベッテルハイム (1969)。
- (22) レーニン (1916-a) p 330。
- (23) レーニン (1917-d) p 164-165。
- (24) レーニン (1915-b) p 369-371. 主要な受け入れ国は、アメリカ・ブラジル・アルゼンチン・フランス等々である。レーニン (1915-16-k) p 487-488。
- (25) レーニン (1907-b) p 71, 同 (1907-c) p 80. アメリカの移民流入制限についてはレーニン (1915-16-k) p 489, ニュージーランドのそれについては同 (1915-16-l) p 500, イギリス労働者の移民反対闘争に関しては同 (1915-16-o) p 537。
- (26) レーニン (1915-c) p 440, 同 (1915-16-k) p 488-489, 同 (1915-16-p) p 591, 同 (1915-16-q) p 595. 中国人・日本人労働者の排斥運動については、浅野慎一 (1991) で検討したパークの諸論稿, クォン (1987) 第1章, やや前の時期になるが油井大三郎 (1989) 等。カナダにおける東洋人排斥

については、新保満（1989）第5章。

- (27) レーニン（1915-16-r）p 327。
- (28) マルクス・エンゲルスのアイルランド問題に関するレーニンの言及は、レーニン（1914-b）p 152-153, 同（1914-c）p 465-474, 同（1914-d）p 97, 同（1915-g）p 299, 同（1915-h）p 423・427, 同（1914-e）p 81, 同（1914-f）p 65, 同（1914-g）p 52, 同（1915-i）p 103, 同（1915-j）p 713, 同（1915-k）p 92, 同（1915-16-r）p 624-627, 同（1916-f）p 191-192, 同（1916-a）p 327-328, 同（1916-g）p 169等。この問題に関するレーニンの検討については、デーヴィス（1967）p 315-316。
- (29) この時期区分の意義については浅野慎一（1986）参照。レーニンが引用しているマルクスの文献は以下のとおり。マルクス（1867-c）, 同（1867-d）, 同（1869-a）, 同（1869-b）, 同（1870）, エンゲルス（1882）, 同（1892）等。
- (30) レーニン（1914-b）p 152, 同（1914-c）p 468-472, 同（1915-h）p 423, 同（1915-i）p 103・105。
- (31) レーニン（1914-b）p 153。
- (32) レーニン（1915-j）p 713。
- (33) レーニン（1914-c）p 474。
- (34) レーニン（1915-l）p 324。レーニンの民族自決権問題については、革命後の理論展開も含め、レヴィ（1976）p 47-49, 丸山敬一（1980）, 同（1985）, マクレラン（1979）p 131-134, 田中克彦（1975）p 699, デーヴィス（1967）第8章, ダンコース（1979）第3章, 鶴崎雪嶺（1972）, 松元幸子（1969）等。
- (35) レーニン（1915-l）p 324, 同（1914-h）p 231, 同（1916-h）p 405, 同（1913-h）p 456, 同（1913-l）p 248等。
- (36) レーニン（1914-h）p 231, 同（1913-j）p 6。太田仁樹（1989）p 159-163, 169-171, 丸山敬一（1985）p 69-70。
- (37) レーニン（1913-i）p 485。
- (38) レーニン（1913-i）p 486。
- (39) レーニン（1913-e）p 355。
- (40) レーニン（1913-i）p 488。
- (41) レーニン（1913-i）p 485・488。この視点は、原初的にはレーニン（1897-a）p 204。
- (42) レーニン（1913-j）p 12。2つの段階における民族運動の役割の変化については、レーニン（1914-c）p 427-428。もとより、この2つの傾向が世界資本主義の不均等発展に相即したものであり、単なる時期の差異に基づくものでないことは、レーニンの論述からも明らかである。
- (43) レーニン（1913-i）p 487。
- (44) レーニン（1917-d）p 165。
- (45) レーニン（1915-b）p 373。
- (46) レーニン（1907-b）p 72。
- (47) レーニン（1907-c）p 80。
- (48) レーニン（1915-c）p 440。
- (49) レーニン（1915-16-a）p 116。スイス工業における全労働者の24.4%は外国人であった。また梶田孝道（1988）p 139によれば、1914年、スイス全人口の15.4%が外国人であった。
- (50) レーニン（1916-d）p 157。

- 51) レーニン (1916-d) p 152~153。
- 52) レーニン (1916-b) p 90, 同 (1916-c) p 108。
- 53) レーニン (1918-b) p 106。
- 54) ボッフア (1976) p 136によれば, 革命戦争, 及び, 革命後の内戦において, ロシア国内の外国人労働者が「あらゆる政治的権利」を得て闘い, また赤軍にも「外国人グループ連盟」があり, 占領軍兵士の中で宣伝活動を展開した。
- 55) レーニン (1913-j) p 13。
- 56) レーニン (1915~16-m) p 520, 同 (1917-a) p 306。
- 57) レーニン (1913-j) p 15。
- 58) レーニン (1913-j) p 9, 同 (1913-k) p 65。
- 59) レーニン (1913-j) p 6・8。
- 60) レーニン (1913-j) p 7, 同 (1913-k) p 67。なお, 浅野慎一 (1986) で示したごとく, 晩年のエンゲルスは, イギリス国内のアイルランド人組織がアイルランド内の組織と分離することについても, また, イギリス人組織と統合することについても反対し, アイルランド人が民族的な組織を維持することを強調した。ただし, この場合, アイルランドがイギリスの植民地であったことを看過しえない。これに対し, レーニンが主に問題としたのは, ロシア人であれ, イタリア人であれ, 後進的とはいえ帝国主義諸国からの出稼・移民労働者であり, 植民地からのそれではない。

第3章 10月革命以後の国内人口移動と外国人労働者の流入

では最後に, 1917年の10月革命以後, 試行錯誤に満ちた社会主義建設の下での国内人口移動と外国人労働者の流入に関するレーニンの所論を検討していこう。

第1節 戦時共産主義政策と都市・農村間人口移動

1917年10月25日, 武装蜂起の当日, レーニンは, 「地主の土地所有の廃止」を宣言し¹⁾, 翌日, 地主的土地所有の即時無償廃止・土地私有権の廃止, 土地の全人民的フォンドへの移行, すべての市民への自由な土地用益権の確立などを定めた「土地に対する報告」を行った²⁾。この中で彼は, 農民の要望書に基づき, 各地方で土地フォンドが住民の要求に照らして不足した場合, 国家の費用をもって, 過剰人口を「移住」(переселение) させることを指示した³⁾。

この「土地に対する報告」は, 「2つの道」理論の段階で示したレーニンの土地国有化論とは異なり, 形式的には, エスエルの「土地社会化」綱領の実現であった⁴⁾。レーニンがこの綱領を採択した意義は, 大きくいって2つある。

第1は, 農民の革命的エネルギーを最大限に引き出すことである。すでに1917年夏以来, 農民の地主襲撃は激化しており, ある意味で, 「土地に対する報告」は, この農民運動を事後承認するものであった⁵⁾。この限りでは, 「土地に対する報告」は, 臨時政府とブルジョアの打倒のための共同と引き換えに, 農民のプチブル的要求に応えた戦術的後退・妥協という側面をもっている⁶⁾。レーニンは, 「民主主義的政府として, たとえ異議があるとしても, 下層人民の決定を回避することはできない」⁷⁾と述べ, また後に, 「少なくとも1918年の夏まで, 我々の権力は, 我々が農民全体の支持をえていたが故に, 持ちこたえることができた」と振り返っている⁸⁾。この側

面からみれば、「土地に対する報告」における「移住」(переселение)の指示も、「下から」の資本主義化を望む農民層の要求に応えるための政策といえよう。

しかし第2に、レーニンは、単なる戦術的妥協として農民層のプチブル的要求を受け入れたわけではない。むしろ問題は、こうした「妥協」がなぜ可能だったかという点にこそある。レーニンは、農民が、実生活の経験を通して、自分自身の利益のために、小規模な個人経営ではなく、大規模な社会的経営の優位性を必ず知るに至るであろうという見通しを有していた。すなわち、この土地政策により、農民が「自分ですべての問題を解決」し、「農民自身がその生活をうちたてる」ことに実際の経験をつみ、自尊心と自信をつけ（農民の道徳的・心理的革命）⁹⁾、そして実生活という「最良の教師」により、「農民自身が、どこに真理があるかを理解」することを想定したのである¹⁰⁾。

そしてこうした見通しの基礎には、いうまでもなく、すでにみた「帝国主義論」以後のレーニンの革命戦略が存している。すなわち、プロレタリアが、「社会主義の勝利の諸条件」である工業部門や銀行を掌握している限り、農民の要求する「均等な土地用益や、小経営主の間の土地再分割」は、社会主義の建設を阻害しない限りで容認しうるし、むしろそれは、「完全な社会主義への過渡的な方策のひとつ」にもなりうる¹¹⁾。いわば、社会主義の出発点における農民層の広範な存続を社会主義権力のひとつの基礎として認め、共同体に依拠した公平な土地分配＝「土地の社会化」という農民の要求を、労農同盟に拠りつつ、「徐々に、しかし着実に」、「土地の共同耕作と大規模な社会主義的農業に」農民を引き入れていく、という戦略である¹²⁾。この点からみれば、布告における「移住」(переселение)は、それが実際に共同体での決定にしたがってなされる以上、社会主義的農業経営への移行の一環としての共同体の再生産・強化を伴うものと位置づけられるのである。

しかしながら、このような試みは、都市部における工業生産の潰滅的停滞と飢餓状態の渦中で進められざるをえなかった。10月革命以前、レーニンは、西欧社会主義革命との連動、及び、そこからの援助を想定してロシアの社会主義化を構想していたが、現実には、西欧を初めとする帝国主義諸国の軍事干渉と内戦の最只中に置かれたのである。4年間にわたる戦争と革命により、国民経済は解体状況にあった。工場管理の経験や熟練が不足する中で工業生産を組織することは、資本家から工場を接収することよりも遥かに困難な課題であった。とりわけ1918年夏には、ソヴェト共和国は、干涉軍・白衛軍に領土の4分の3を奪われ、食糧・原料・燃料の主要供給地域から隔離され、まさに存亡の危機に直面していたのである¹³⁾。

このような事態は、ロシア国内における出稼・移民の移動構造を一変させていた。

すなわちまず、革命前に比べ、農民層の出稼賃労働が急速に減少した。1923年に仕事を求めて自分の郷の外に出た農民は160万人で、戦前の6分の1にまで減少していた。一方で地主の大経営がなくなったため農業出稼が減少し、他方で都市の工場も破壊されたため非農業出稼も停滞したのである。もとより1925年ごろには、経済復興とともに農民の都市部への流出は再び増加し、1929年には300～400万人が流出したと推定されている。しかしそれでもまだ戦前の季節出稼1000万人に比べると、明らかに低水準にとどまっていた¹⁴⁾。

逆に、都市部から農村部に仕事と食糧を求めて移動する者は、革命後、激増した。多くの労働者が、都市の工場を見限り、地主から没収された土地の分け前を求めて、あるいは農民の農作業を手伝うことによって食糧を得られることを期待して、故郷の農村に帰って行ったのである¹⁵⁾。1918年夏までに、ペトログラードとモスクワから数十万の労働者が農村に戻り、革命後3年間に

モスクワの人口の44.5%, またペトログラードの57.5%が減少した。1918年前半には, ロシア国内の労働者数は302万4300人から248万6000人に減少したのである¹⁶⁾。

このような労働者の都市から農村への移住は, 共同体を強化すると同時に, それを民主化する役割をも果たした。すなわちまず, 農村に移住してきた労働者は, 当然にも土地への平等な権利を主張した。しかし, 農村に余剰地は少なく, しかも疲弊した経済力の下, 新たな土地の開拓は困難であった。そこで残された道は土地の新たな割替以外にはなく, 共同体による割替が活発化したのである。しかしながら, これは革命前の共同体の単なる復活・強化ではない¹⁷⁾。なぜなら, 都市部から帰村した特に若年層の労働者は, 復員兵士の帰還とともに, 農村の青年層の自立志向に刺激を与え, 1861年以後徐々に進行してきた「半家父長的大家族の崩壊」を促進したからである。都市や兵營で革命を経験した青年層は, もはやかつてのように家父長の権力に服した生活を続けようとはしなかった。そこで都市労働者や兵士を先頭とする青年層は, 独立の世帯を構えることを要求し, この結果, 共同体が新たな割替を行うことになったのである。したがって革命後の共同体の割替の増加は, 革命前の割替の単純な復活ではなく, まさに10月革命に伴う民主化過程の一環でもあったといえよう¹⁸⁾。

しかし, ここでむしろ注意すべきことは, とりわけ1918年春以後, 後に「戦時共産主義」とよばれる諸政策の一環として, こうした都市労働者の農村への移動・移住が, レーニンとソヴェト政権により, 政策的に促進されたという事実である。1919年4月, 人民委員会議は, 「生産諸県とドン州への移住の組織について」を布告した。その前後, レーニン自身, 「少なくとも3000人の鉄道労働者と, 飢えている北部ロシアの農民の一部分を, ウクライナに移動させ (двигать)」¹⁹⁾ること, 「ピーテル (ペトログラード) 労働者のうち戦争に不向きな者を3000人ほど, ……ドンへ送り込む (отправить) こと」²⁰⁾, 「ウクライナ向けにも, ドン向けにも, ピーテルでの労働者動員を続けること」, 「(休止している工場の) 労働者を一人残らず, 3カ月間, ウクライナへ, ドンへ, 東部へ移動 (двинать) させ」²¹⁾ること, 「飢えた都市から農業へ, 菜園へ, 農村へ, ウクライナへ, ドン等々へ, できるだけ多くの人員を移す (двигать) こと」²²⁾, 「ドンへの大量移住 (переселение) をもっと精力的に推進」²³⁾すること, 「非農耕地帯からドンへの移住 (переселение) に全力を傾ける」²⁴⁾こと等々, 頻繁に指示したのである。

ところでレーニンが, このように都市労働者の農村への移住を政策的に推し進めた最大の眼目は, 農村に行けば穀物を「獲得」できるのに, 都市で餓死するのは「ばかげている」という認識であった²⁵⁾。そして都市労働者が農村で穀物を「獲得」する方法は2つあった。ひとつは, 自ら農業生産に従事して, 農業生産力とりわけ「穀物の生産を増強する」²⁶⁾ことである。これは, 前述した自然発生的な都市から農村への労働者の移住と共通する側面である。しかし, いまひとつのより直接的な方法は, 「富農」から余剰食糧を調達することであり, これこそが, 政策的な農村への労働者の移住における独自の, また主要な意義とされたのである。

1918年5月, 全ロシア・ソヴェト中央執行委員会と人民委員会議は, 「食糧人民委員に非常大権を付与する」法令を公表した²⁷⁾。「穀物独裁」, すなわち, 国家が小麦の専売権をもち, 農民は全余剰穀物を公定価格で国家に供出しなければならないことが定められたのである²⁸⁾。しかし, 農民の立場からみれば, これは単なる「略奪」でしかなかった²⁹⁾。また「余剰」の範囲も問題で, 翌年の収穫がどうなるかわからない農民層にとって, 貯蔵穀物は「余剰」ではなく, 必要な備蓄であり, また何よりもそれは自らの労働で生産した工業製品と交換可能な商品であった³⁰⁾。そこで農村では激烈な穀物徴発反対闘争がおこった。政策的に作り出された都市労働者

の農村移住は、こうした農民の反乱に対抗し、食糧徴発を円滑に進めることを大きな目的としていたのである。現にレーニンは、ドン地方への移住の目的について、「秩序を回復し、カザックの権力を弱め、彼らを内部から解体させ、彼らの間に定住させ、村ごとにグループを作らせる、等々」³¹⁾と述べている。また1918年6月には、徴発を促進するために貧農委員会が結成されたが、レーニンは、農村への「移住者」(пришлый)に対しても、この委員会の選挙権・被選挙権を与えるよう指示した³²⁾。さらに彼は、農村に移住して農民となった元労働者のポリシェビキの報告に基づき、余剰穀物と運搬手段があることを確認し、徴発を実施すべきことを指示している³³⁾。

しかしながら、以上のような諸政策、すなわち、都市労働者の農村への政策的移住による農民からの余剰穀物徴発は、結果的には、ソヴェト・ロシアの国民経済を破綻の淵に追い込み、都市への食糧供給を一層困難にした。なぜならまず農民は、穀物徴発により生産意欲を失い、「余剰」が残らないように播種面積を縮小した³⁴⁾。また彼らは、都市から赴いた労働者の徴発隊と武力闘争し、1918年末までに農村に派遣された7万2000人の労働者の1割が農民に殺されたという³⁵⁾。そして貧農委員会による「富農一掃」は、市場向け穀物をほとんど生産しない膨大な中小規模農場の出現をもたらし、農業生産力を大幅に低下させるとともに、「余剰」穀物徴発をますます困難にした³⁶⁾。1918年の食糧「生産」事情は確実に悪化し、しかも食糧「供給」事情はそれをはるかに上回る水準で悪化したのである。

そして農民層の経済的抵抗の最も積極的な形態は、自ら「担ぎ屋」(мешочники)となり、穀物の自由市場(ブラック・マーケット)を創造することであった。戦時共産主義政策の下でも、余剰穀物の「組織化されていない」市場は存在しつづけた。レーニンは、担ぎ屋の活動によって「いたるところで穀物専売が崩れていくのをみせつけられ」、担ぎ屋の一掃・排除を繰り返し訴えた³⁷⁾。ソヴェト政府機関も、「担ぎ屋」や投機屋に対し、「その場での射殺」を含む禁止法令を度々出した。しかしそれにもかかわらず、多くの農民層は、武装組織を作り、生命を張って、「担ぎ屋商売」(мешочничество)の旅に出て穀物を都市に持ち込み、それを工業製品と交換した。1917年、カルーガ県627集落の調査によれば、「担ぎ屋」は、94%の集落に合計18万7500人もいた。またこれに呼応して、労働者の「担ぎ屋」も現れた。しばしば労働者の家族は、自分の所持品や自分で作った物品を携えて農村に向かった。また労働者は、工場ぐるみで組織的に、加工製品を勝手に地方市場の自由価格で穀物と交換した。例えば繊維工業イノヴァ=ヴォズネSENSKの労働者は、綿織物を携え、組織的に農村に出掛けて行った³⁸⁾。レーニンは、かかる「担ぎ屋」との闘争を「広範な大衆の無知や無自覚や非組織性との闘争」と位置づけたが、「担ぎ屋商売」が、「無知・無自覚」か否かは別に、まさに「広範な大衆」によって支えられていたことだけは間違いなかった。それゆえ「担ぎ屋」との闘争は、きわめて「困難な闘争」であった³⁹⁾。

もとよりこうした「担ぎ屋」(мешочники)による非法下での自由市場が様々な不合理性を含んでいたことは明らかである⁴⁰⁾。個々の「担ぎ屋」は、わずかの穀物を入手するために200～300露里をかなりの困難を伴いながら旅するが、それにかかる巨額の一般経費は、必ず穀物価格にはねかえる。1915年～18年の3年間に、穀物価格は100倍以上に上昇した。レーニンは、「担ぎ屋」の小麦販売価格が国家価格の10倍に達することを指摘している⁴¹⁾。またそうでなくてもひどく混乱している交通・輸送体系は、多数の「担ぎ屋」が旅行することによって一層混乱した。レーニンは、1919年に鉄道の旅客輸送を停止して食糧運搬に充てる際、それらの列車で「担ぎ屋」ならせいぜい50万プードの穀物しか運べないが、国家なら「350万プード輸送し、それによって食糧事情を改善できる」と述べている⁴²⁾。そこで彼は、「担ぎ屋商売」(мешочничество)では数

十万の飢えた人々をすくえない」と考えたのである⁴³⁾。

しかし、それにもかかわらず、政府の食糧徴発は、破局的に破綻しつづけた。モスクワとペトログラードへの穀物の公的な搬入は、1918年1月は7.1%、2月には16%、4月には6.1%、5月には5.7%しか遂行されなかった⁴⁴⁾。これに対し、非合法的な「担ぎ屋」(мешочники)による自由市場は、1918年の必要穀物の半分以上を現実に供給していた⁴⁵⁾。例えばクバンからは、1918年3月までに公式には都市へ全く穀物が発送されなかったが、実際は、担ぎ屋が200万プード以上の穀物を選びだしていた。またクバーニ州は1918年の1～2月に食糧人民委員部を通してロシア中央に穀物を全く供出しなかったが、担ぎ屋は穀物を数百万プードも運び出していた。このような担ぎ屋の生命をかけた活動がなければ、都市住民の40%が餓死していた可能性があり、そしてそれゆえに、ロシア革命そのものが水泡に帰していた可能性も大きかったといえよう⁴⁶⁾。

そこで問題になるのは、いかなる理論的基盤が、こうした「戦時共産主義」政策、とりわけ都市労働者の農村移住による穀物徴発、及び、「担ぎ屋」の弾圧による自由市場の解体という政策を支えていたのか、ということである。もとよりこれらの政策は、直接的には、前述のごとく、帝国主義諸国の軍事干渉と内戦の中で、国民経済の社会主義的再編のための計画的措置どころか、社会主義政権が継承すべき国民経済、さらには都市住民の生命そのものが危機に瀕していた中でとられた「一時的緊急措置」であった⁴⁷⁾。しかし、たとえそうであったとしても、レーニンをこの隘路に追込み、足掛け4年間もこの政策を継続させるに至った理論的基盤が何であるかが問われなければならない。

まず、当時のレーニンは、都市から農村への移住労働者による「富農」からの余剰穀物調達を、「農村における社会主義革命」＝「共産主義建設の一環」と位置づけていた。前述のごとく、レーニンは、10月革命から半年間、「土地の社会化」を農民経営から社会主義的共同経営への漸次的移行の現れと捉えていたはずである。ところが1918年後半以後、レーニンは、10月革命による地主的土地所有の打倒を「ブルジョア民主主義」的課題の達成であったと規定を変更する⁴⁸⁾。この規定によれば、10月革命により大土地所有者から土地を収奪したロシア農民層は、その内部で必然的に資本主義的両極分解の傾向を示す。そこで農村でも「富農」と「貧農・労働者」との階級闘争が起これ、「農村の10月革命」が展望されるのである。こうした見地からすれば、「担ぎ屋」(мешочники)は、富農に奉仕し、資本主義の復活を図る闘争形態のひとつにほかならない⁴⁹⁾。同時に「担ぎ屋」は、国際的な自由商業・全世界の資本主義勢力と結合し、ソヴェト権力を崩壊させ、ロシアに資本主義を復活させるための経済的戦争の主要な発現形態でもある⁵⁰⁾。そこで「担ぎ屋」を殲滅し、「富農」から食糧を調達することは、資本主義復活を目指す諸勢力に対する「階級闘争」の一環と位置づけられたのである⁵¹⁾。

ここでは、レーニンが、「帝国主義論」研究と2月革命の総括を通して得た知見、そして10月革命を指導した知見、すなわち、世界資本主義の発展・帝国主義の確立の中にロシア資本主義・ロシア革命を位置づけ、農村における広範な農民層と共同体の残存を生かした形で、それを工業の社会主義化・労働者階級の社会主義的要求と結合させることにより社会主義形成の基盤としていくという革命の展望が、まったく捨て去られている。むしろ、「帝国主義論」以前のレーニンの方法論的限界、すなわち農業内部に視野を限定し、農民層の両極分解と農村における階級闘争に社会発展全体の指標を求める古い視角へと、明らかに退行しているのである⁵²⁾。レーニンがこの地平に退行した最も直接的な契機は、社会主義建設の「管制高地」たるべき工業が、帝国主義諸国の軍事干渉や内戦により破壊され、そこでの国有化・社会主義化が順調に進まない中で、

農業部門での商品経済の急速な進展に対して、資本主義の復活という恐怖感を抱いたことにあるといえよう⁵³⁾。いずれにせよ、レーニンのこうした理論的退行が、後にレーニン自身も認めるように、農業生産力を一層停滞させ、社会主義革命を支えた労農同盟の基盤を掘り崩したことは否めない。

〈注〉

- (1) レーニン (1917-s) p 243, 同 (1917-t) p 244。
- (2) レーニン (1917-e) p 259。
- (3) レーニン (1917-e) p 262。その際、土地は、各地域内部で平等に分配された。単一の消費・労働力基準でロシア共和国のすべての土地を分配するためには、全農業人口の約5分の1にあたる400万世帯2000万人を移住させる必要があった。保田孝一 (1971) p 313。
- (4) リーブマン (1967) p 213~214によれば、レーニンは、2月革命後も小土地所有に反対したが、8月に農民の諸要求のリストとエスエルのそれへの支持を読んでから、考えを変えた。
- (5) リーブマン (1967) p 163, メドヴェージェフ (1979) p 149~150, ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 153~154, ワース (1984) p 43, 和田春樹 (1979) p 464~465, 保田孝一 (1971) p 307~308, 長尾久 (1973) p 273~280・327~334。
- (6) 荒田洋 (1968) p 715・730, カー (1979) p 8~9, リーブマン (1967) 213~214, 保田孝一 (1971) p 294, 林道義 (1970) p 182, ボッフア (1976) p 63。
- (7) レーニン (1917-e) p 262。
- (8) ワース (1984) p 13~14。
- (9) ヒル (1947) p 173~174。
- (10) レーニン (1917-e) p 262~263。岡田進 (1968-b) p 31, リーブマン (1967) p 214, ワース (1984) p 14。
- (11) レーニン (1917-u) p 342。渡辺寛 (1963) p 192~193。工業・金融部門での国有化の動向については、メドヴェージェフ (1979) p 177~179, ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 429~439, リーブマン (1967) p 243, マクレラン (1979) p 140~141。
- (12) レーニン (1918-g) p 153。
- (13) ドイツチャー (1967) p 45~46, 中野徹三・高岡健次郎 (1970) p 244, ラッセル (1920) p 46~47, ボッフア (1976) p 91~92。
- (14) ワース (1984) p 23・122~123。
- (15) 保田孝一 (1971) p 354によれば、1922年夏の中央統計局調査資料は、87%の村が帰村者に対して土地を与えたことを示している。特に土地不足が顕著な中央農業諸県や中央ヴォルガ地区では、ほとんどすべての村が帰村者に土地を与えた。ダニーロフ (1958) p 61~62によれば、出稼に出ている者は、戻ってきた際に土地を分与される権利を維持している。ただしそれは帰還後すぐに分与されるのではなく、「いなくなる口数からの順番制」に基づく。
- (16) 農村への人口移動については、ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 553~554, 富岡裕 (1963-b) p 20~21, 雀部幸隆 (1980) p 338, カー (1979) p 35, ワース (1984) p 122, ボッフア (1976) p 154。
- (17) 従来の共同体の復活とみる立場に、和田春樹 (1979) p 464~465, ワース (1984) p 44, 保田孝一 (1978) p 77, 林道義 (1971), ボッフア (1976) p 268。

- (18) 雀部幸隆 (1980) p 336~340, ダニローフ (1958) p 136, 保田孝一 (1971) p 398~400。
- (19) レーニン (1919-c) p 315~316。なお革命直後から、都市に食糧を供給することはボリシェビキの最緊急課題であり、食糧徴発隊が編成された。メドヴェージェフ (1979) p 154。
- (20) レーニン (1919-d) p 259。
- (21) レーニン (1919-d) p 260。
- (22) レーニン (1919-b) p 155。
- (23) レーニン (1919-e) p 273。
- (24) レーニン (1919-g) p 275。
- (25) レーニン (1919-d) p 260。
- (26) レーニン (1919-b) p 155。
- (27) レーニン (1918-g) p 360。食糧の徴発とともに、工業部門の国有化も急速に進められた。この点については、ヒル (1947) p 185, ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 518。
- (28) 和田春樹 (1979) p 468~469・480, 富岡裕 (1963-b) p 22~23, ヒル (1947) p 185, ファーヴル&ファーヴル (1970) p 77~78, ボッフア (1976) p 148。
- (29) メドヴェージェフ (1979) p 177・239~240, ワース (1984) p 14~15。
- (30) メドヴェージェフ (1979) p 239~240。穀物徴発との関連で、中農政策の変遷については、渡辺寛 (1963) p 208~220。
- (31) レーニン (1919-d) p 259。
- (32) レーニン (1918-a) p 95・700。
- (33) レーニン (1919-o) p 240。
- (34) メドヴェージェフ (1979) p 240・221, ワース (1984) p 16, ダンコース (1979) p 156。
- (35) メドヴェージェフ (1979) p 227~228・231・255, 和田春樹 (1979) p 469, ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 559~562, ワース (1984) p 15~16。
- (36) カー (1979) p 31~32, メドヴェージェフ (1979) p 233~237。
- (37) レーニン (1918-c) p 69, 同 (1918-d) p 446・451, 同 (1918-e) p 501, 同 (1921-o) p 547。
- (38) メドヴェージェフ (1979) p 156~157・175~177・199~204・259~260。
- (39) レーニン (1918-e) p 501。
- (40) メドヴェージェフ (1979) p 156~157・175~177・199~204・259~260, ラッセル (1920) p 62~63。
- (41) レーニン (1919-n) p 98, 同 (1919-j) p 12。
- (42) レーニン (1919-j) p 23, 同 (1919-k) p 35~36, 同 (1919-l) p 69。
- (43) レーニン (1918-e) p 501。
- (44) ソ連邦科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 553, ヒル (1947) p 185。
- (45) レーニン (1919-n) p 98。ラッセル (1920) p 62。
- (46) メドヴェージェフ (1979) p 156~157・175~177・199~204・259~260。レーニン自身、壊血病その他の患者のために、一定の規則を設けて自由市場での買入れを許可するよう指示している。レーニン (1920-i) p 587。
- (47) 渡辺寛 (1963) p 200~201, ファーヴル&ファーヴル (1970) p 77。
- (48) レーニン (1918-i) p 408, 同 (1918-j) p 142~146, 同 (1918-k) p 319~323, 同 (1919-m) p 194。
- (49) レーニン (1918-d) p 446, 同 (1919-m) p 154~155, 同 (1919-n) p 97, 同 (1920-f) p 526,

同（1920－g）p 543。

⑤① レーニン（1920－d）p 477・504～505，同（1920－e）p 519～520。

⑤② 渡辺寛（1963）p 201～206・234，和田春樹（1979）p 469・480，中野徹三・高岡健次郎（1970）p 245，カー（1979）p 31，富岡裕（1963－b）p 22～23。

⑤③ 渡辺寛（1963）p 222・227，保田孝一（1971）p 94～95。

⑤④ メドヴェージェフ（1979）p 257～259。メドヴェージェフは、レーニンの誤りの根源を、社会主義体制下での「貨幣」「商業」「商品」等の範疇について十分に解明していなかったことに見出す。メドヴェージェフ（1979）p 140～145，191～192。

第2節 新経済政策と外国人労働者・在外ロシア人労働者の流入

1921年初め、戦時共産主義政策がロシア経済をむしろ悪化させつつあることは、もはや明白であった¹⁾。同年春、内戦は終わったが、ソヴェト政権は経済的にも政治的にも崩壊の危機に瀕していた。1920年の穀物生産高は内戦前の50%，1921年のそれは半分以下、そして市場に出回る穀物は一層少なかった。輸送機関や工業も潰滅状態にあり、1920年の重工業産出高は戦前の13%，軽工業も44%にすぎなかった。さらに多くの都市では、自由市場を含めて商業はほぼ崩壊した。都市労働者の貧窮と飢餓は極致に達し、大量の労働者が死亡した²⁾。農民層は穀物徴発に反対して全土で反乱を起こし、またクロンシュタットの反乱やペトログラード労働者のストライキは、共産党の最後の支持基盤すら崩壊しつつあることを示していた³⁾。

こうした現状に直面し、レーニンは、1921年2月、戦時共産主義政策の見直しを行い⁴⁾、3月のロシア共産党（ボ）第10回大会で新経済政策を提起した⁵⁾。当初、レーニンは、戦時共産主義政策の撤回を、農民に対する戦術的妥協、「大規模な退却」とみていた⁶⁾。しかし、1921年秋～22年になると、戦時共産主義政策を「小農民的な国で物資の国家的生産と国家的分配とをプロレタリア国家の直接の命令によって共産主義的に組織しようと考えていた」等々、明らかな過ち・「逸脱」と認めるに至った⁷⁾。

新経済政策の第1の原則は、小商品経済の発展・資本主義の部分的復活を通してロシア社会の生産諸力を拡大し、それを社会主義に漸次的に誘導していくことであった。「農民の『個人主義』、その『自由な取引』」は、「社会主義にとって恐ろしい」ものではなく、「私経営的資本主義をとおして社会主義を促進する可能性がある」ことを見通したのである⁸⁾。「小農民生産者が人口の圧倒的大部分をしめている国で、社会主義革命をなしとげることは、資本主義の発展した国なら全く不必要なような、多数の特殊な過渡的方策を用いることによって、はじめて可能になる」⁹⁾。こうしてレーニンは、穀物徴発を廃止し、農民が一定の現物税を支払った後、余剰穀物を自由市場で販売する権利を認めた¹⁰⁾。「担ぎ屋」（мешочники）は、「我々に経済を熟知させてくれる」存在と位置づけられた¹¹⁾。また、私的商業や小企業の開設も認め、先に国有化された一部の小企業も私営に戻した¹²⁾。

第2の原則は、すべての土地と「生産面での管制高地」を国有化し、「国家資本主義」を構築することである¹³⁾。このような「管制高地」としての社会化セクターの国民経済全体に対する指導力は、ロシアにおいては明らかに弱体であり、しかもこの弱さがそのまま推移すれば、社会主義の命運を危機に陥れる。しかし、ロシアの社会主義建設は、この事実をありのままに認め、その中に積極的・指導的な要素を見だし、育成していくことからしか出発できない。それだけにこの部門の国有化と生産力的発展は決定的な意義をもつのである¹⁴⁾。

こうしてレーニンは、ロシアの社会主義建設にとって決定的なことが、農民層の両極分解に基づく農村の階級闘争ではなく、むしろ、農村の中農経営における生産力の発展を、社会主義化された工業の指導性により、社会主義に漸次的に導くことにあったという路線に立った¹⁵⁾。いわば、帝国主義論から10月革命直後の時期のレーニンの革命路線が、この段階で復活したのである。

その上でレーニンは、「国家資本主義」的工業の育成のために、外国の資本家に利権を与え、彼らとソヴェト国家による合弁会社を設立することを提起した¹⁶⁾。この時期、世界的には、レーニンの予想に反し、ドイツを初めとする先進資本主義国における革命的情勢が遠ざかり、少なくとも当面、ソヴェト・ロシアは一国で社会主義政権を維持していかなければならないことが明らかとなっていた¹⁷⁾。こうした中でレーニンは、先進資本主義諸国との国交を回復し、その資本・技術を、ロシアの経済発展、とりわけ工業生産力の発展に積極的に活用する方針を採用したのである¹⁸⁾。

以上のような戦時共産主義政策の総括、及び、新たな社会主義建設路線の提起をふまえ、レーニンは、ロシア国内における都市と農村の農民・労働者移動の問題より、むしろ、諸外国からソヴェト・ロシアに流入する出稼・移民労働者の動向に注目するに至った¹⁹⁾。

この時期、ソヴェト・ロシアに流入した外国人出稼・移民労働者は、大きく2つに区分できる。

第1は、外国資本の導入に伴って流入した外国人技術者・労働者である。レーニンは、前述のごとく、外国資本の導入による国家資本主義の構築がロシアの社会主義建設に重要な役割を果たすと考え、これに伴う外国人労働者の受け入れにも積極的にとりくんだ。彼は、とりわけ高度な技術を持つ「外国人労働者」(иностранный рабочий)の流入を容易にするため、その労働条件を当該資本との自由な協約に委ねるなど、柔軟な姿勢をとった²⁰⁾。いわば彼は、「外国人の労働者(заграничный рабочий)と技術者に完全な自由を与えることによって、資本主義的諸条件をわれわれに有利なように利用するすべを理解」していたのである²¹⁾。また彼は、カムチャッカの林業や「鉱工業のように、飲料水や食糧のない産業」など、ロシア人労働者が不足している部門に、特に大量の外国人労働者を入れるよう指示している²²⁾。総じて、この第1の形態の外国人労働者は、一方で高度な技術を導入し、他方でロシア人労働者が就労しえない辺境の開拓にあたるという形で、ロシアの経済発展を促進する存在にほかならなかったといえよう。

第2に、10月革命以前、諸外国、とりわけアメリカに渡っていたロシア人移民労働者の動向がある。彼らは、アメリカに移住した後も、決して故国ロシアとの関係を断ち切ってしまったわけではなかった。革命後、まず彼らは、アメリカで「対ソヴェト・ロシア技術援助協会」や「ソヴェト・ロシア友の会」を結成し、ソヴェトに対する経済援助活動を行った。また1920年末以降、一方で資本主義諸国における恐慌を背景とし、他方でソヴェトに対する経済援助の一環として、彼ら移民労働者の中に、ソヴェトへの「逆移民」を希望する者が増大したのである²³⁾。レーニンは、この動きを重視し、移民労働者の代表と会談し、移住に関する誓約書草案を自ら起草し²⁴⁾、さらに「移住者」(колонист / переселенческий рабочий / эмигрант)の食糧や衣料、労働用具、資金分担、労働組織、労働者の資質、失敗した場合の負担等々について、細かい指示を行っている²⁵⁾。

レーニンが、このような逆移民や外国人労働者の流入を重視したことには、2重の意味がある。

ひとつは、これら外国人労働者・逆移民の流入が、資本主義諸国における1920年恐慌との関連で、社会主義の優位性を如実に示すものであったことである。「資本主義諸国の労働者が、ロシアで彼らを待っている経済的諸条件が、はるかに劣悪であることを知りながら、しかもわが国に

やってくる」という事実は、まさに資本主義が、「労働者の特定グループによりよい条件をつくりだしてやることのできるのもちろんであるが、それによって残りの労働者大衆の条件は改善されはしない」ことを明瞭に証明していた²⁶⁾。

そしていまひとつのより重要な意味は、「帝国主義論」研究以後、レーニンが強調していた外国への出稼・移民労働の進歩的意義が、とりわけ高度な生産技術の習得と労働者階級の国際連帯という両側面で、社会主義建設に発揮させようということであった。現に彼ら移民労働者は、アメリカで習得した高度な技術を持ってロシアに戻ってきた。また彼らは、明確にロシアの社会主義建設に参加する意志と熱意をもち、社会主義的な工業や集団農場で就労した。1922年10月、レーニンは、タンボフ県キルサノフ郡やオデッサ県チラスポリ郡のソヴェト農場、ドンバスの炭鉱夫グループなど、「対ソヴェト・ロシア技術援助協会」会員の生産活動を高く評価し、中でも特にペルミ県オハンスク郡のソフホーズで働いているアメリカ人トラクター部隊のめざましい成果を強調している²⁷⁾。レーニンは、彼らを、先進資本主義国で高度な知識・技術を習得し、しかもロシアを社会主義に指導する「国家資本主義的」、及び、社会主義的「管制高地」の担い手の一環として位置づけていたといえよう²⁸⁾。

〈注〉

- (1) レーニン (1921-p) p 396. 渡辺寛 (1963) p 232, マクレラン (1979) p 142.
- (2) ヒル (1947) p 183・191~192, メドヴェージェフ (1979) p 255~256.
- (3) 渡辺寛 (1963) p 232, メドヴェージェフ (1979) p 256, マクレラン (1979) p 142.
- (4) レーニン (1921-q) p 109, 同 (1921-r) p 136.
- (5) レーニン (1921-s) p 226.
- (6) ヒル (1947) p 194~195, メドヴェージェフ (1979) p 256, ファーヴル&ファーブル (1970) p 78.
新経済政策を農民への妥協と見る立場に林道義 (1971) p 120.
- (7) レーニン (1921-t) p 44~45, 同 (1921-n) p 49~51等. 渡辺寛 (1963) p 234, マクレラン (1979) p 143, ヒル (1947) p 194, ロスメル (1953) p 154, メドヴェージェフ (1979) p 188・261・262~264.
新経済政策の時期的変化については、雀部幸隆 (1980) p 400~402, 梶川伸一 (1989), 南塚信吾 (1976) 参照.
- (8) レーニン (1921-u) p 347, 同 (1921-v) p 369~370・382. 雀部幸隆 (1980) p 404・373, 富岡裕 (1963-b) p 32~35, ファーヴル&ファーヴル (1970) p 78, 渡辺寛 (1963) p 245~246. この点にかかわる実証研究として奥田央 (1977)
- (9) ヒル (1947) p 199~200
- (10) レーニン (1921-s) p 226. これに伴い、上層農を中心とする農民層が共同体から離脱し、新たな「移住村落」を作ったことについてはダニーロフ (1958) p 153~159.
- (11) レーニン (1921-n) p 52, 同 (1921-l) p 477.
- (12) 岩間徹・和田春樹・木村浩 (1979) p 490, メドヴェージェフ (1979) p 256, マクレラン (1979) p 143.
- (13) レーニン (1921-v), 同 (1921-w) p 486~487. 富岡裕 (1963) p 32~35, ソ連科学アカデミー歴史研究所 (1962) p 506~507, 中野徹三・高岡健次郎 (1970) p 260, フィッシャー&マレク (1969) p 166, ファーヴル&ファーブル (1970) p 78, 岩林彪 (1985).
- (14) 雀部幸隆 (1980) p 366・368.

- (15) この路線とかかわり、林道義(1970) p 186~187, 同(1971)は、1920年代を、帝政期と同質の共同体が復活・強化される過程と見た。これに対し、雀部幸隆(1980)は、単なる復古的再生・強化ではなく、小生産者型の「ナロードニキ的=民主主義的資本主義」の再生が「社会主義への誘導・転徹」される過程と把握する。また小島定(1980)は、レーニンの「アメリカ的道」の構想が、晩年の経済建設論に受け継がれたとみる。
- (16) レーニン(1921-w) p 523~524, 同(1921-a)。ヒル(1947) p 196
- (17) 1921年3月、ドイツ共産党がゼネストによる政権獲得に失敗した。レーニン(1921-w)。岩間徹・和田春樹・木村浩(1979) p 500~501, 倉持俊一(1980-a) p 264, ケナン(1960) p 120~131, カー(1979) p 61
- (18) 1918年初めからソヴェト政府は、外国資本にロシアでの経済利権を約束してきたが、それは、主に軍事干渉をさけるための政治的措置と考えられた。またこうした交渉は、ポーランド戦争により妨害された。ケナン(1960) p 120~131, カー(1979) p 61。外国の利権を認める方策はレーニンが予期したほどの成果を上げなかった。2211件の利権許可申請の中で、実際に認可されたのは163件にすぎず、その利権工業の産出高は1925~26年に大工業の総生産高の0.4%にしかすぎず、翌年はさらに低下した。富岡裕(1963) p 36。
- (19) なお当時、農村から都市への労働者移動が復活・増大したことについては、塩川伸明(1977) p 3~4。
- (20) レーニン(1921-a) p 332~333。
- (21) レーニン(1921-a) p 334。
- (22) レーニン(1921-a) p 334。
- (23) 移出したロシア人だけでなく、ドイツ・スカンジナビア・チェコ等からも労働者が移住してきたことについては、ボッフア(1976) p 235。
- (24) レーニン(1921-d) p 467~468。
- (25) レーニン(1921-b) p 204~205, 同(1921-c) p 366~367, 同(1921-e) p 387~388, 同(1921-g) p 407~408, 同(1921-h) p 474~476, 同(1921-i) p 476~477。
- (26) レーニン(1920-c) p 492。
- (27) レーニン(1922-a) p 756~757, 同(1922-d) p 758~759, 同(1922-b) p 396, 同(1922-c) p 394, 同(1922-f) p 617。ただしアメリカ人リョトヘルスの自治コロニーが失敗したことについては、ボッフア(1976) p 236。
- (28) もとよりレーニンは、外国人労働者の流入を無制限に認めていたわけではない。レーニン(1922-e) p 770~771で、ロシア人やアメリカ人の非合法入国に対する断固たる措置を指示している。また、同(1921-a) p 334で、外国利権企業における外国人労働者とロシア人労働者の比率についても、双方の協定によって定めることを指示している。ただし、いったん受け入れた外国人労働者に対しては、ロシア市民との完全な市民的・政治的同権を与えたことは、第4章第2節で指摘したとおりである。この点については、同(1918-b) p 106。

終章 レーニンにおける出稼・移民論の展開過程

以上、1893年から1922年に至るレーニンの出稼・移民問題に関する研究視角の発展過程をあとづけてきた。以下、各時期のレーニンの出稼・移民研究の理論的到達点と課題を整理し、そこの諸論点を考察することにより、本稿のまとめとしたい。

1983年から1905年革命に至る第1期、レーニンは、主にロシア国内での出稼労働や移住について考察し、それらをロシア資本主義発展の必然的帰結であると同時に、資本主義発展を一層促進する契機として把握した。レーニンは、このような出稼・移民において、3つの側面で「進歩的意義」を見いだす。すなわち第1に、出稼・移民は、「エネルギーと文化の中心地」への移動であり、農民層の文化・欲望・知的水準を高める「強制的な文明教育」である。第2に、出稼・移民労働は、地主経営を支える雇役労働力の流出であると同時に、諸個人の近代的自我の成熟を促進することにより、「経済的」にも「道徳的・教育的」にも農奴主的地主階級の支配を掘り崩す。そして第3に、出稼・移民労働は、資本主義的な諸矛盾を露呈させ、出稼・移民労働者は、労働者階級として資本家階級との階級闘争を行うにいたる。このような進歩的意義を、レーニンは「資本主義の発展に伴う労働の社会化」の一環として総括したのである。

ただしこの第1期においては、レーニンは、当面する革命を、農奴制の残存物を一掃するブルジョア民主主義革命と指定し、都市と農村をつなぐ出稼農民を、民主主義的労農同盟の結節点と位置づけていた。そこで、前述の3つの進歩的意義のうち、第3の側面、すなわち出稼先で労働者階級として資本家階級と闘争する側面は十分に位置づけられなかった。それは、当面する社会変革の内実として結実するのではなく、あくまで第2の側面、すなわち出稼農民の近代的自我を目覚めさせ、農村に戻った後に農奴主的地主に抵抗せざるをえなくさせる契機として重要な意味をもつにすぎなかった。したがってここでは、出稼農民が農村共同体の中で自らの生活を維持したまま、資本主義的諸矛盾に突入せざるをえないことの意義や根拠は、必ずしも合理的に説明されなかったのである。

1905年革命を経た第2期前半、この革命とストルイピン改革の総括を通して、レーニンは、「2つの道」理論とそれに基づく2つのシベリア移民の可能性を提起した。ひとつは、現実にストルイピン改革で実施された「上から」の資本主義化に伴う「土地清掃」・棄民としてのシベリア移民であり、いまひとつは、土地国有化に基づく「下から」の資本主義発展の担い手として指定されたシベリア移民の可能性である。

この「2つの道」理論とそれに基づく移民論の特徴は、第1期のレーニンの理論に比べ、2つの方向での展開の可能性を併せもっている点にある。

すなわち一方でそれは、ロシア資本主義の発展、特にその中心をなす農業資本主義の発展過程そのものに、農奴制の残存物が大きな影響を刻印していること、その意味で、農奴制の残存物の強力さの再認識を含んでいる。この認識に立てば、農民層は、出稼等によって労働者階級の影響を受けるか否かにかかわらず、農民それ自体として、「下から」の資本主義発展を担う主体であり、「上から」の資本主義化を目指す地主階級と対立せざるをえない存在と位置づけられる。プロレタリア化としての出稼労働より、「下から」の資本主義的農業経営の実現を目指す移民農業者の動向が重視される所以がここにある。

他方、「2つの道」理論は、農奴主的地主自身、もはや「農奴制の残存物」ととどまることを許されず、「上から」ではあれ、資本主義推進の担い手に転化せざるをえないこと、その意味で、資本主義の強力さの再認識をも内包している。この認識を強調すれば、地主的土地所有の没収は、地主のみならず資本家階級の利益にも抵触すること、それゆえ農民運動が、確かにそれ自身としては「下から」の資本主義化という要求に基づくとしても、地主的土地所有を有機的な一環として包摂する現実のロシア資本主義そのものに対抗する要素を含むことが示唆される。そこではむしろ、資本主義に反対する労農同盟の結節点としての出稼労働の意義が、第1期以上に重視され

るべきであった。

このように「2つの道」理論は、2つの方向での理論的萌芽を併存させていたが、結果的には、第1の方向、すなわちロシアにおける農奴制の残存物の強力さを一層強調する方向に収斂された。そこで、プロレタリア化としての出稼農民より、むしろ、「下から」の資本主義化の担い手たる移民農業者の存在が、レーニンの視野の中心にすわるようになった。この結果、前述の第1期の出稼論の限界はむしろ増幅され、出稼農民が労働者階級として資本家階級と闘争するエネルギーはますます軽視されるに至った。また移民問題についても、合理的な説明を欠くことになった。すなわち現実のシベリア移民は、確かにレーニンのいうように「下から」の資本主義化の担い手たらんと欲し、しかもその要求を「上から」の資本主義化によって粉碎され、「逆移民」にならざるをえない存在ではあった。そこで彼らが「上から」の資本主義化路線に憤りをもつのは当然である。しかしながら同時に彼らは、「下から」の資本主義化が当時のロシアでは不可能なことを身をもって学んだのである。彼らの「革命的気分」が、なぜ、地主的土地所有を不可欠の構成要素とするロシア資本主義の粉碎に向かうのではなく、「土地国有化」に基づく「下から」の資本主義化に収斂していくのか、その点が明らかにならないのである。

このような理論的限界を本格的に克服する契機が、第2期後半における「帝国主義論」研究であった。レーニンは、20世紀初頭が世界資本主義にとって産業資本主義段階から独占資本主義・帝国主義段階への転換点であったことを認識した。彼は、各国の資本主義が、工業部門での独占の形成や金融資本の支配、世界植民地体制の確立等々を通して、たとえ農業部門に「前資本主義的」諸制度を包摂したままでも、むしろその前期的基盤を基礎とすることによって帝国主義段階に到達しうることを知った。この段階においては、すでにアメリカ的な「下から」の資本主義発展の道は実現困難であるばかりでなく、それを目指すことの積極的意義もなくなっている。しかも2月革命後、レーニンは、ロシアの地主的土地所有の大部分が銀行資本の抵当に入っており、ブルジョア革命の枠内ではもはや土地国有化が不可能であることをも解明した。これらをふまえ、彼は、ロシアの労働者階級に、ツァーリズムと地主に代表される「軍事的封建的帝国主義」とブルジョアに代表される「資本主義的帝国主義」を連続的に打倒し、西欧労働者階級との連帯により社会主義に踏み出すという課題を提起した。工業・金融部門を国有化し、これを社会主義建設の「管制高地」として、農民層の小ブルジョアの生産を漸次的に社会主義的生産に導いていくという展望を確立したのである。

こうしたレーニンの革命路線の転換を支えたひとつの基礎が、外国人労働者問題の考察であった。レーニンは、諸外国への出稼・移民労働者を、世界資本主義の不均等発展と帝国主義の確立が創出した「現代の民族移動」と把握した。かかる「民族移動」は、もはや「アメリカ的」資本主義発展の担い手ではなく、民族的差別と無権利状態を刻印された不熟練労働者の移動にほかならない。また帝国主義諸国の資本は、かかる外国人労働者の差別的搾取を通して、労働者階級内部の民族的分裂をも醸成していた。まさに外国人労働者の差別的搾取は、帝国主義諸国の資本のみならず、労働者階級の間にも「帝国主義に固有の寄生性」を刻印していたのである。もはや、出稼・移民の存在そのものが支配階級への打撃であった時代は去り、いかなる出稼・移民の過程を歩むか、その過程で彼らが帝国主義世界体制といかに対峙するか、という点が問題の焦点になったといえよう。

そこでレーニンは、この段階の出稼・移民労働の進歩的意義として、まず、後進資本主義国の労働者が、出稼・移民先で「強制的な文明教育」を受け、高度な文化と生産技術、政治的市民的

自由を学びとることをあげた。政治的市民的自由はもとより民主主義的課題ではあるが、しかしもはや反封建制ではなく、反帝国主義的な民主主義的課題として指定された。レーニンは、出稼・移民を通して、外国人労働者と彼らを受け入れる先進資本主義諸国の労働者の双方が、自国のブルジョア民族主義を克服し、民族的な障壁と偏見を打ち壊し、反帝国主義的立場で労働者階級の国際連帯を強化する過程を重視した。ここではもはや諸個人の共同体からの自立という側面より、むしろ、自立した諸個人を前提とし、その上に立った労働者階級としての連帯、しかも帝国主義戦争に端的に示される人類の危機を突破するための国際連帯への指向性の成熟が、文化変容の主要な内実として把握されているのである。

10月革命を経た第3期、以上のような基本視角は、現実の社会主義建設の過程で実践に移された。もとより1918年後半～1920年にかけて、帝国主義諸国の軍事干渉と内戦により工業生産が破滅的に停滞し、都市に飢餓状態が蔓延した渦中、レーニンは一時的に理論的混乱をきたし、第1期の視角に退行して戦時共産主義政策を実施した。彼は、農民層の小ブルジョアの生産を全体として社会主義建設の基礎とする路線を見失い、農業内部での農民層分解と階級闘争の進展に社会主義への移行の原動力を見いだそうとした。そこで彼は、プロレタリアを農村に移住させ、農民層の自由市場を「担ぎ屋」として弾圧した。しかしながら1921年、レーニンは、再び、「帝国主義論」研究以来の革命路線に立ち返った。ロシアにおける社会主義建設の使命を制する「管制高地」を強化するために外国の高度な生産力、さらには労働者階級の国際連帯を積極的に活用したのである。外国資本家とソヴェト国家の合併企業における外国人労働者・技術者の積極的雇用や、アメリカを初め、諸外国に在住するロシア人移民や外国人の労働者による経済・技術援助、さらに、高度な技術と社会主義建設に貢献する意志をもって「管制高地」たる鉱工業や集団農場で就労するためにロシアに移住した外国人労働者・在外ロシア人等々は、その証にほかならなかった。

以上のごとく、1890年代～1920年代のレーニンの出稼・移民研究は、一方の極に「労働の社会化」論的視角を据え、他方の極に「帝国主義論」的視角を設定し、両者を噛み合わせることによって飛躍的に発展してきた。もとよりこの2つの基本視角はそれぞれ別個に指定されたものではない。むしろ前者の徹底こそが後者を準備したともいえる。第2期前半まで、現実存在する出稼農民・労働者の反資本主義的労働運動の意義を、レーニンが十分に評価しえなかったことは、「労働の社会化」論的視角が十分に貫かれなかったことを意味している。また帝国主義戦争は、労働者や農民にとってまさに生命＝生活の再生産に直接に関わる問題であり、帝国主義諸国の労働者階級の腐敗や墮落は、彼らの精神的風格・階級的結合の変質という問題にほかならなかった。労働者や農民の生活・意識・階級結合を基礎に置き、それを貫く内在論理と矛盾の所在を徹底して追究していたからこそ、レーニンは「帝国主義論」に到達しえたのである。

総 括 移民・出稼労働者研究の現代的発展のために

さてこれまで、第1部でマルクス・エンゲルスのアイルランド人出稼・移民研究を考察し、第2部で19世紀末から20世紀初頭における出稼・移民研究の諸潮流——カウツキー、ウェーバー、トーマス&ズナニエツキ、パーク、グラムシ——を概観し、そして本稿すなわち第3部で、1893年から1922年に至るレーニンの出稼・移民論の発展過程を検討してきた。以下、これらの理論的到達点と研究視角の内在的発展過程を考察することにより、本研究全体の総括としたい。

第1節 出稼・移民における資本主義的諸矛盾と封建制の残滓

1840年代、エンゲルスは、アイルランド人出稼・移民労働者をイギリス資本主義の相対的過剰人口の一環として把握した。これにより、アイルランドの出稼・移民問題は、特殊な地域問題ではなく、イギリス資本主義、したがって世界資本主義の形成・展開に相即した問題と位置づけられたのである。

出稼・移民労働を資本主義発展との関連で捉えるこうした視角は、1890～1920年代の研究諸潮流にも継承された。たとえば1905年革命以前のレーニンは、主にロシア国内での出稼・移住を、ロシア資本主義発展の必然的結果であると同時に資本主義発展を一層促進する契機として把握した。カウツキーも、農民・農業労働者の出稼・移住を、資本主義発展に基づいて不可避免的に進む賃労働者化の一環であり、農民層分解を一層促進させる契機と捉えた。ウェーバーは、東エルベ地方の農民流出と外国人出稼労働者の流入が、打穀機械の導入と集約的農業の普及に基づき、純粋な資本主義的賃労働契約を普及させることを指摘した。トーマス&ズナニエツキは、ポーランド農民の出稼・移民を資本主義発展に伴う共同体の解体に基づく現象と把握し、そしてパークは、人口の地域的移動・移民の増大が、貨幣がもたらした非人格的關係に基づく産業組織の拡大と結びついていることを指摘したのである。

とはいえ、出稼・移民を資本主義発展との関連で捉えると一口にいても、その位相は、エンゲルスとレーニン以下とは、大きく異なっている。

まず、1840年代のエンゲルスが対象にしたのは、当時の世界資本主義の中核に位置するイギリス資本主義であり、またそこに大量の労働者を供給している特殊な植民地としてのアイルランドであった。エンゲルスは、イギリス資本主義がアイルランド人出稼・移民労働者に押しつけている諸矛盾を詳細に記録した。ただし当時のエンゲルスは、かかる資本主義的諸矛盾を止揚する原動力を先進的なイギリス人労働者の階級闘争に見いだしていた。そこでエンゲルスは、アイルランド人出稼・移民労働者を、イギリス諸工業都市で、一方でイギリス人労働者の状態を悪化させて階級対立を促進し、他方で結婚や日常交際を通して熱烈なアイルランド気質をイギリス人労働者に移入することにより、総じて、自分自身を変化・成長させるのではなく、アイルランド的文化を持ち込んでイギリス人労働者階級に影響を与えることにより、社会変革に貢献する存在として描き出したのである。

これに対し、初期レーニンやカウツキー、ウェーバー、トーマス&ズナニエツキ、パークは、出稼・移住を通じた諸個人の変化・成長に、大きな関心を寄せている。彼らは、出稼・移民を、単に経済的な資本主義的労働力移動ではなく、世界史的な社会構造変動、及び、そこで創出されつつある新たな人間類型・パーソナリティーの把握にとって不可欠かつ絶好の研究対象として位置づけた。

しかし問題は、そこで把握されている世界社会変動や新たな人間類型の質である。総じてこれらの諸研究は、出稼・移民移動が、近代的自我・個人主義的人間類型の発展と相即し、伝統的な共同体の解体を推進すると捉えていた。初期レーニンは、出稼・移民が、農民層の文化・欲望・知的水準を高め、近代的自我の成熟を促進することにより、「経済的」にも「道徳的・教育的」にも地主の支配を掘り崩すと指摘した。彼は、出稼を通じたこのような精神的風格の改変や階級的結合・結社の再編に至る過程を、「資本主義の発展に伴う労働の社会化」と総括している。カウツキーもまた、農民層が出稼賃労働を経験する中で近代的自我・権利意識を成熟させ、農村において封建制の残滓を払拭する「進歩の最も有力な先駆者」へと変容を遂げると述べた。ウェー

パーは、出稼流出が、封建的な束縛を嫌い、自由を求める農民の心理的要因に基づくものであり、それゆえに伝統的な農業労働制度を解体させると捉えた。トーマス&ズナニエツキは、ポーランド農民の出稼・移民が、共同体の解体を契機とする「経済的上昇欲求」と「新しい経験を求める欲求」を動機とし、外部世界との接触を通して「個人主義的態度」を醸成することにより、従来の家族や共同体を一層解体させると指摘した。そしてパークは、近代の移民が人々の「個人的関心」に基づき、移住に伴う新たな文化との接触・衝突が、伝統的社会組織・家族的紐帯を崩壊させ、「個人的人間」を解放し、社会諸関係の世俗化を推し進めると把握したのである。

もとより、以上のような初期レーニン以下の諸研究も、出稼・移民に伴う近代的自我の形成・封建制の残滓の払拭をいかに評価するかという点では、多様な立場に分化する。

まずウェーバーは、出稼を通じた近代的自我の確立を、ドイツ民族の文化水準を維持・向上させる限りにおいてのみ積極的に評価した。そこで彼は、スラヴ人出稼労働者がドイツ人労働者を駆逐し始めたとき、「国家理由」の観点からスラヴ人の「閉め出し」を提唱した。ウェーバーにおいては、彼自身が析出した出稼農民の近代的自我の成熟は、結局、彼の社会再編構想とは無縁なままに終わるのである。

他方、トーマス&ズナニエツキ、パークは、出稼・移民に伴う諸個人の自立化、及び、自立した諸個人による新たな共同の創出に進歩的意義を見いだした。トーマス&ズナニエツキは、移民に伴う「社会解体」を、「合理的協同」に基づく新たな再組織化の過程として位置づけた。パークも、移住による「接触→競争→対立→適応→同化」の過程を、人類史における進歩の過程と把握した。とはいえ彼らも、現実の資本主義社会で移民労働者が様々な矛盾を抱える実態に直面せざるをえない。そこで彼らは、出稼・移民の文化変容の進歩的意義を容易に実現しえない出稼者・移民に特有の問題点を考察した。トーマス&ズナニエツキは、移民が伝統的価値基準を維持するがゆえに資本主義社会を適切に「状況定義」できず、「個人解体」状況に陥るという心的構造を分析した。パークは、経済的競争を基盤とし、文化的・身体的差異を契機として結晶化する「人種の偏見」・非人格化の問題を取り上げ、いずれの文化にもなじめない「マージナルマン」的人間類型を提起した。

しかしながら、このようなトーマス&ズナニエツキ、パークの出稼・移民論の特徴は、あくまでマクロな社会変動を所与の前提とし、そこでの移民・出稼者諸個人の心理的「不適応」に限定されていた点にある。移民諸個人の心的構造・文化変容が、既存のアメリカ資本主義社会をいかに変動・変革させていくのかという射程はほとんど見いだされない。トーマス&ズナニエツキはもちろん、「人種偏見」を問題にしたパークでさえ、「人種偏見」の最大の基盤とパーク自身が認めている経済的利害対立それ自体がもつ矛盾、特に労資の階級対立とその止揚にまで掘り下げて考察してはいない。そこで彼らのいう「合理的協同」に基づく社会とは現実のアメリカ資本主義社会を指し、「同化」とは既存のアメリカ社会構造・社会規範への「適応」にほかならなくなるのである。

これに対し、カウツキーや初期レーニンは、出稼・移民の進歩的意義を、単に封建制の残滓の払拭にとどまらず、資本主義体制それ自体をも乗り越える労働者階級の成熟として把握する視点を萌芽的には有していた。カウツキーは、出稼労働者の労働諸条件が極めて劣悪であることを指摘し、出稼労働者の生活防衛の観点から、資本に対して一定の制限を加えることを主張した。また彼は、出稼労働者の増加を資本に対抗する労働者階級の強化として積極的に評価し、出稼の制限に反対した。初期レーニンもまた、出稼・移民労働が資本主義的な諸矛盾を露呈させ、出稼・

移民労働者が労働者階級として資本家階級と様々な階級闘争を行うことを重視した。彼のいう「資本主義発展に伴う労働の社会化」には、こうした労働者階級としての成長という側面が含まれている。

しかしながら、このようなカウツキーや初期レーニンの出稼・移民論でも、一方での封建制の残滓からの脱却・近代的自我の確立という近代的文化変容と、他方での労働者階級としての反資本主義的文化変容との相互関係は、必ずしも明確ではない。カウツキーによれば、出稼労働者は、農村においては「進歩の先駆者」ではあるが、出稼先では「進歩を阻む」分子である。初期レーニンは、当面するロシア革命を、農奴制の残存物を一掃するブルジョア民主主義革命と指定し、都市と農村を繋ぐ出稼農民を民主主義的労農同盟の結節点と位置づけた。そこでは、出稼労働者が出稼先で資本家階級との間で行う階級闘争は、当面する社会変革の内実として結実するのではなく、あくまで出稼農民の近代的自我を目覚めさせ、帰村後、農奴主的地主に抵抗する契機として重要な意味をもつ。いずれにせよ出稼農民の文化変容は、資本家階級に対する労働者階級としてではなく、農民層分解を抑止しようとする封建的地主階級に対する抵抗という要素に収斂していくのである。

以上のように、1840年代のエンゲルスの論理では、イギリス資本主義、したがって世界資本主義との対抗関係の中で出稼・移民労働者の労働—生活が位置づけられたにもかかわらず、ここでの出稼・移民労働者自身の文化変容の内実と意義は十分に捕捉されなかった。他方、初期レーニンやカウツキー、ウェーバー、トーマス&ズナニエツキ、パークにおいては、出稼・移民体験をふまえた諸個人の文化変容がリアルに把握されているにもかかわらず、それはもっぱら近代化の過程として扱われ、資本主義体制それ自体との矛盾やその変動・変革への展望においては明確にされなかったのである。

このような理論的境界は、双方の出稼・移民論において、社会変動・変革に果す出稼と移民の質的な相違を曖昧にしている。エンゲルスによれば、イギリスに定着したアイルランド人移民労働者と、農閑期にイギリスにくるアイルランド人出稼農民・農業プロレタリアートとは、いずれもイギリス資本主義の相対的過剰人口である。ただ移民労働者の方が、イギリス労働者階級に量的により多く接触するという意味で重視されるにすぎない。初期レーニンやカウツキー、ウェーバー、トーマス&ズナニエツキ、パークにおいても、出稼・移民はともに封建制の残滓からの脱却と近代化の一環であり、その文化変容の大きさという点では移民が、封建制が根強く残存している農村に与える影響という点では再び農村に戻る出稼が、それぞれ注目されるにすぎない。いずれにせよ、出稼と移民の質的な相違や、出稼農民が農村共同体の中で自らの生活を維持したまま資本主義的諸矛盾に突入し、またそれによって農民層分解を阻止して自らの生活を防衛していることの意義や根拠は、必ずしも合理的に説明されないのである。

第2節 植民地主義・帝国主義と移民・出稼労働者

では、このような理論的境界は、いつ、いかなる理路を経て克服されてきたのだろうか。本研究によれば、その克服の主要な要石は、1850年代以後のマルクス、及び、「帝国主義論」研究におけるレーニンに見いだせる。

まず1850年代以降、1867年の『資本論』に至るマルクスは、アイルランドの出稼と移民が、イギリス資本主義の発展に伴う土地収奪・農業資本主義化という共通の動因によって創出されつても、それぞれ異なる階級・階層的性格をもつことを明確にした。すなわち移民労働者は、移住先

のイギリス工業都市において労働者階級として資本家に対抗せざるをえない。他方、農閑期の出稼で生活を支える小借地農・農業プロレタリアートは、イギリス地主層の土地収奪に抗議し、階級的敵対関係を自覚化せざるをえない。

その上でマルクスは、1867年末、アイルランドの出稼・移民流出をもたらした前述の共通の動因が、イギリス国家権力による歴史的なアイルランド支配の諸結果にはかならないことをさらに突っ込んで考察した。アイルランドから強制的に追い出された移民労働者は、単に労働者階級として階級的自覚を高めるのみならず、自らの体験に基づき、イギリス支配階級・政府の土地収奪に抗議し、アイルランドの独立を要求する。いわば、移民労働者の労働者階級としての発達は、決してイギリス労働者階級と同質になることではないのである。そしてこの移民労働者の要求、すなわちイギリスの土地収奪への反対とアイルランド独立は、何よりも、アイルランドに残留した出稼農民・農業プロレタリアートの、生死をかけた「生活」に基づく要求でもある。そこでマルクスは、移民労働者を「提唱者」・「指導者」とし、出稼農民をはじめとする「下層階級」に根をおろしたフェニアン運動の動向を重視し、アイルランドの民族解放闘争の興隆とイギリスからの分離が「不可避」であることを指摘した。

そして1869年以後、マルクス&エンゲルスは、アイルランドの民族解放闘争・独立が、イギリス地主制度・資本主義に決定的な打撃を与え、ひきつづく世界社会革命の不可欠の「前提条件」になると指摘した。彼らによれば、アイルランド人民は、「まさに国民的であるときにこそ、最もよく国際的」な存在である。この民族解放闘争の「作戦基地」を担うのは、イギリス工業都市で階級的意識を高めたアイルランド人移民労働者であり、世界社会変革の「槓杆」を握るのは、アイルランドに残留した出稼農民・農業プロレタリアである。

以上のように、1850年代以後のマルクス&エンゲルスは、アイルランド人出稼・移民労働者を、単にイギリス資本主義の相対的過剰人口の一形態と把握することにとどまっていなかった。アイルランドにおける出稼・移民流出は、何よりもまず、イギリス植民地主義とその特殊な植民地としてのアイルランドの歴史的独自性に基礎づけられたものであった。したがってアイルランド人移民労働者は、イギリス工業都市での賃労働・生活諸体験を通して労働者階級としての自覚を高め、同時にかつて自らが強制的に流出させられた体験をふまえ、故国アイルランドの人民と協働し、民族解放闘争を「指導」する主体であった。他方、故国に残り、農閑期の出稼で生活を支える小借地農や農業プロレタリアートは、自らの「生存」＝全生活の再生産をかけて土地収奪に反対し、まさにそのことによってイギリス支配階級の支配基盤を掘り崩し、世界社会変革の「槓杆」を握る主体であった。ここには、出稼・移民労働者が、彼等をとりまく土地所有や農業生産、国家権力そして労働者階級の運動等々といかにかわり、また自らの全生活の再生産を基底においてそこの諸体験をいかに蓄積・内化し、その中で培われた階級・階層的諸要求をいかに組織化・運動化していくのかという視角が、イギリス資本主義・世界資本主義体制の変革の問題とかがみあわされた形で提起されているのである。

さてレーニンとは、マルクス&エンゲルスとは異なった道筋で、前節で述べたアポリアを脱した。

1905年革命とストリピン改革の総括を通し、レーニンは、「2つの道」理論とそれに基づく2つのシベリア移民の可能性を提起した。ひとつは「上から」の資本主義化に伴う「土地清掃」・棄民としてのシベリア移民であり、いまひとつは、土地国有化に基づく「下から」の資本主義発展の担い手としてのシベリア移民である。

この「2つの道」理論は、一方で、ロシア資本主義の発展過程そのものに農奴制の残存物が大

きな影響を刻印していること、その意味で、農奴制の残存物の強力さの再認識を意味していた。そこで、「下から」の資本主義的農業経営を目指す移民農業者の動向が重視され、資本家と闘争する出稼労働者の意義はますます軽視された。またこの理論では、「下から」の資本主義化の担い手たらんという要求を粉碎されたシベリアからの「逆移民」が「革命的気分」を持つことは説明できても、その「革命的気分」が、なぜ地主的土地所有を不可欠の構成要素とするロシア資本主義の粉碎に向かうのではなく、「下から」の資本主義化に再び向かうのかは明らかにされなかった。

しかし他方で、「2つの道」理論は、農奴主的地主自身、「上から」ではあれ、もはや資本主義推進の担い手に転化せざるをえないこと、その意味で、資本主義の強力さの再認識の萌芽をも内包していた。この認識は結局、萌芽にとどまったが、しかしそれは、ロシアの農民運動が、「下から」の資本主義化という要求に基づきつつも、それを実現するためには、地主的土地所有を有機的な一環として包摂するロシア資本主義そのものに反対する要素を含むこと、その意味で、反資本主義的労働同盟の結節点としての出稼労働者の意義が重視されるべきであるという認識を準備したのである。

このような理論的萌芽を本格的に展開させる契機が、「帝国主義論」研究であった。レーニンによれば、20世紀初頭、世界資本主義が産業資本主義段階から独占資本主義・帝国主義段階への転換点を迎えた。この段階では、各国資本主義は、工業部門での独占形成や金融資本の支配、世界植民地体制の確立を通して、農業部門に「前資本主義的」諸制度を包摂したままで、帝国主義段階に到達しうる。しかも1917年の2月革命以後、レーニンは、ロシアの地主的土地所有の大部分が銀行資本の抵当に入り、ブルジョア革命の枠内ではもはや土地国有化が不可能であることをも解明した。そこで彼は、ロシアの労働者階級に、「軍事的封建的帝国主義」と「資本主義的帝国主義」とを連続的に打倒し、社会主義に踏み出す課題を提起したのである。

このようなレーニンの革命路線の転換を支えたひとつの基礎が、外国人労働者問題であった。レーニンは、諸外国への出稼・移民労働者を、世界資本主義の不均等発展と帝国主義の確立が創出した「現代の民族移動」と把握した。かかる「民族移動」は、もはや「アメリカ的」資本主義発展の担い手ではなく、民族的差別と無権利状態を刻印された不熟練労働者の移動である。また帝国主義諸国の資本は、外国人労働者の差別的搾取を通して労働者階級内部の民族的分裂を醸成している。まさに外国人労働者の差別的搾取は、帝国主義諸国の資本のみならず、労働者階級の間にも「帝国主義に固有の寄生性」を刻印していた。もはや、出稼・移民の存在そのものが支配階級への打撃であった時代は去り、いかなる出稼・移民の過程を歩むか、その過程で彼らが世界帝国主義体制といかに対峙するかが問題の焦点になったのである。

そこでレーニンは、この段階の出稼・移民労働が、とりわけ後進資本主義国の労働者にとって、高度な文化と生産技術、政治的市民的自由を学びとる「強制的な文明教育」であると把握した。ここでいう政治的市民的自由は、民主主義的課題ではあるが、しかしもはや反封建ではなく、反帝国主義的な民主主義的課題である。またレーニンは、出稼・移民を通して、外国人労働者と先進資本主義諸国の労働者の双方が、ブルジョア民族主義を克服し、民族的な障壁と偏見を打ち壊し、反帝国主義的国際連帯を強化する過程を重視した。もはや諸個人の共同体からの自立という側面より、自立した諸個人を前提とした労働者階級としての連帯、しかも帝国主義戦争に端的に示される人類の危機を突破するための国際連帯への指向性の成熟が、文化変容の主要な内実として指定されるのである。

以上のようなマルクス&エンゲルス、レーニンの理論的展開の延長上に、1920～30年代のグラムシの出稼・移民論が位置する。

グラムシは、イタリアの移民・出稼を、資本主義一般ではなく、国家権力と地主的土地所有による農村収奪を不可欠の基礎とする特殊イタリア資本主義・「帝国主義」との関連で考察した。その観点からすれば、移民流出は、イタリア資本主義が農民生活に押しつけた「災い」であり、それゆえイタリア資本主義に対する「現実的批判」である。また移民流出は、アメリカ等における民族差別的な労働分業によって資本主義的搾取を容易にし、イタリアにおいては民衆に個人主義的ではばばらな「移民的性格」と「アメリカ神話」を醸成し、総じて資本主義の矛盾から目をそらせる役割を果たしていた。このようなグラムシの出稼・移民論は、世界資本主義の発展段階とその中で後進資本主義国イタリアの位置に関する認識を前提としている。また移民を余儀なくされる農民層が、封建的土地所有を構成要素とするイタリア資本主義そのものに反抗せざるをえないことが示されている。

第3節 理論展開の機軸と現代的意義

以上、総括してきたマルクスとエンゲルス、レーニンにおける理論的展開は、何よりも、世界的な社会変革の「槓杆」をどこに見いだすのかというきわめて実践的な問題意識を導きの糸として墨重的になされてきた。またこの問題意識を具体的に支えてきたのは、諸個人の「生存」＝全生活の再生産を基底におき、被抑圧階級・被抑圧民族の「生活」の問題から出発して、彼らの生活防衛の運動・組織化の問題に連鎖させていくという基本的な方法であった。

すなわちまず、マルクス&エンゲルスにおいて、出稼や移民は、まさにイギリスがアイルランド人民におしつけた抑圧の具体的な現れであり、しかもアイルランド人民の全生活の再生産にとって不可欠なものとして存していたがゆえに、その初期から問題関心に位置づけられてきた。したがって彼等においては、つねに出稼化・移民化を余儀なくされたアイルランド人民の主体的な変化こそが、イギリス大工業の発展、アイルランドの土地所有・農業生産、イギリス国家権力による支配、アイルランドの階級的・民族的運動、そしてイギリスの（すなわち世界レベルの）社会変革等々との関連に位置づけて把握されたのである。

またレーニンにおける出稼・移民研究も、一方の極に「労働の社会化」論的視角を据え、他方の極に「帝国主義論」的視角を設定し、両者を噛み合わせることによって飛躍的に発展してきた。もとよりこの2つの基本視角はそれぞれ別個に措定されたものではない。むしろ前者の徹底こそが後者を準備してきたともいえる。「帝国主義論」研究以前のレーニンは、現実に存在する出稼農民・労働者の反資本主義的労働運動の意義を十分に評価しえなかった。このことは、「労働の社会化」論的視角が十分に貫かれなかったことを意味している。また帝国主義戦争は、労働者や農民にとってまさに生命＝生活の再生産に直接関わる問題であり、帝国主義諸国の労働者階級の腐敗や墮落は、彼らの精神的風格・階級的結合の変質という問題にほかならなかった。労働者や農民の生活・意識・階級結合を基礎に置き、それを貫く内在論理と矛盾の所在を徹底して追究していたからこそ、レーニンは「帝国主義論」に到達しえたのである。

もちろん、マルクスが析出したアイルランド人出稼・移民労働者の文化変容の意義や、レーニンが想定した「労働の社会化」や「帝国主義論」の具体的内容を、現代世界社会、及び、現代日本の出稼農民・外国人出稼労働者に単純にあてはめることはできない。我々がなすべきことは、「帝国主義論」や「資本論」で説明しうる諸事象を現実から拾い出してくることではない。まさ

にマルクスが「資本論」で補足しえない現実をアイルランド問題に見いだすことによって新たな理論的展開を遂げたように、レーニンが「ロシアにおける資本主義の発達」では理解しえない様々な現実に挑みかかることによって「帝国主義論」を切り拓いたように、我々は20世紀末の現実の出稼・移民労働問題にアプローチしなければならない。「黄金なす生命の樹」(豊かな現実)は、我々の前にも存在するのである。また出稼・移民問題に限定した本稿では、諸個人の精神的風格や社会的結合の具体的な改変の過程、すなわちいわゆる社会意識論や集団・組織論、さらにそれらに対する目的意識的な働きかけとしての教育論や政治論のレベルでのマルクスやレーニン、グラムシ等々の分析視角は、十分に解明されていない。これらの検討は、今後の課題である。

しかしながら、ここで明らかにした基本視角、すなわち、出稼・移民問題を、帝国主義世界体制における各国資本主義の歴史的・地域的特質に基づく被抑圧民族・被抑圧階級の「生活」=全生活の再生産における矛盾の一端として把握し、同時に出稼・移民先での体験を踏まえた諸個人の文化変容や人格的変化の具体的な内実を、彼らの生活防衛の運動・組織化・国家権力との対抗関係に連鎖させて把える視角そのものは、現在の日本の出稼研究に決定的に欠落したものであり、今後の日本の出稼・移民研究にも大きな示唆を与えているといえよう。

晩年のエンゲルスは、アイルランド人に「国際的」であるより「国民的」であることを主張したのに対し、「帝国主義論」研究以後のレーニンは、移民に伴う民族隔壁の破壊、民族的差異の除去、諸民族の「同化」の進歩的意義を主張した。こうした相違も、かかる帝国主義世界体制の認識と各国資本主義の特殊性把握との関連で把握されなければならないであろう。諸民族が長期的には融合していくのか、それとも差異を生かしながら共存していくのかという問題は、今日も、「民族同化主義」と「民族多元主義」、「普及理論」と「内的植民地理論」、もしくは「メルティング・ポット論」と「モザイク(サラダ・ボール)論」等々として論点のひとつとなっている。しかし現実の労働者・人民諸個人の「生活」=生命の再生産における矛盾とその止揚の展望——それは少なくとも帝国主義段階以後、世界社会の矛盾と変革の展望であり、同時にその中で各国社会の特殊性をふまえた展望でもある——の認識を欠くとき、「民族同化主義」は近代化と有力民族への無批判的な「同化」の主張に容易に陥り、「民族多元主義」は諸民族内部の矛盾を看過して各民族に「分」を弁えるよう説くことと同義になるのである。

資料 (1) レーニンの出稼・移民に関する文献目録

*直接、「出稼」・「移民」・「労働力移動」に言及している文献に限定した。

*文献名の前の()内の番号は、第1章の図表の中の文献ナンバーとする。

*文献名の後の()内の巻数は、基本的には第4版(邦訳:大月書店刊)。第4版に収録されていないものに限り、第5版を参照した。第5版の文献名邦訳は筆者による。

- (1) (1893-a)「農民生活における新しい経済的動向」(1巻)(1893年春に執筆)
- (2) (1893-b)「いわゆる市場問題について」(1巻)(1893年秋に執筆)
- (3) (1894) 「『人民の友』とはなにか」(1巻)(1894年春～秋に執筆)*第1分冊は4月、第2・第3分冊は夏に脱稿。1892～93年に準備開始・研究報告。
- (4) (1894～5)「ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著作におけるその批判」(1巻)(1894年末～1895年始めに執筆)*元になった研究報告は1894年秋。
- (5) (1895) 「工場で労働者から徴収される罰金にかんする法律の説明」(2巻)(1895年秋に執筆)

- (6) (1895～6)「社会民主党綱領草案と解説」(2巻)(1895～96年に執筆)*「綱領草案」は95年末、「解説」は96年夏に執筆。
- (7) (1897-a)「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」(2巻)(1897年3月執筆)
- (8) (1897-b)「ロシア社会民主主義者の任務」(2巻)(1897年末に執筆)
- (9) (1897-c)「ペルミ県における1894～95年のクスターリ調査と『クスターリ』工業の一般的諸問題」(2巻)(1897年に執筆)
- (10) (1897-d)「ナロードニキの空想計画の珠玉」(2巻)(1897年末に執筆)
- (11) (1897-e)「どういう遺産をわれわれは拒否するか」(2巻)(1897年末に執筆)
- (12) (1896～9)「ロシアにおける資本主義の発展」(3巻)(1896～99年に執筆)*1896年1月に執筆開始、99年1月30日完成。
- (13) (1899-a)「ア・エヌ・ボトレソフへの手紙」(34巻)(1899年1月26日)
- (14) (1899-b)「書評 エル・グヴォーズデフ『クラーク＝高利貸層、その社会経済的意義』」(4巻)(1899年2月に執筆)
- (15) (1899-c)「ふたたび実現理論の問題によせて」(4巻)(1899年3月に執筆)
- (16) (1899-d)「書評 カール・カウツキー『農業問題』」(4巻)(1899年3月に執筆)
- (17) (1899-e)「農業における資本主義」(4巻)(1899年4～5月に執筆)
- (18) (1899-f)「わが党の綱領草案」(4巻)(1899年末に執筆)
- (19) (1900) 「非批判的批判」(3巻)(1900年3月に執筆)
- (20) (1901-a)「労働者党と農民」(4巻)(1901年2月に執筆)
- (21) (1901-b)「農業問題と『マルクス批判家』」(5巻)(1901年6～9月に執筆)
- (*) 「ブルジョア文献の批判的検討と農業統計の大量的資料の分析」(40巻)
(1900～03年、ただし出稼・移民関係は、1901年6～9月に執筆)
- (22) (1901-c) M. ヘヒト『バーデン地方のハルトの3つの村落』(ライプチヒ1895)の資料の分析＝1901年6～9月に執筆。
- (23) (1901-d) A. スーション『農民的土地所有』についての評注＝1901年6～9月に執筆。
- (24) (1901-e) F. モーリス『農業と社会問題。農業と土地所有からみたフランス』(パリ1892)についての論評＝1901年6～9月に執筆。
- (25) (1901-f) バーデンのアンケート資料(1883)についての覚書＝1901年6～9月執筆。
- (26) (1901-g)「論文『農奴主たちは仕事をしている』の資料」(第5版第5巻)
- (27) (1901-h)「農奴主たちは仕事をしている」(5巻)(1901年9月10日『イスクラ』10号掲載)
- (28) (1901-i)「国内評論」(5巻)(1901年10月に執筆)
- (*) 「農業問題にかんする労作のプランと概要」(40巻)
- (29) (1901-j) 労作『農業問題と『マルクス批判家』』のプラン＝1901年6～9月執筆。
- (30) (1903-b) ヨーロッパとロシアの農業問題にたいするマルクス主義の見解/第1案・第2案＝1903年2月10～13日の講義要綱。2月10日以前に執筆。
- (31) (1903-c) 社会革命党と社会民主党の農業綱領/第1案・第2案＝1903年2月18日の講義要綱。2月18日以前に執筆。
- (32) (1902-a)「ロシア社会民主労働党綱領草案」(6巻)(1902年1月末～2月初執筆)
- (33) (1902-b)「ロシア社会民主党の農業綱領」(6巻)(1902年2～3月前半に執筆)
- (34) (1902-c)「論文『ロシア社会民主党の農業綱領』にたいするプレハーノフとアクセリロードの意見

- への回答」(41巻)(1902年5月1日に執筆)
- (35) (1902-d)「なぜ社会民主党は社会革命党にたいして断固たる仮借ない戦争を宣言しなければならないか?」(6巻)(1902年6~7月に執筆)
- (36) (1902-e)「革命的冒険主義」(6巻)(1902年8月1日・9月1日『イスクラ』23/24)
- (37) (1903-a)「貧農に訴える」(6巻)(1903年3月に執筆)
- (38) (1903-d)「ナロードニキばりのブルジョアジーと途方にくれたナロードニキ主義」(7巻)(1903年11月5日に執筆)
- (39) (1905-a)「アメリカの『黒い割替』についてのマルクスの所論」(8巻)(1905年4月20日『フベリョード』15号)
- (40) (1905-b)「農民運動にたいする社会民主党の態度」(9巻)(1905年9月14日『プロレタリー』16号)
- (41) (1907-a)「第2国会における土地問題についての演説の草案」(12巻)(1907年3月21~25日の間に執筆)
- (42) (1907-b)「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」(13巻)(1907年8月末~9月初に執筆) * 第2インターナショナル第7回大会(1907年8月18~23日)
- (43) (1907-c)「シュトゥットガルトの国際社会主義者大会」(13巻)(1907年9月に執筆)
- (44) (1907-d)「1905~1907年の第1次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」(13巻)(1907年11~12月に執筆)
- (45) (1908)「19世紀末のロシアにおける農業問題」(15巻)(1908年執筆)
- (*)「ヨーロッパおよびアメリカ合衆国の資本主義経済の研究資料」(40巻)
- (46) (1910~2)「オーストリアの農業統計」(1910~1912年に執筆)
- (47) (1912~5)「アメリカ合衆国における資本主義と農業」*1912年に1900年のアメリカ統計資料の研究開始。1915年に結実。
- (48) (1914~5)「アメリカの農業統計」=1914年5月5日~1915年12月29日までの間に執筆。
- (49) (1911)「農奴制崩壊50周年」(17巻)(1911年2月8日『テボーチャヤ・ガゼータ』3号)
- (50) (1912-a)「移民問題」(18巻)(1912年6月3日『ネフスカヤ・スヴェズダ』11号)
- (51) (1912-b)「最後の弁」(18巻)(1912年8月5日『ネフスカヤ・スヴェズダ』20号)
- (52) (1913-a)「農民の土地の動産化」(18巻)(1913年2月1日『ブラウダ』26号)
- (53) (1913-b)「移民事業の意義」(19巻)(1913年4月27日・5月1日『ブラウダ』96・99号)
- (54) (1913-c)「建設業と建設労働者」(19巻)(1913年5月9日『ブラウダ』105号)
- (55) (1913-d)「ふたたび移民事業について」(19巻)(1913年5月9日『ブラウダ』105号)
- (56) (1913-e)「地主の出稼ぎ農業労働者論」(41巻)(1913年5月10日に執筆)
- (57) (1913-f)「現政府の(一般)農業政策の問題によせて」(19巻)(1913年6月7日以前に執筆)
- (58) (1913-g)「分与地の動産化」(19巻)(1913年7月26日『ラボーチャヤ・ブラウダ』12号)
- (59) (1913-h)「イギリスの自由主義者と土地問題」(19巻)(1913年10月12日『ザ・ブラウドゥ』8号)
- (60) (1913-i)「資本主義と労働者移民」(19巻)(1913年10月29日『ザ・ブラウドゥ』22号)
- (61) (1913-j)「民族問題についての論評」(20巻)(1913年10~12月に執筆)*執筆に先立ち、13年夏に研究報告。
- (62) (1914-a)「ゼムストヴォ統計の課題の問題によせて」(20巻)(1914年1月1日『プロスヴェシチェーニエ』1号)
- (63) (1914-b)「イギリスの自由主義者とアイルランド」(20巻)(1914年3月12日『プーチ・ブラウドィ』

34号)

- (64) (1915-a) 「農業における資本主義の発展法則についての新資料/第1分冊/アメリカ合衆国における資本主義と農業」(22巻)(1915年に執筆)
- (65) (1915-b) 「イタリアにおける帝国主義と社会主義(覚書)」(21巻)(1915年『コムニスト』1～2号)
- (66) (1915-c) 「『社会主義宣伝連盟』の書記へ」(21巻)(1915年11月9日以前に執筆)
- (*) 「帝国主義論ノート(β)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (67) (1915-6-a) ツォリンガー(国際バランス)とネイマルク
 - (68) (1915-6-b) 「バンク」からの抜粋
- (*) 「帝国主義論ノート(γ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (69) (1915-6-c) 年誌(コンラッド)からの文献の抜書き
 - (70) (1915-6-d) 著書『資本主義の最高の段階としての帝国主義』のプラン
 - (71) (1915-6-e) 同書の個々の章のプラン
- (*) 「帝国主義論ノート(δ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (72) (1915-6-f) 目次
 - (73) (1915-6-g) ヘンガー『フランス人の投資』
- (*) 「帝国主義論ノート(θ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (74) (1915-6-h) ヒルファイディング『金融資本論』
 - (75) (1915-6-i) リーサー『ドイツの大銀行とその集中』
- (*) 「帝国主義論ノート(κ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (76) (1915-6-j) J. A. ホブソン『帝国主義論』
- (*) 「帝国主義論ノート(ν)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (77) (1915-6-k) 植民地征服と戦争の年代表
 - (78) (1915-6-l) ジーグフリード『ニュージーランド』
- (*) 「帝国主義論ノート(ξ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (79) (1915-6-m) リュードルファー『今日の世界政治の根本特徴』
 - (80) (1915-6-n) ルーカス『大ローマと大ブリテン』
 - (81) (1915-6-o) ヴァルター・スハウゼン『国外投資の国民経済体系』
- (*) 「帝国主義論ノート(σ)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (82) (1915-6-p) エンゲルスのゾルゲへの手紙
 - (83) (1915-6-q) 日本人とアメリカ労働者の排外主義
- (*) 「帝国主義論ノート(マルクス主義と帝国主義について)」(39巻)(1915～16年に執筆)
 - (84) (1915-6-r) メーリング『マルクスとエンゲルスの伝記についての新資料』
 - (85) (1916-a) 「資本主義の最高の段階としての帝国主義」(22巻)(1916年1～6月に執筆)
 - (86) (1916-b) 「プロレタリア革命の軍事綱領」(23巻)(1916年9月に執筆)
 - (87) (1916-c) 「『軍事撤廃』のスローガンについて」(23巻)(1916年10月に執筆)
 - (88) (1916-d) 「スイス社会民主党内のツィンメルヴァルド左派の任務」(23巻)(1916年10月末～11月初に執筆)
 - (89) (1916-e) 「祖国擁護問題の提起によせて」(23巻)(1916年12月に執筆)
 - (90) (1916-f) 「マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』とについて」(23巻)(1916年8月～10月に執筆)

- (91) (1917-a) 「統計と社会学」(23巻)(1917年1月以前に執筆)
- (92) (1917-b) 「農民代表第1回全ロシア大会」(24巻)(1917年5月4～28日)
- (93) (1917-c) 「フィンランド陸海軍・労働者地方委員会議長への手紙」(26巻)(1917年9月27日執筆)
- (94) (1917-d) 「党綱領の改正によせて」(26巻)(1917年10月6～8日に執筆)
- (95) (1917-e) 「労働者・兵士代表ソヴェト第2回全ロシア大会」(26巻) *1917年10月25～26日/土地についての布告=10月26日
- (96) (1917-f) 「講和交渉の政綱の梗概」(26巻)(1917年11月27日に執筆)
- (97) (1918-a) 「貧農の組織化と貧農への物質供給にかんする布告草案によせて」(42巻)(1918年6月8日に執筆)
- (98) (1918-b) 「ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法第2篇第20条の下書き」(42巻)(1918年7月10日以前に執筆)
- (99) (1918-c) 「実務的基盤の上に」(27巻)(1918年3月1日)
- (100) (1918-d) 「全ロシア中央執行委員会、モスクワ労働者、農民、赤軍代表ソヴェトおよび労働組合の合同会議」(27巻)(1918年6月4日)
- (101) (1918-e) 「モスクワの労働組合と工場委員会との第4回協議会」(27巻)(1918年6月27日～7月2日)
- (102) (1918-f) 「鉄道全線の徴発隊長への電報」(35巻)(1918年7月1日に執筆)
- (103) (1919-a) 「エヌ・イ・イヴァノフへの電報」(第5版50巻)(1919年1月31日)
- (104) (1919-b) 「モスクワ労働者・赤軍兵士代表ソヴェト総会臨時会議におけるソヴェト共和国の内外情勢についての報告にもとづく決議案」(42巻)(1919年4月3日以前に執筆)
- (105) (1919-c) 「モスクワ接続駅鉄道従業員代表者会議での演説」(29巻)(1919年4月16日に演説)
- (106) (1919-d) 「ベトログラードの諸組織へ」(44巻)(1919年4月後半に執筆)
- (107) (1919-e) 「ア・ヴェ・ルナチャルスキーへの電報」(44巻)(1919年5月15日)
- (108) (1919-f) 「ア・エリ・コレガエフへの電報」(第5版50巻)(1919年5月17日)
- (109) (1919-g) 「ゲ・ヤ・ソコリニコフへ」(44巻)(1919年5月20日)
- (110) (1919-h) 「オデッサ執行委員会への電報」(44巻)(1919年5月24日)
- (111) (1919-i) 「イ・ヴェ・スターリンへの電報」(44巻)(1919年6月3日に執筆)
- (112) (1919-j) 「ベトログラード・ソヴェトの会議」(29巻)(1919年3月12日)
- (113) (1919-k) 「ベトログラードの人民会館における集会での演説」(29巻)(1919年3月13日)
- (114) (1919-l) 「ソヴェト政権の成功と困難」(29巻)(1919年3月～4月)
- (115) (1919-m) 「ロシア共産党(ボ)第8回大会」(29巻)(1919年3月18～23日)
- (116) (1919-n) 「プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治」(30巻)(1919年10月30日)
- (117) (1919-o) 「エス・ベ・セレダとア・デ・ツェルーパーへ」(44巻)(1919年4月7日)
- (118) (1919-p) 「エム・イ・カリーニンへの電報」(44巻)(1919年5月13日に執筆)
- (119) (1920-a) 「アメリカの新聞『ザ・ワールド』の特派員(リンカン・エアラとのインタビュー)」(42巻)(1920年2月半ば)
- (120) (1920-b) 「シベリア革命委員会と各県執行委員会への電報」(6月29日)(第5版51巻)
- (121) (1920-c) 「第8回全ロシア・ソヴェト大会」(31巻)(1920年12月22～29日) *第8回ソヴェト大会
ロシア共産党(ボ)代議員団会議での利権についての報告(12月21日)
- (122) (1920-d) 「ロシア共産党(ボ)第9回大会」(30巻)(1920年3月29日～4月5日)
- (123) (1920-e) 「鉾山労働者組合第1回全ロシア創立大会での演説」(30巻)(1920年4月4日～6日)

- (124) (1920-f) 「労働組合第3回全ロシア大会での演説」(30巻)(1920年4月7日)
- (125) (1920-g) 「繊維工業労働者第3回全ロシア大会での演説」(30巻)(1920年4月19日)
- (126) (1920-h) 「1920年5月6日の無線通信への追記」(36巻)(1920年5月6日)
- (127) (1921-a) 「全ロシア労働組合中央評議会の共産党グループ会議での利権についての報告」(32巻)
(1921年4月11日に報告)
- (128) (1921-b) 「エリ・カ・マルテンヌヘ」(45巻)(1921年6月22日)
- (129) (1921-c) 「ヴェ・ヴェ・クイプシシェフヘ」(45巻)(1921年9月19日)
- (130) (1921-d) 「ヴェ・ヴェ・クイプシシェフへの手紙とアメリカからロシアにくる労働者の誓約書の草案」(42巻)(1921年9月22日に執筆)
- (131) (1921-e) 「エヌ・ベ・ゴルブーノフへの依頼とヴェ・ヴェ・クイプシシェフへの手紙」(45巻)(1921年9月30日)
- (132) (1921-f) 「播種カンパニアの進行状況の質問」(45巻)(1921年10月4日執筆)
- (133) (1921-g) 「ヴェ・ヴェ・クイプシシェフヘ」(45巻)(1921年10月12日)
- (134) (1921-h) 「リュトヘルス・グループとの協定の問題についてのロシア共産党(ボ)中央委員会政治局の決定草案をふくむヴェ・エム・モロトフへの短信」(42巻)(1921年10月12日)
- (135) (1921-i) 「S. リュトヘルスの提案の問題についてのロシア共産党(ボ)中央委員会および労働国防会議の決定草案をふくむ政治局員への手紙」(42巻)(1921年10月12日～15日の間に執筆)
- (136) (1921-j) 「労働国防会議から地方ソヴェト機関への指令、草案」(32巻)(1921年5月21日)
- (137) (1921-k) 「ロシア共産党(ボ)第10回全国協議会」(32巻)(1921年5月26～28日)
- (138) (1921-l) 「第3回全ロシア食糧会議での演説」(32巻)(1921年6月16日)
- (139) (1921-m) 「新しい時代、新しい形をとった古い誤り」(33巻)(1921年8月20日)
- (140) (1921-n) 「新経済政策と政治教育部の任務」(33巻)(1921年10月17日)
- (141) (1921-o) 「エフ・エ・ゼルジンスキーへの電報」(35巻)(1921年5月27日に執筆)
- (142) (1922-a) 「ベルミ県執行委員会議長ヘ」(45巻)(1922年10月20日)
- (143) (1922-b) 「対ソヴェト・ロシア技術援助協会ヘ」(33巻)(1922年10月20日)
- (144) (1922-c) 「ソヴェト・ロシア友の会(アメリカ)ヘ」(33巻)(1922年10月20日)
- (145) (1922-d) 「全ロシア中央執行委員会幹部会ヘ」(45巻)(1922年10月24日)
- (146) (1922-e) 「国家保安部ヘ」(45巻)(1922年11月6日に執筆)
- (147) (1922-f) 「国際労働者救援会書記ヘ」(35巻)(1922年12月2日に執筆)

資料(2) 引用・参考文献目録

*本稿《第3部》で直接、引用・参照指示した文献に限定した。

*レーニンの文献については、「出稼」「移民」「移動」に直接言及していない文献に限定した。「出稼」等に言及している文献は、資料(1)に掲載した。

《あ》

アヴィネリ(1968)(Avineri, S): Social and Political Thought of Karl Marx, Cambridge U. P.

浅田喬二(1969)「二月革命前におけるレーニンの土地国有論と政治変革論」『土地制度史学』42

- 浅野慎一 (1984) 「農民層の出稼と家族・村落社会の再編過程」『村落社会研究』第20集 御茶の水書房
- 浅野慎一 (1985) 「出稼農村地帯における農民層の出稼労働の変容と家族・村落構造」北海道大学教育学部
教育社会学研究室『調査と社会理論』研究報告書 4
- 浅野慎一 (1986) 「出稼農民研究における社会学的分析視角の展開 (その1)」北海道大学教育学部『紀要』
48号
- 浅野慎一 (1991) 「出稼農民研究における社会学的分析視角の展開 (その2)」北海道大学教育学部『紀要』
55号
- 淡路憲治 (1970) 「晩年のマルクスのロシア像」『思想』549
- 淡路憲治 (1972) 「ロシアにおけるマルクスとエンゲルス」一橋大学『経済研究』23-3
- 荒田 洋 (1968) 「農村における変革過程」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 荒又重雄 (1974-a) 「帝政ロシア『工場監督官報集成』分析 (第1報)」『経済学研究』(北大) 24-1
- 荒又重雄 (1974-b) 「帝政ロシア『工場監督官報集成』分析 (第2報)」『経済学研究』(北大) 24-2
- 荒又重雄 (1982) 「ロシア資本主義における労使関係について」『経済学研究』(北大) 32-1
- 有馬達郎 (1989) 「工業における独占体の成立: 補論1, 蓄積構造の特質, 部門連関と対外市場関連の特質」
大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』ミネルヴァ書房
- 石崎昭彦 (1962) 『アメリカ金融資本の成立』東大出版会
- 市川泰治郎 (1969) 『ホブズボーム・共同体の経済構造・訳注』未来社
- 伊藤昌太 (1977) 「ロシア社会の構造的特質と歴史変革のコース 論点開示」『西洋史研究』第6号
- 伊藤昌太 (1980) 「ロシア資本主義論争」相沢与一他編『講座 資本論の研究』第5巻 青木書店
- 入江節次郎 (1968) 「ロシア帝国主義論の方法」一橋大学『経済学研究』19-2
- 岩林 彪 (1985) 「資本主義認識と社会主義経済システム」『大阪経大論集』162-163
- 岩間 徹 (1979) 『ロシア史』(序説) 山川出版社
- 岩間徹・和田春樹・木村浩 (1979) 「ソヴェトの社会と文化」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社
- ヴァリツキ (1969) (Walicki, A) 日南田静真他訳『ロシア資本主義論争』ミネルヴァ書房 1975年
- エマニュエル&ベッテルハイム (1969) (Emmanuel, A. & Bettelheim) : Ch Deux theses sur le < salaires >
sereclamant du marxisme, Le Monde, Supplement au numero 7722. (原田金一郎訳)『新国
際価値論争』柘植書房 1981年
- エンゲルス (1872-73) (Engels, F) 『住宅問題』全集18巻
- エンゲルス (1875) (Engels, F) 「亡命者文献5 ロシアの社会状態」全集18巻
- エンゲルス (1882-c) (Engels, F) 「9月12日 カウツキーへの手紙」全集35巻
- エンゲルス (1884-b) (Engels, F) 「10月9日 ベルンシュタインへの手紙」36巻
- エンゲルス (1885) (Engels, F) 「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙 4月23日」全集36巻
- エンゲルス (1892-b) (Engels, F) 「イギリスにおける労働者階級の序文」全集22巻
- 大川健嗣 (1967) 「レーニンのいわゆる『新資料』の再検討」研究年報『経済学』28-3・4
- 大川健嗣 (1979) 『日本資本主義と農業』御茶の水書房
- 大崎平八郎 (1973) 「ロシア帝国主義史研究をめぐるソビエト歴史学界の論争」『エコノミア』横浜国立大学
経済学会47
- 大崎平八郎 (1989) 「工業における独占体 補(2)鉄道建設」大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』ミネルヴァ
書房
- 太田仁樹 (1989) 『レーニンの経済学』御茶の水書房

- 岡田 進（1968-a）「戦時経済—ロシア資本主義崩壊への道」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 岡田 進（1968-b）「ロシアにおける土地国有の展開」『土地制度史学』40
- 岡田 進（1989）「工業における独占体の成立」（第1～3節）大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』ミネルヴァ書房
- 岡本 正（1963）「国民経済発展の長期計画の逆行」副島種典編著『ソヴェト経済の歴史と理論』日本評論社
- 奥田 央（1977）『ソヴェト経済政策史』東大出版会
- 尾崎芳治（1990）『経済学と歴史変革』青木書店
- 尾上修悟（1987）「19世紀前半の国際移民・国際投資と国際分業」森田桐郎編著『国際労働力移動』東大出版会

〈か〉

- カー（1979）（Carr, E. H.）『ロシア革命』（塩川伸明訳）岩波現代選書 1979年
- カウツキー（1899）（Kautsky, K.）『農業問題』（向坂訳）岩波文庫（上下）1946年
- 梶川伸一（1989）「ネップの開始と商品交換制」『歴史学研究』591
- 梶田孝道（1988）『エスニシティと社会変動』有信堂
- 桂木健次（1974）「ロシア・ミール論の学說的整理をめぐって」『経済学研究』40-1（九大）
- 上島 武（1984）「ロシア資本主義の特徴づけによせて」『大阪経大論集』159-161
- 菊地昌典（1961）「ロシア革命史研究の視角」『歴史学研究』251
- 菊池昌典（1964-a）『ロシア農奴解放の研究』御茶の水書房
- 菊池昌典（1964-b）「日本人によるロシア把握の歴史的変遷」『歴史学研究』293
- 喜多克己（1975）「レーニンのアメリカ農業分析の方法と統計利用」『経済志林』43-2
- 木村英亮・山本敏（1979）『ソ連現代史 2』山川出版社
- 木村英亮（1989）「ツァーリズム国家の権力構造 第3節 ツァーリ=ロシアの植民地政策と外交 第4節 ツァーリ体制崩壊の始まり」大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』ミネルヴァ書房
- クォン（1987）（Kwong, P.）『チャイナタウン・イン・ニューヨーク』（芳賀・矢野訳）筑摩書房 1990年
- 楠井敏朗（1972）「西漸運動と公有地政策」鈴木圭介編著『アメリカ経済史』東大出版会
- 倉持俊一（1968）「ロシア革命の原因論をめぐって」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 倉持俊一（1977）「日本におけるロシア革命観」『思想』642
- 倉持俊一（1979）「1905年革命とその後」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社
- 倉持俊一（1980-a）『ソ連現代史1』山川出版社
- 倉持俊一（1980-b）『レーニン』講談社
- グールヴィチ（1912）（Hourwich, I. A.）：Immigration and Labour — The Economic Aspects of European Immigration to the United States ; New York and London
- ケナン（1960）（Kennan, G. F.）（尾上正男・武内辰治監修）『レーニン・スターリンと西方世界』未来社 1970年
- 小島 定（1977）「ブレハーノフ研究の問題点」名古屋大学『法政論集』72
- 小島 定（1980）「ロシアの変革とレーニン理論」『講座 資本論の研究』4 青木書店
- 小島修一（1987）『ロシア農業思想史の研究』ミネルヴァ書房

駒井 洋 (1989)『国際社会学研究』日本評論社

〈さ〉

阪本秀昭 (1989)「階級対立の激化 農民運動の展開とその特質」大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』

ミネルヴァ書房

雀部幸隆 (1980)『レーニンのロシア革命』未来社

佐藤唯行 (1984)「東欧系ユダヤ人移民に対する排斥」本田創造編『アメリカ史の研究』三省堂

佐藤芳行 (1981)「ロシアにおける農村租税制度と農民分与地的土地所有」『歴史学研究』499

佐藤芳行 (1983)「19世紀中葉のロシア西部における農業構造に関する考察」『社会経済史学』49-4

佐藤芳行 (1989)「帝国主義成立期の農業・土地問題」(第1・2節)大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』

ミネルヴァ書房

塩川伸明 (1977)「ネップの導入と労働組合」『歴史学研究』443

塩川伸明 (1986)「ネップ期の労働者の生活実態」和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社

シナニイ (1967) (Cinanni. P) : Emigration und Imperialismus, München

島田孝夫 (1986)「知識人書記の見た村の農地割替」和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社

新保 満 (1989)『カナダ社会の展開と構造』未来社

スチュワート (1976) (Stewart. P)『イギリス少数民族史』(山岸・日野訳)こびあん書房

ストークス (1969) (Stokes. E) : Late 19th Century Colonial Expansion and Attack on the Theory of Economic Imperialism ; Historical Journal 12

石戸谷重郎・伊藤幸男 (1979)「モスクワ＝ロシアの時代」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社

仙波輝之 (1982)『レーニン 1902～12』論創社

ソ連邦科学アカデミー歴史研究所編 (1962)『ロシア大十月革命史』恒文社 1967年

〈た〉

高岡健次郎 (1963)「エス・エルの農業綱領の性格とその結末」『歴史学研究』272

高須賀義博 (1988)『マルクス経済学の解体と再生』御茶の水書房

高田和夫 (1974)「第1次大戦前夜のロシア労働運動」『歴史学研究』別冊特集

高田和夫 (1989-a)「1907年の英露協定の成立過程」油井大三郎編著『世紀転換期の世界』未来社

高田和夫 (1989-b)「階級対立の激化 労働運動の展開とその特質」大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』

ミネルヴァ書房

竹内芳郎 (1970)「われわれにとって『資本論』とは何か」『思想』550～552

田中克彦 (1975)「ソ連邦における民族理論の展開」『思想』611

田中真晴 (1967)『ロシア経済思想史の研究』ミネルヴァ書房

田中真晴 (1968)「ロシアにおける革命思想・ロシアマルクス主義の理論的成立」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社

ダニーロフ (1958) (Данилов. В. П)「コルホーズ以前のソヴェト農村における土地諸関係」ダニーロフ『ロシアにおける共同体と集団化』(荒田・奥田訳)御茶の水書房 1977年

ダンコース (1979) (d'Encausse. H. C)『ソ連邦の歴史 I』(石崎訳)新評論 1985年

津川武一 (1974)『出稼ぎ』北方新社

辻 義昌 (1981)『ロシア革命と労使関係の展開』御茶の水書房

- 鶴崎雪嶺（1972）「レーニン民族理論の形成過程(1)(2)」『関西大学経済論集』22-3・4
- デーヴィス（1967）（Davis, H. B）『ナショナリズムと社会主義』（藤野訳）岩波書店 1969年
- ドイッチャー（1967）（Deutscher, I）『ロシア革命50年』（山西訳）岩波新書 1967年
- ドゥブロフスキー（1963）（Дубровский, С. М）（有馬達郎他訳）『革命前ロシアの農業問題』東大出版会 1971年
- 土肥恒之（1989）『「死せる魂」の社会史』日本エディタースクール出版部
- 外川継男（1979）「ロシア帝国の再編と動揺」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社
- 戸木田嘉久（1974）「労働貴族論にかんする覚書」『立命館経済学』22-5・6
- 富岡庄一（1977）「19世紀後半におけるロシア鉄工業の発達」『土地制度史学』76
- 富岡次郎（1988）『現代イギリスの移民労働者』明石書店
- 富岡 裕（1963-a）「1917年以前のロシア経済と社会主義」副島種典編著『ソヴェト経済の歴史と理論』日本評論社
- 富岡 裕（1963-b）「10月社会主義革命と社会主義国家の初期の経済政策」副島種典編著『ソヴェト経済の歴史と理論』日本評論社
- 富沢賢治（1971）「レーニンの『労働貴族』論」一橋大学『経済研究』22-1
- 富沢賢治（1972）「レーニンの帝国主義論体系における労働運動論」『一橋論叢』67-6
- 鳥山成人（1985）『ロシア東欧の国家と社会』恒文社
- 鳥山成人・岩間徹（1979）「ロシア帝国の成立と発展」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社

〈な〉

- 中西弘次（1972）「アメリカ資本主義の確立と独占への道」鈴木圭介編著『アメリカ経済史』東大出版会
- 長尾 久（1965）「レーニンの『4月テーゼ』」『歴史学研究』7月
- 長尾 久（1968）「二月革命から七月事件へ」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 長尾 久（1973）『ロシア10月革命の研究』社会思想社
- 中野徹三・高岡健次郎（1970）『革命家 レーニン』清水書院
- 中山 章（1988）『イギリス労働貴族』ミネルヴァ書房
- 中山弘正（1963）「ロシア資本主義成立期の諸問題」『経済志林』31-4
- 中山弘正（1964）「ロシア資本主義成立期の諸問題」『経済志林』32-2
- 中山弘正（1966-a）「帝国主義段階のロシア資本主義(1)」『経済志林』34-4
- 中山弘正（1966-b）「帝国主義段階のロシア資本主義(2)」『経済志林』35-1
- 西口章雄（1977）「ロシア資本主義発展論と『帝国主義』」入江節次郎・星野中編著『帝国主義研究 2』御茶の水書房
- 西島有厚（1968）「1905年革命とソヴェト・1905年革命論」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 西島有厚（1983）「ロシアにおけるマルクス主義の受容」『歴史評論』398
- 西山克典（1979）「第1次ロシア革命期における農民運動」『土地制度史学』83

〈は〉

- 長谷川毅（1989）『ロシア革命下ベトログラードの市民生活』中公新書
- 馬場宏二（1970）『「帝国主義論」のプラン』『社会科学研究』（東大）21-5・6
- 林 道義（1970）『ウェーバー社会学の方法と構想』岩波書店

- 林 道義 (1971)『スターリニズムの歴史的根源』御茶の水書房
- 林 道義 (1972)「書評を評す」『社会科学の方法』38
- 林 道義 (1973)「ロシア史におけるミール共同体の問題性」川島・住谷編『共同体の比較史研究』アジア経済研究所
- 原 暉之 (1977)「反ユダヤ主義とロシア・ユダヤ人社会」『思想』642
- 肥前栄一 (1973)『ドイツ経済政策史序説』未来社
- 日南田静真 (1961)「ロシア農業における雇役制度の成立と展開」『歴史学研究』別冊特集
- 日南田静真 (1966)『ロシア農政史研究』御茶の水書房
- 日南田静真 (1968)「ロシア帝国主義と第1次大戦・ストリピン農業改革」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 日南田静真 (1969)「ロシアの1905年革命」荒松雄他編著『世界歴史 帝国主義時代2』23 岩波書店
- 日南田静真 (1972)「ロシア資本主義とミール共同体」『社会科学の方法』5-5
- 日南田静真 (1973)「福富論文への『コメント』」『マルクス・コメンタール』5 現代の理論社
- 日南田静真 (1974-a)「マルクスの『農耕共同体』論」『経済学研究』24-1 (北大)
- 日南田静真 (1974-b)「帝国主義と『2つの道』論」『立命館経済学』22-5・6
- 日南田静真 (1978)「ロシアの『農民の指令』について」椎名重明編著『土地公有の史的研究』御茶の水書房
- ヒューバーマン (Huberman, L) (1947)『アメリカ人民の歴史 (上・下)』(小林・雪山訳) 岩波新書 1954年
- 平田清明 (1969)『市民社会と社会主義』岩波書店
- 平田清明 (1971)「歴史的必然と歴史的選択」(1)(2)(3)『展望』154-156
- ヒル (1947) (Hill, C) (岡稔訳)『レーニンとロシア革命』岩波新書 1955年
- ファヴル&ファヴル (1970) (Favre, P & M) (竹内良知訳)『マルクス以後のマルクス主義』白水社 1971年
- フィッシャー&マレク (1969) (Fischer, E & F. Marek) (石堂清倫訳)『レーニン』法政大学出版局 1971年
- フィールドハウス (1967) (Fieldhouse, D) The Theory of Capitalist Imperialism; London
- フォーカス (1972) (Falkus, M. E)『ロシアの工業化』(大河内監訳・岸訳) 日本経済評論社 1985年
- 藤田弘夫 (1990)『都市と国家』ミネルヴァ書房
- 藤本和貴夫 (1973)「日本におけるロシア革命史研究の現状」リープマン『ロシア革命』社会評論社 (巻末)
- 降旗節雄 (1972)『帝国主義論の史的展開』現代評論社
- ブリューワー (1980) (Brewer, A) : Marxist Theories of Imperialism : A Critical Survey : London-Boston = henley
- ヘンガー (1913) (Henger, H) : Die kapitalanlage der Franzosen in Wertpapieren" Stuttgart und Berlin
- ボクロフスキー (1920) (Покровский, М. Н) (岡田宗司監訳)『ロシア史 I・II・III』勁草書房 1975~76年
- 保坂哲郎 (1972)「レーニンの『辺境地』論」京都大学『経済論叢』110-1・2
- ボッファ (1976) (Boffa, G) (坂井信義・大久保昭男訳)『ソ連邦史1』大月書店 1979年
- ホブスボーム (1964) (Hobsbaum, E. J) (市川泰治郎訳)『共同体の経済構造』未来社 1969年
- 本多健吉 (1972)「非資本主義発展の基礎条件」一橋大学『経済研究』23-3

〈ま〉

- 真木実彦（1965）「旧ロシア資本主義再生産構造と農業形態分析の一視角(1)(2)」『商学論集』（福島大学）34
 - 1・4
- 真木実彦（1966）「旧ロシア資本主義と農業構造」『商学論集』（福島大学）35-3
- 真木実彦（1989）「ロシア帝国主義論」大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』ミネルヴァ書房
- 牧原憲夫（1977）「源蕃完了期革命論としての『2つの道』論」『歴史学研究』448
- マクレラン（1979）（McLellan, D）重田晃一他訳『アフター・マルクス』新評論 1985年
- 増田富寿（1958）『ロシア農村社会の近代化過程』御茶の水書房
- 松岡 保（1964-a）「ナロードニキのロシア資本主義論」桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』筑摩書房
- 松岡 保（1964-b）「ロシア資本主義没落論の経済理論的基礎」『人文学報』20（京都大学）
- 松岡 保（1968）「ロシアにおける革命思想・ナロードニキ主義」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社
- 松田道雄（1970）『ロシアの革命』河出書房
- 松村高夫（1987）「イギリスにおける労働貴族論争」『日本労働協会雑誌』340
- 松元幸子（1969）「初期コミンテルンにおける民族解放理論の形成」『歴史学研究』355
- マルクス（1847）（Marx, K）『哲学の貧困』全集4巻
- マルクス（1852）（Marx, K）「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」全集8巻
- マルクス（1867-b）（Marx, K）『資本論第1巻』新日本出版社 第4分冊
- マルクス（1877-a）（Marx, K）「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザビースキ』編集部への手紙」全集19巻
- マルクス（1867-c）（Marx, K）「11月2日 エンゲルスへの手紙」全集31巻
- マルクス（1867-d）（Marx, K）「11月30日 エンゲルスへの手紙」全集31巻
- マルクス（1869-a）（Marx, K）「11月18日 エンゲルスへの手紙」全集32巻
- マルクス（1869-b）（Marx, K）「12月10日 エンゲルスへの手紙」全集32巻
- マルクス（1870）（Marx, K）「4月9日 マイヤー&フォークトへの手紙」全集32巻
- マルクス（1877-b）（Marx, K）「ソルゲへの手紙 9月27日」全集34巻
- マルクス（1881-a）（Marx, K）「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙」全集19巻
- マルクス（1881-b）（Marx, K）「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙 第1草稿」全集19巻
- マルクス（1881-c）（Marx, K）「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙 第2草稿」全集19巻
- マルクス・エンゲルス（1882）（Marx, K & F. Engels）「共産党宣言ロシア語版第2版序文」全集19巻
- マルクス・エンゲルス（1848）（Marx, K & F. Engels）『共産党宣言』全集4巻
- 丸山敬一（1980）「スターリン民族理論の特質」『中京法学』（中京大学）15-1
- 丸山敬一（1985）「民族自決権をめぐるレーニンとルクセンブルク」『中央法学』（中京大学）19-4
- 丸山直起（1990）『アメリカのユダヤ人社会』ジャパン・タイムス
- 南塚信吾（1976）「ネップ期の諸問題」菊地昌典編『ソビエト史研究入門』東大出版会
- 宮野啓二（1972）「北部における産業革命」鈴木圭介編著『アメリカ経済史』東大出版会
- メドヴェージェフ（1979）（Medvedev, R. A）（石井規衛訳）『10月革命』未来社 1989年
- 森 廣正（1986）『現代資本主義と外国人労働者』大月書店
- 森岡孝二（1979）「『帝国主義論の方法』論争の意味するもの」『社会科学の方法』121

森田桐郎編著 (1987) 『国際労働力移動』 東大出版会

〈や〉

安川悦子 (1982) 『イギリス労働運動と社会主義』 御茶の水書房

保田孝一 (1971) 『ロシア革命とミール共同体』 御茶の水書房

保田孝一 (1978) 「国家権力・共同体・所有権近代化」 『思想』 654

矢吹満男 (1976) 「『2つの道』論と『帝国主義論』」 『土地制度史学』 73

山内靖子 (1974) 「土地の社会化にみられるエスエルの思想的特質」 『歴史学研究』 412

山之内靖 (1969) 『マルクス・エンゲルスの世界史像』 未来社

油井大三郎 (1989) 「19世紀後半のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動」 『世紀転換期の世界』 未来社

游 仲勲 (1973) 「マルクスの労働力国際移動論」

吉岡昭彦 (1983) 「帝国主義論と土地所有論」 『社会科学の方法』 164

米川哲夫 (1968) 「国内戦期における文盲撲滅運動」 江口朴郎編書 『ロシア革命の研究』 中央公論社

〈ら〉

ラヴォールイチェフ (1985) (V. Я) 「農奴解放後ロシアの専制と経済」 藤原彰編著 『ロシアと日本』 彩流社

ラッセル (1920) (Russell, B.) (河井秀和訳) 『ロシア共産主義』 みすず書房 1990年

リープマン (1967) (Liebman, M.) (茂田東子訳) 『ロシア革命』 社会評論社 1973年

ルイス (1965) (Lewis, J.) (玉井茂他訳) 『マルクスの生涯と思想』 法政大学出版局 1974年

レヴィ (1976) (Löwy, M.) 「マルクス主義者と民族問題」 (丸山敬一訳) 『中京法学』 (中京大学) 20-2, 1985年

レーニン (1913-k) (Ленин, В.) 「ロシア社会民主労働党中央委員会と党活動家との会談の諸決議」 全集 19巻

レーニン (1913-l) (Ленин, В.) 「民族問題に関するテーゼ」 全集19巻

レーニン (1914-c) (Ленин, В.) 「民族自決権について」 全集20巻

レーニン (1914-d) (Ленин, В.) 「大ロシア人の民族的誇りについて」 全集21巻

レーニン (1914-e) (Ленин, В.) 「論文『民族自決権について』のいくつかのプラン」 『民族問題ノート』 大月書店 1977年

レーニン (1914-f) (Ленин, В.) 「民族問題に関する講演の要綱」 『民族問題ノート』 大月書店 1977年

レーニン (1914-g) (Ленин, В.) 「講演『民族問題』のための資料」 『民族問題ノート』 大月書店 1977年

レーニン (1914-h) (Ленин, В.) 「民族政策の問題によせて」 全集20巻

レーニン (1915-d) (Ленин, В.) 「ロシアの敗北と革命的危機」 全集21巻

レーニン (1915-e) (Ленин, В.) 「革命の2つの方向について」 全集21巻

レーニン (1915-f) (Ленин, В.) 「いくつかのテーゼ」 全集21巻

レーニン (1915-g) (Ленин, В.) 「平和の問題」 全集21巻

レーニン (1915-h) (Ленин, В.) 「革命的プロレタリアートと民族自決権」 全集21巻

レーニン (1915-i) (Ленин, В.) 「論文『革命的プロレタリアートと民族自決権』のために」 『民族問題ノート』 大月書店 1977年

レーニン (1915-j) (Ленин, В.) 「帝国主義と民族自決権：梗概」 全集39巻

レーニン（1915-k）（Ленин, В）「講演『帝國主義と民族自決権』のために」『民族問題ノート』大月書店 1977年

レーニン（1915-l）（Ленин, В）「社会主義と戦争」全集21巻

レーニン（1916-f）（Ленин, В）「『講和綱領』について」全集22巻

レーニン（1916-g）（Ленин, В）「社会主義革命と民族自決権」全集22巻

レーニン（1916-h）（Ленин, В）「自決にたいする討論の総括」全集22巻

レーニン（1917-g）（Ленин, В）「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」全集24巻

レーニン（1917-h）（Ленин, В）「戦術に関する手紙」全集24巻

レーニン（1917-i）（Ленин, В）「ロシアにむかって出発するボリシェビキたちへの電報」全集23巻

レーニン（1917-j）（Ленин, В）「遠方からの手紙」全集23巻

レーニン（1917-k）（Ленин, В）「スイス労働者への告別の手紙」全集23巻

レーニン（1917-l）（Ленин, В）「政論家の日記から」全集25巻

レーニン（1917-m）（Ленин, В）「3つの危機」全集25巻

レーニン（1917-n）（Ленин, В）「立憲的幻想について」全集25巻

レーニン（1917-o）（Ленин, В）「さしせまる破局、それとどうたたかうか」全集25巻

レーニン（1917-p）（Ленин, В）「農民代表ソヴェト臨時全ロシア大会」全集26巻

レーニン（1917-q）（Ленин, В）「第1回全ロシア海軍大会での演説」全集26巻

レーニン（1917-r）（Ленин, В）「3月6日の電報」全集23巻

レーニン（1917-s）（Ленин, В）「ロシアの市民へ！」全集26巻

レーニン（1917-t）（Ленин, В）「ペトログラード労働者・兵士ソヴェトの会議」全集26巻

レーニン（1917-u）（Ленин, В）「労働者と勤労被搾取農民の同盟」全集26巻

レーニン（1918-g）（Ленин, В）「ロシア共産党（ボ）第7回大会」全集27巻

レーニン（1918-h）（Ленин, В）「食糧独裁についての布告の基本的命題」全集27巻

レーニン（1918-i）（Ленин, В）「飢えについて」全集27巻

レーニン（1918-j）（Ленин, В）「労働者・農民・カザック・赤軍代表ソヴェト第6回臨時全ロシア大会」全集28巻

レーニン（1918-k）（Ленин, В）「プロレタリア革命と背教者カウツキー」全集28巻

レーニン（1920-i）（Ленин, В）「エヌ・エヌ・クレチンスキーへ」全集44巻

レーニン（1921-p）（Ленин, В）「蓄音器のレコードに録音された演説」全集32巻

レーニン（1921-q）（Ленин, В）「金属労働者の広範なモスクワ会議での演説」全集32巻

レーニン（1921-r）（Ленин, В）「農民についてのテーゼの予備的な下書き」全集32巻

レーニン（1921-s）（Ленин, В）「割当徴発を現物税に代えることについての報告」全集32巻

レーニン（1921-t）（Ленин, В）「10月革命4周年によせて」全集33巻

レーニン（1921-u）（Ленин, В）「小冊子『食糧税について』のプラン」全集32巻

レーニン（1921-v）（Ленин, В）「食糧税について」全集32巻

レーニン（1921-w）（Ленин, В）「共産主義インターナショナル第3回大会」全集32巻

ロスメル（1953）（Rosmer, A）（浜田泰三・安倍住雄訳）『レーニンの下のモスクワ』柘植書房 1976年

《わ》

ワース（1984）（Werth, N）（荒田洋訳）『ロシア農民生活誌』平凡社 1985年

渡辺寛 (1963)『レーニンの農業理論』御茶の水書房

渡辺寛 (1965)「ロシア革命とレーニンの農業理論」『思想』11月

渡辺寛 (1971)「レーニン『帝国主義論』(1)(2)(3)」研究年報『経済学』(東北大学) 32-4, 33-1, 33-2

和田春樹 (1960)「『土地と自由』主義の革命理論」『歴史学研究』241

和田春樹 (1961-a)「近代ロシア社会の構造」『歴史学研究』別冊特集

和田春樹 (1961-b)「エス・ユ・ヴィッテ」『歴史学研究』5月

和田春樹 (1964)「レーニンの革命思想」『歴史学研究』288

和田春樹 (1965)「近代ロシア社会の発展構造(1)(2)」『社会科学研究』17-2・3 (東京大学)

和田春樹 (1968-a)「近代ロシア社会の法的構造」東大社会科学研究所『基本的人権 3 歴史 2』東大出版会

和田春樹 (1968-b)「二月革命」江口朴郎編著『ロシア革命の研究』中央公論社

和田春樹 (1972)「ロシア第1革命における労働問題」『社会科学研究』(東京大学) 23-4

和田春樹 (1974-a)「1896年ペテルブルグ綿工業労働者のゼネスト」『社会科学研究』(東京大学) 25-1

和田春樹 (1974-b)「フランコ・ヴェントゥーリとナロードニキ研究の現段階」『思想』606

和田春樹 (1975)『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房

和田春樹 (1977-a)「ロシア社会の構造的特質と歴史変革のコース：発言」『西洋史研究』6

和田春樹 (1977-b)「歴史の中のエスエル党」『思想』642

和田春樹 (1979)「ロシア革命」岩間徹編著『ロシア史』山川出版社

ワレン (1980) (Warren, B) : Imperiarism: Pioneer of Capitalism. London